

布志名大谷Ⅲ遺跡

一般国道9号松江道路(連結部)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

2001年3月

島根県
松江国道工事事務所
教育委員会

布志名大谷Ⅲ遺跡

一般国道9号松江道路(連結部)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

2001年3月

国土交通省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

国土交通省中国地方整備局松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路予定地内にある埋蔵文化財については道路事業者の負担によって必要な調査を実施し記録保存を行うため、島根県教育委員会と協議し同委員会の御協力のもとに昭和50年度から発掘調査を行っています。島根県八束郡玉湯町布志名地区においては当松江道路と中国横断自動車道尾道松江線と県道の連結部にあたり、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら道路建設を進めてまいりました。

本報告書は平成10年度と平成11年度に島根県八束郡玉湯町布志名で実施した布志名人谷Ⅲ遺跡の発掘調査の記録であります。この記録調査が遙かな過去に生きた先祖の生活や文化様式を時代を越えてよみがえらせ、また現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査及び本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成13年3月

国土交通省中国地方整備局
松江国道工事事務所

所長 石井一生

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局（現 国土交通省中国地方整備局）から委託を受けて、かねてより一般国道9号松江道路建設予定地内の発掘調査を行っておりますが、平成5年度からは、松江市乃木福富町から八束郡玉湯町にかけての調査に取り組んでいます。

本報告書は、平成10・11年度の2年間にわたり実施した玉湯町布志名地区に位置する布志名大谷Ⅲ遺跡について、その調査結果をとりまとめたものです。

布志名大谷Ⅲ遺跡では四隅突出型墳丘墓といわれる弥生時代後期の特徴的な墳丘墓をはじめ、古墳時代の箱式石棺墓など、弥生時代から古墳時代にかけての多数の墳墓が見つかりました。これらの発見は、この地域における墓制の変遷を知る上で有益な資料であるとともに、当時の墓域のあり方、葬送儀礼や觀念を考える上でも貴重な成果といえます。

こうした祖先の営みを物語る数々の発見は、今後、郷土の歴史の解明に大いに役立つものと思われます。本報告書が地域史を解明する糸口となり、埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるうえの一助となれば幸いに思います。

今回の発掘調査及び本書の刊行にあたり、御協力いただきました地元の皆様をはじめとする関係者に厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

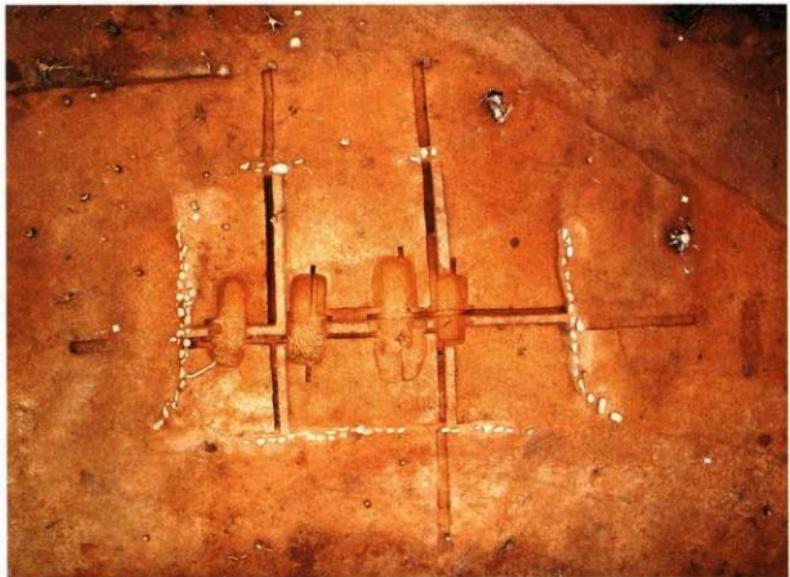
島根県教育委員会

教育長 山崎 悠雄



北 I 区調査後全景（東方向から）

巻頭図版 2

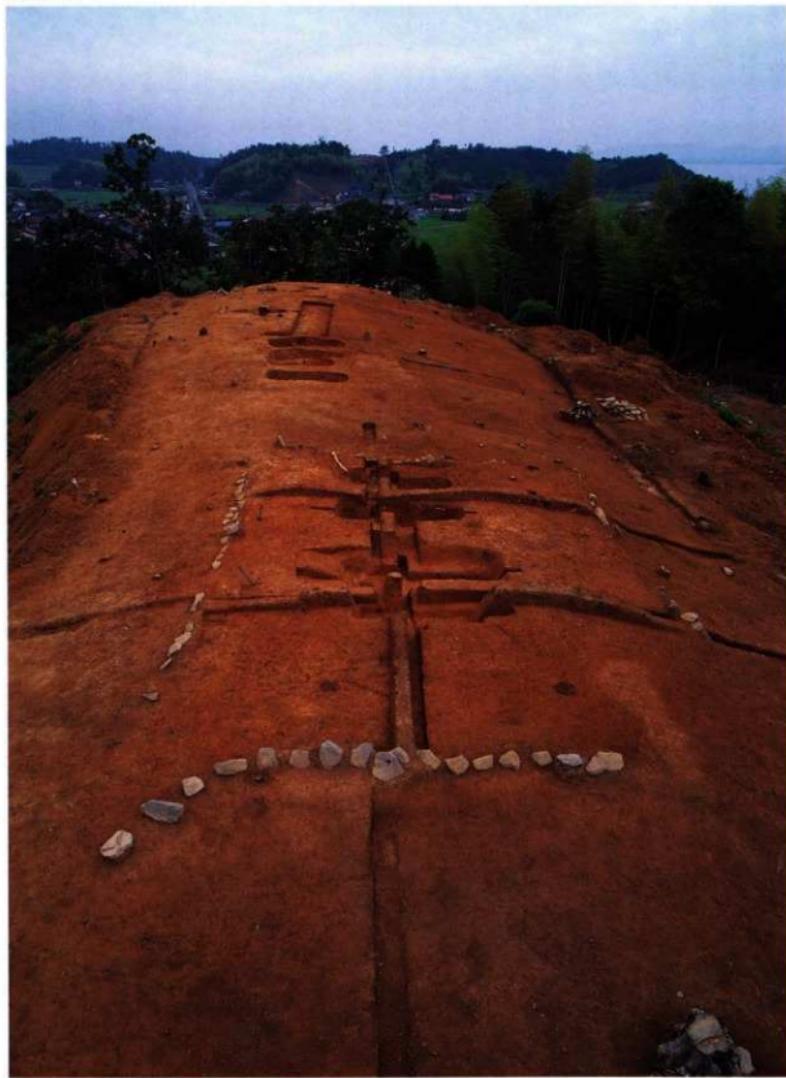


1、北 I 区 1 号墓完掘状況（上空から）（上段）
2、北 I 区 2 号墓完掘状況（上空から）（下段）

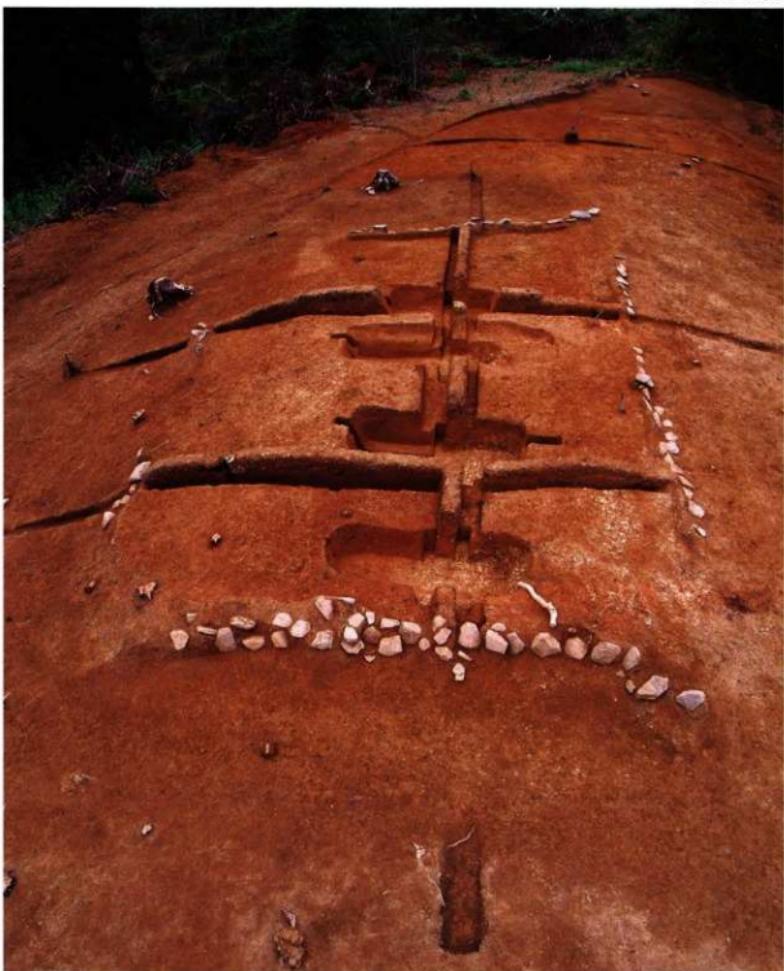


1、北I区3号墓（左）、SK04～08（右）完掘状況（上空から）（上段）
2、北I区3号墓（中）、4号墓（左）、SK04～08（右）完掘状況（上空から）（下段）

巻頭図版 4



北 I 区 1 号墓完掘状況（東方向から）

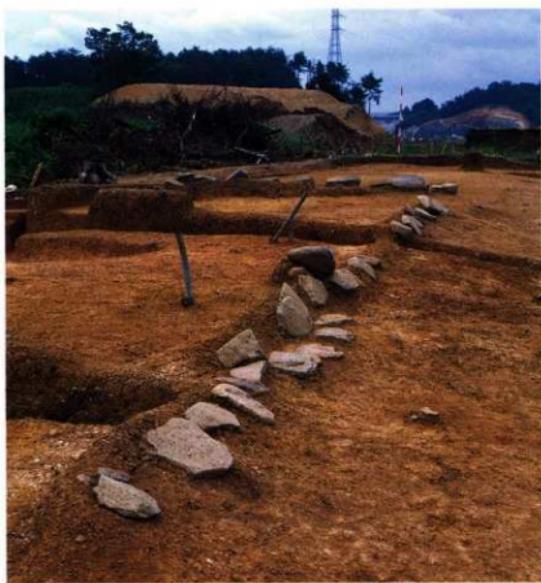


北 I 区 1 号墓完掘状況（西方向から）

卷頭図版 6



1、北Ⅰ区1号墳東辺貼石精査状況（南東方向から）（上段）
2、北Ⅰ区1号墳西辺貼石精査状況（南西方向から）（下段）



1、北Ⅰ区1号墓南辺貼石精査状況（南西方向から）（上段）
2、北Ⅰ区1号墓第2主体部土層堆積状況（北方向から）（中段）
3、北Ⅰ区1号墓第2主体部棺底面水銀朱検出状況（下段）



1、北Ⅰ区1号墓墳丘北半土層堆積状況（東方向から）（上段）
2、北Ⅰ区2号墓東辺貼石精査状況（東方向から）（下段）



1、北 I 区 3 号墓完掘状況全景（西方向から）（上段）
2、北 I 区 4 号墓石列検出状況（東方向から）（下段）



北区・南区墓壇上出土いわゆる「標石」類

例　　言

1. 本書は、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、島根県教育委員会が平成10年度と平成11年度に実施した一般国道9号松江道路連結部建設予定地内埋蔵文化財発掘調査のうち、布志名大谷Ⅲ遺跡の調査報告書である。
2. 調査組織は次の通りである。
〈平成10年度〉
【事務局】勝部 昭（文化財課長）、宍道正午（埋蔵文化財調査センター長）、福田 敏（主査）、島地徳郎（課長補佐）、秋山 実（課長補佐）、川崎 崇（企画調整係主事）
【調査員】川原和人（文化財課埋蔵文化財調査センター上幹・調査第1係長）、錦田剛志（同主事）、安達和隆（同教論兼文化財保護主事）、池田哲也（同教論文化財保護主事）
【調査指導】（敬称略）田中義昭（島根県文化財保護審議会委員、島根大学法文学部教授）、蓮岡法暉（島根県文化財保護審議会委員）、渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）
〈平成11年度〉
【事務局】宍道正午（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、秋山 実（同総務課長）、松本岩雄（同調査課長）、今岡 宏（同総務係長）
【調査員】川原和人（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター上幹・調査第1係長）、錦田剛志（同主事）、中野靖曉（同教論兼主事）、中岡宏樹（同臨時職員）
【調査指導】（敬称略）田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、蓮岡法暉（島根県文化財保護審議会委員）、渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）、松田 潤（鳥取県埋蔵文化財センター）、岩田文章（鳥取県淀江町教育委員会）
3. 発掘作業（発掘作業員雇用・測量発注ほか）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、㈳中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から㈳中国建設弘済会（島根支部）へ委託して実施した。
4. 報告書の作成にあたっては、以下の方々から有益な指導、助言をいただいた。記して感謝の意を表する。（敬称略 所属機関名は、平成11年度当時）
【石材鑑定】島根県工業技術センター 永島晴夫 同 浜田工業技術指導所 井上多津男
【赤色顔料鑑定】東京国立文化財研究所 杣津信明
5. 掃囲中の方位は、測量法による平面直角第Ⅲ座標系のX軸方向を指す。従って、磁北より7°55'、東北より0°21'東の方向を指す。レベル高は海拔高を指す。
6. 本書に掲載した「遺跡位置図」は国土交通省国土地理院発行の地形図を利用した。
7. 本書に掲載した遺物の実測、浮写、写真撮影は主として次の者が行った。
【実測・製図】錦田剛志、赤木 努、安達和隆、池田哲也、奥村昌子、中岡宏樹、小豆沢美貴
【浮写】赤木 努、中岡宏樹、小豆沢美貴、高橋幸江、藤原須美子
【写真撮影】足田 敦
8. 本書の執筆は、名越顕秀（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター調査課）、錦田剛志（平成12年4月から島根県立博物館学芸課）が行った。
9. 出土資料及び実測図・写真等の資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	(錦田剛志)	1
第2章 位置と環境	(名越頭秀)	2
第3章 調査の経過と概要	(錦田剛志)	11
第4章 南区の調査	(錦田剛志)	17
第1節 基本層序	17
第2節 南区東半部の遺構と遺物	17
第3節 南区西半部の遺構と遺物	29
第5章 北区の調査	(錦田剛志)	46
第1節 北Ⅰ区の遺構と遺物	46
第2節 北Ⅱ区の遺構と遺物	105
第3節 北Ⅲ区の遺構と遺物	111
第6章 小 結	(錦田剛志)	112

挿 図 目 次

第1図	布志名大谷Ⅲ遺跡の位置	6
第2図	布志名大谷Ⅲ遺跡の位置と周辺の遺跡 (S= 1 : 25000)	8
第3図	布志名大谷Ⅰ・Ⅲ遺跡調査対象地位置図 (S= 1 : 2000)	10
第4図	南区調査前地形測量図・調査区配置図 (S= 1 : 400)	14
第5図	南区西半部土層断面実測図 (S= 1 : 80)	15
第6図	南区調査後地形測量図・遺構配置図 (S= 1 : 300)	16
第7図	南区東半部尾根頂部付近調査後地形測量図 (S= 1 : 100)	18
第8図	南区東半部尾根頂部付近土層断面実測図 (S= 1 : 100)	19
第9図	南区SK01実測図 (S= 1 : 30)	20
第10図	南区SK02実測図 (S= 1 : 30)	21
第11図	南区SK02石竹・標石出土状況実測図 (S= 1 : 30)	21
第12図	南区SK03実測図 (S= 1 : 30)	23
第13図	南区SK04実測図 (S= 1 : 30)	24
第14図	南区SD01・同礫石出土状況実測図 (S= 1 : 60)	25
第15図	南区SD02実測図 (S= 1 : 60)	26
第16図	南区SD03実測図 (S= 1 : 60)	26
第17図	南区東半部出土遺物実測図 (S= 1 : 3)	28
第18図	南区1号墳調査前地形測量図 (S= 1 : 80)	30
第19図	南区1号墳填丘土層断面実測図 (S= 1 : 60)	31
第20図	南区1号墳調査後地形測量図 (S= 1 : 80)	32
第21図	南区1号墳溝実測図 (S= 1 : 60)	33
第22図	南区1号墳上部都実測図 (S= 1 : 30)	33
第23図	南区1号石棺墓実測図 (S= 1 : 30)	34
第24図	南区1号石棺墓墓塚掘り方実測図 (S= 1 : 30)	35
第25図	南区2号石棺墓実測図 (S= 1 : 30)	36
第26図	南区2号石棺墓墓塚掘り方実測図 (S= 1 : 30)	37
第27図	南区3号石棺墓実測図 (S= 1 : 30)	38
第28図	南区3号石棺墓墓塚掘り方実測図 (S= 1 : 30)	39
第29図	南区3号石棺墓遺物出土状況実測図 (S= 1 : 30)	40
第30図	南区西半部出土遺物実測図 (S= 1 : 3)	41
第31図	南区4号石棺墓実測図 (S= 1 : 30)	42
第32図	南区4号石棺墓墓塚掘り方実測図 (S= 1 : 30)	43
第33図	南区1号石蓋土塙墓実測図 (S= 1 : 30)	44
第34図	南区SK05実測図 (S= 1 : 30)	45
第35図	北区調査前地形測量図・調査区配置図 (S= 1 : 400)	47

第36図	北Ⅰ区調査前地形測量図 (S=1:300)	48
第37図	北Ⅰ区上層断面実測図 (S=1:60)	49
第38図	北Ⅰ区調査後地形測量図・遺構配置図 (S=1:300)	50
第39図	北Ⅰ区1号墓調査前地形測量図 (S=1:100)	52
第40図	北Ⅰ区1号墓墳丘上層断面実測図 (S=1:80)	53
第41図	北Ⅰ区1号墓貼石検出状況図 (S=1:100)	56
第42図	北Ⅰ区1号墓墳丘測量図 (S=1:100)	57
第43図	北Ⅰ区1号墓遺構配置図 (S=1:80)	58
第44図	北Ⅰ区1号墓貼石(平面・立面)実測図 (S=1:60)	59
第45図	北Ⅰ区1号墓第1主体部実測図 (S=1:30)	61
第46図	北Ⅰ区1号墓第1主体部標石出土状況実測図 (S=1:30)	62
第47図	北Ⅰ区1号墓第2主体部実測図・同水銀朱出土状況実測図 (S=1:30)	63
第48図	北Ⅰ区1号墓第3主体部実測図 (S=1:30)	65
第49図	北Ⅰ区1号墓第4主体部実測図 (S=1:30)	67
第50図	北Ⅰ区1号墓上主要遺物出土状況図 (S=1:80)	69
第51図	北Ⅰ区1号墓出土遺物実測図 (1~10はS=1:3、11~13はS=1:2)	70
第52図	北Ⅰ区2号墓調査前地形測量図 (S=1:100)	74
第53図	北Ⅰ区2号墓土層断面実測図 (S=1:60)	75
第54図	北Ⅰ区2号墓調査後地形測量図 (S=1:100)	76
第55図	北Ⅰ区2号墓主要遺物出土状況図 (S=1:40)	78
第56図	北Ⅰ区2号墓貼石実測図 (S=1:40)	79
第57図	北Ⅰ区2号墓主体部実測図 (S=1:30)	80
第58図	北Ⅰ区2号墓北方集石状遺構実測図 (S=1:30)	81
第59図	北Ⅰ区2号墓付近出土遺物実測図 (S=1:3)	81
第60図	北Ⅰ区3号墓実測図 (S=1:40)	83
第61図	北Ⅰ区4号墓実測図 (S=1:40)	86
第62図	北Ⅰ区4号墓石列断面実測図 (S=1:40)	87
第63図	北Ⅰ区4号墓主体部実測図 (S=1:30)	88
第64図	北Ⅰ区SK04~08遺構配置図 (S=1:60)	89
第65図	北Ⅰ区SK04実測図 (S=1:30)	90
第66図	北Ⅰ区SK05実測図 (S=1:30)	91
第67図	北Ⅰ区SK05遺物出土状況実測図 (S=1:30)	92
第68図	北Ⅰ区SK05出土遺物実測図 (S=1:3)	93
第69図	北Ⅰ区SK06~08実測図 (S=1:30)	94
第70図	北Ⅰ区SK08標石出土状況実測図 (S=1:30)	96
第71図	北Ⅰ区SK08付近出土遺物実測図 (S=1:3)	97
第72図	北Ⅰ区SK07実測図 (S=1:30)	98
第73図	北Ⅰ区SK07付近出土遺物実測図 (S=1:3)	99

第74図 北Ⅰ区SK01実測図 (S=1:30)	100
第75図 北Ⅰ区SK02実測図・同縄石出土上状況図 (S=1:30)	101
第76図 北Ⅰ区SK03実測図 (S=1:30)	102
第77図 北Ⅰ区SK09実測図 (S=1:30)	102
第78図 北Ⅰ区SK09出土遺物実測図 (S=1:2)	103
第79図 北Ⅱ区調査後地形測量図・遺構配置図 (S=1:100)	105
第80図 北Ⅱ区SK10実測図 (S=1:30)	106
第81図 北Ⅱ区1号石棺墓検出状況・同土層断面実測図 (S=1:30)	107
第82図 北Ⅱ区1号石棺墓実測図・同遺物出土状況図 (S=1:30)	108
第83図 北Ⅱ区1号石棺墓墳掘り方実測図 (S=1:30)	109
第84図 北Ⅱ・Ⅲ区出土遺物実測図 (1~2はS=1:3、3はS=2:3)	110
第85図 北Ⅲ区調査後地形測量図・遺構配置図 (S=1:100)	110
第86図 北Ⅲ区石列実測図 (S=1:30)	111

図 版 目 次

- 卷頭図版 1 北Ⅰ区調査後全景（東方向から）
- 卷頭図版 2 1、北Ⅰ区1号墓完掘状況（上空から）
2、北Ⅰ区2号墓完掘状況（上空から）
- 卷頭図版 3 1、北Ⅰ区3号墓（左）、SK04~08（右）完掘状況（上空から）
2、北Ⅰ区3号墓（中）、4号墓（左）、SK04~08（右）完掘状況（上空から）
- 卷頭図版 4 北Ⅰ区1号墓完掘状況（東方向から）
- 卷頭図版 5 北Ⅰ区1号墓完掘状況（西方向から）
- 卷頭図版 6 1、北Ⅰ区1号墓東辺貼石精査状況（南東方向から）
2、北Ⅰ区1号墓西辺貼石精査状況（南西方向から）
- 卷頭図版 7 1、北Ⅰ区1号墓南辺貼石精査状況（南西方向から）
2、北Ⅰ区1号墓第2主体部土層堆積状況（北方向から）
3、北Ⅰ区1号墓第2主体部棺底面水銀朱検出状況
- 卷頭図版 8 1、北Ⅰ区1号墓墳丘北半土層堆積状況（東方向から）
2、北Ⅰ区2号墓東辺貼石精査状況（東方向から）
- 卷頭図版 9 1、北Ⅰ区3号墓完掘状況全景（西方向から）
2、北Ⅰ区4号墓石列検出状況（東方向から）
- 卷頭図版10 北区・南区墓墳上出土いわゆる「擦石」類

- 図版1 1、南区東半部尾根頂部付近調査前全景（東方向から）
2、同 マウンド状地形調査前全景（東方向から）
- 図版2 南区東半部尾根頂部付近土壤群SK01・02, SD01, SK03・04（東方向から）
- 図版3 1、南区SK01完掘状況（東方向から） 2、同 SK02検出状況（西方向から）
3、同 SK02石杵・円礫出土状況（西方向から）
- 図版4 1、南区SK02石杵・蝶石出土状況（北方向から） 2、同 SK02完掘状況（東方向から）
- 図版5 1、南区SK03（手前）・04（奥）完掘状況（東方向から）
2、同 SK03完掘状況（北方向から） 3、同 SK04完掘状況（東方向から）
- 図版6 1、南区SK04完掘状況（北東方向から） 2、同 SD02検出状況（北方向から）
3、同 SK02完掘状況（南方向から）
- 図版7 1、南区SD01蝶石出土状況（東方向から）
2、同 SD01完掘状況（奥はSK03）（東方向から）
- 図版8 1、南区東半部マウンド状地形・SD03（南東方向から） 2、同（東方向から）
- 図版9 1、南区西半部調査前全景（東方向から） 2、同 調査後全景（東方向から）
- 図版10 南区西半部右棺墓、石蓋上埴基、土壤検出状況全景（東方向から）
- 図版11 1、南区1号墳調査前全景（東方向から） 2、同上 上体部土壤検出状況（北方向から）
3、同左 完掘状況（北方向から）
- 図版12 1、南区1号墳調査状況（東方向から） 2、同 調査後全景（東方向から）
- 図版13 1、南区1号石棺墓蓋石検出状況（北方向から） 2、同 石棺内（北方向から）
- 図版14 1、南区2号石棺墓蓋石検出状況（西方向から） 2、同（南方向から）
- 図版15 1、南区2号右棺墓棺内溝合状況（南方向から） 2、同 石棺内（東方向から）
- 図版16 1、南区2号石棺墓底石検出状況（南方向から） 2、同 墓壙掘り方（東方向から）
- 図版17 1、南区3号石棺墓蓋石検出状況（北方向から） 2、同（西方向から）
3、同 石棺開蓋状況（西方向から）
- 図版18 1、南区3号石棺墓須恵器出土状況（北方向から） 2、同 近景（北東方向から）
- 図版19 南区3号右棺墓石棺内（西方向から）
- 図版20 1、南区3号石棺墓底石検出状況（北方向から） 2、同 墓壙掘り方（西方向から）
- 図版21 1、南区4号石棺墓蓋石検出状況（北東方向から） 2、同 石棺開蓋状況（北西方向から）
3、同 石棺内（北西方向から）
- 図版22 1、南区4号石棺墓石棺内（北東方向から） 2、同 墓壙掘り方（西方向から）
- 図版23 1、南区1号石蓋上埴基検出状況（北西方向から） 2、同 土壇内（北東方向から）
- 図版24 1、南区1号石蓋土壤蓋石検出状況（南方向から）
2、同上（手前に須恵器）（東方向から） 3、同上 須恵器出土状況近景（東方向から）
- 図版25 1、南区SK05（手前）、3号右棺墓墓壙完掘状況（奥）（北東方向から）
2、同 SK05完掘状況（南東方向から）
- 図版26 1、北I区東半調査前全景（西方向から） 2、北I区調査前全景（東方向から）
- 図版27 1、北I区1号墓トレーン調査・南東隅貼石検出状況（東方向から）
2、北I区西半調査前近景（東方向から）

- 図版28 1、北Ⅰ区1号墓貼石検出状況（東方向から） 2、同上（西方向から）
- 図版29 1、北Ⅰ区1号墓東辺貼石検出状況（東方向から） 2、同上（北東方向から）
3、同上（南東方向から）
- 図版30 1、北Ⅰ区1号墓西辺貼石検出状況（西方向から） 2、同上（北西方向から）
3、同上 南辺貼石検出状況（南西方向から）
- 図版31 1、北Ⅰ区1号墓北辺貼石検出状況（北方向から）
- 2、同 東溝内土層堆積状況（南方向から） 3、同 西溝内土層堆積状況（南方向から）
- 図版32 1、北Ⅰ区1号墓主体部全景（西方向から）
2、同 第1（右）・第2（左）主体部検出状況（南方向から）
- 図版33 1、北Ⅰ区1号墓第1（右）・第2（左）主体部（南方向から）
2、同 第1（手前）・第2（奥）主体部（東方向から）
- 図版34 1、北Ⅰ区1号墓第1主体部完掘状況（北方向から）
2、同上 土層堆積状況（北方向から）
- 図版35 1、北Ⅰ区1号墓第2主体部（木棺裏込土を残した状態）（北方向から）
2、同左（南方向から） 3、同上 完掘状況（北方向から）
- 図版36 1、北Ⅰ区1号墓第2主体部上層堆積状況（北方向から） 2、同上 完掘状況（北方向から）
- 図版37 1、北Ⅰ区1号墓第3主体部土層堆積状況（北方向から） 2、同上 完掘状況（北方向から）
- 図版38 1、北Ⅰ区1号墓第4主体部土層堆積状況（北方向から） 2、同上 完掘状況（北方向から）
- 図版39 北Ⅰ区1号墓完掘状況（東方向から）
- 図版40 1、北Ⅰ区1号墓完掘状況全景（東方向から） 2、同上（西方向から）
- 図版41 1、北Ⅰ区1号墓東辺貼石精査状況（東方向から） 2、同上（南東方向から）
- 図版42 1、北Ⅰ区1号墓東辺貼石精査状況（北東方向から）
2、同 西辺貼石精査状況（西方向から） 3、同上（南西方向から）
- 図版43 1、北Ⅰ区1号墓西辺貼石精査状況（北西方向から）
2、同 南辺貼石精査状況（南西方向から）
- 図版44 1、北Ⅰ区1号墓南辺貼石精査状況（南東方向から） 2、同 精査状況（部分）（南方向から）
3、同 北辺貼石精査状況（北方向から）
- 図版45 1、北Ⅰ区1号墓東辺貼石断割状況（北方向から）
2、同 西辺貼石断割状況（南方向から） 3、同 南辺貼石断割状況（東方向から）
- 図版46 1、北Ⅰ区1号墓東辺貼石除去後（東方向から） 2、同 西辺貼石除去後（西方向から）
3、同 贴石除去後全景（西方向から）
- 図版47 1、北Ⅰ区2号墓調査前全景（東方向から） 2、同上 調査後全景（東方向から）
- 図版48 1、北Ⅰ区2号墓トレンチ調査・東辺貼石検出状況（東方向から）
2、同 東溝内土層堆積状況（南方向から） 3、同 東辺貼石精査状況（東方向から）
- 図版49 1、北Ⅰ区2号墓東辺貼石精査状況近景（南方向から） 2、同上（北方向から）
3、同 北東隅貼石精査状況（北方向から）
- 図版50 1、北Ⅰ区2号墓主体部検出状況（西方向から） 2、同 完掘状況（北方向から）
- 図版51 1、北Ⅰ区2号墓主体部完掘状況（西方向から）

- 2、同 北東隅貼石断削状況（北方向から） 3、同 東辺貼石除去後（東方向から）
図版52 1、北Ⅰ区3号墓検出状況（東方向から） 2、同 完掘状況（南方向から）
3、同 貼石精査状況（南方向から）
図版53 1、北Ⅰ区3号墓完掘状況全景（西方向から） 2、同 貼石断削状況（東方向から）
3、同 貼石除去後（南東方向から）
図版54 1、北Ⅰ区4号墓石列検出状況 SK01（右上）・SK02（右下）（東方向から）
2、同 4号墓SK09（右上）・SK01（右中）・SK02（右下）完掘状況（東方向から）
図版55 1、北Ⅰ区4号墓南辺石列検出状況（北方向から） 2、同 南辺石列精査状況（東方向から）
図版56 1、北Ⅰ区4号墓石列断削状況（東方向から） 2、同 東辺石列精査状況（南方向から）
図版57 1、北Ⅰ区4号墓主体部完掘状況（北方向から） 2、同 南辺石列除去後（北方向から）
図版58 1、北Ⅰ区SK04・05・08・06・07（手前より）（西方向から）
2、同左（奥より）（東方向から） 3、北Ⅰ区SK04・05・08・06（左より）（南方向から）
図版59 1、北Ⅰ区SK04調査状況（東方向から） 2、北Ⅰ区SK05検出状況（南方向から）
図版60 1、北Ⅰ区SK05角砾・磨石・土器出土状況（南方向から）
2、同上 調査状況（南方向から） 3、北Ⅰ区SK07（左）・06（右）検出状況（北方向から）
図版61 1、北Ⅰ区SK08（左）・06（右）調査状況（南方向から） 2、同上 完掘状況（南方向から）
図版62 1、北Ⅰ区SK08板状石出土状況近景（南方向から） 2、同 SK07上器出土状況近景
3、同上 調査状況（南方向から）
図版63 1、北Ⅰ区SK07（手前）・06・08（奥）完掘状況（東方向から）
2、北Ⅰ区土壤墓群調査風景 3、北Ⅰ区4号墓付近調査風景
図版64 1、北Ⅰ区SK01完掘状況（北方向から） 2、北Ⅰ区SK02砾石検出状況（北方向から）
3、同上 完掘状況（北方向から）
図版65 1、北Ⅰ区SK03完掘状況（東方向から） 2、北Ⅰ区SK09遺物出土状況（西方向から）
3、同上 完掘状況（西方向から）
図版66 1、北Ⅱ区SK01完掘状況（西方向から）
2、北Ⅱ区1号石棺墓溝・蓋石検出状況（東方向から） 3、同上（北東方向から）
図版67 1、北Ⅱ区1号石棺墓蓋石検出状況（南方向から） 2、同上 石棺開蓋状況（北方向から）
図版68 1、北Ⅱ区1号石棺墓石棺内（南方向から） 2、同上（東方向から）
図版69 1、北Ⅲ区完掘状況（東方向から） 2、北区調査指導（H11. 5. 25）
3、北区現地説明会（H11. 6. 19）
図版70 南区東半部出土遺物
図版71 南区東半部・西半部出土遺物
図版72 北Ⅰ区1号墓出土遺物
図版73 北Ⅰ区2号墓・SK05出土遺物
図版74 北Ⅰ区SK07・08出土遺物
図版75 北Ⅰ区SK09・北Ⅱ区1号石棺墓出土遺物

平成10年度調査参加者

第1章 調査に至る経緯

一般国道9号松江道路は、松江市街地の交通渋滞の解消を目的に昭和47年に都市計画決定され、起点の八束郡東出雲町出雲郷から終点の八束郡玉湯町布志名に至る10.7kmにおいて建設工事が進められている。

中国横断自動車道尾道松江線との連結部分に当たる玉湯町布志名の終点部分（便宜上「松江道路連結部」と呼ぶ）については、平成2年に建設省松江国道工事事務所から島根県教育委員会に建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地に関する照会があった。これを受けて島根県教育委員会は、随時、埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施した。

布志名大谷Ⅲ遺跡周辺は、平成8年度に詳細な分布調査を再度実施し、遺跡のおよその範囲を把握した。また、隣接する布志名大谷Ⅰ遺跡（1号墳）については、平成7年度に実施された松江道路西地区（松江市福富町から八束郡玉湯町布志名に至る1.6km区間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査^(註1)ですでに確認されていた。

これらの調査結果を踏まえ、連結部の遺跡として、布志名大谷Ⅰ遺跡、布志名大谷Ⅲ遺跡ほかについて平成10年7月1日付けで建設省松江国道工事事務所と島根県教育委員会との間で発掘調査の委託契約を交わした。

大谷Ⅰ遺跡（1号墳）の発掘調査は、平成10年8月から開始し12月までの5ヶ月をかけて実施した。その結果、古墳時代前期の方墳1基を検出した。

大谷Ⅲ遺跡は、便宜上、谷間を境に調査区を北区と南区に二分した（第3図）。

南区については、平成10年11月から12月までの2ヶ月間にわたり全面発掘調査を実施し、弥生時代の土塙墓、古墳時代の石棺墓などを複数検出して完了した。

北区については、平成10年度に南区の調査と並行して、調査範囲を確定するためのトレンチ調査、地形測量を実施し、検出された一部遺構（北Ⅱ区右棺墓等）の本調査を実施した。トレンチ調査によって、北区には貼石を持つ墳墓が少なくとも2基以上存在することが確認され、平成11年度引き続き本調査を実施することにした。

平成11年4月から6月末にかけては、北Ⅰ区の全面発掘調査を実施し、四隅突出型埴丘墓3基と多数の土塙墓等を検出した。四隅突出型埴丘墓という当地における弥生時代の墓制を代表する遺構が検出されたことから、調査を一端中止し、建設省（現 国土交通省）をはじめ関係機関と遺跡の取扱いに関する協議を実施した。協議の結果、遺跡が道路のインター部に位置し、三層におよぶ立体構造が予定される場所にあたることから、設計変更による現状保存は難しいとの結論に至った。

記録保存やむなしとの結論を受け、同年7月12日から22日まで、埴丘の断ち割り、貼石の撤去など記録保存を前提とする追加調査を実施して、現地調査を完了した。

(註1)『布志名大谷Ⅰ遺跡・布志名大谷Ⅱ遺跡・布志名才の神遺跡 一般国道9号松江道路（西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4』 1997 島根県教育委員会

第2章 遺跡の位置と環境

布志名大谷Ⅲ遺跡は八束郡玉湯町布志名に所在する遺跡である。遺跡は、玉湯町に位置する花仙山（標高199.7m）から派生し宍道湖に向かって伸びる低丘陵上に立地している。布志名大谷Ⅲ遺跡は丘陵の西側に立地しており、古墳時代前期の方墳1基が出土した布志名大谷I遺跡の西隣りにある。

玉湯町は宍道湖の南東岸に位置し、東は松江市、南は大原郡大東町、西は八束郡宍道町と境界を接している。人口約6000人、温泉の町であり、伝統工芸の布志名焼や瑪瑙細工などが特産である。奈良時代の天平5年（733）に編纂された『出雲國風土記』（以下「風土記」と略す）によれば、現在の玉湯町の町域は、意宇郡拝志郷の東部と、意宇郡忌部神戸の西半分にあたる。町の北部には国道9号とJR山陰線が東西に通っているが、これらは古代山陰道のルートにほぼ沿っていると思われる。町の中央部分を玉湯川（『風土記』では玉作川）が北流するが、この川を遡って山間に分け入る県道は、意宇郡家から大原郡家、飯石郡家を経由して、やがて備後国に通じる通道（当時の官道）に相当するものと考えられる。また、「風土記」の意宇郡条には布志名の地名のもととなったと思われる「布白奈社」の名が記されている。この布白奈社は花仙山中腹にある布白名社に比定されている。『風土記』は、拝志郷には正倉が置かれたと記す。所在地は玉湯町林村本郷に比定されている。また、「風土記」によれば、その編纂当時の意宇郡の郡役人は、大領の出雲臣広嶋以下ほとんどが出雲臣であるが、主政（三等官）は林臣であった。林臣は拝志郷の豪族で、皇族に連なる一族として付近一帯に隠然たる勢力を誇っていたようである。後述するが、林村には前方後円墳を含む50基から構成される林古墳群があり、林臣との関わりが想定されるところである。

『風土記』の忌部神戸の条には興味深い記述がある。「忌部神戸。郡家の正西二十一里二百六十歩なり。國造、神吉詞奏し、朝廷に參向ふ時の御沐の忌工作る。故、忌部と云ふ。即ち川の邊に湯を出す。出湯の在る所は、海陸を兼ねたり。仍りて男も女も、老いたるもの少きも、或るは道路を駒躰ひ、或るは海中を洲に沿い、日に集ひて市を成し、縞紗燕樂ぶ。一たび灌げば形容端正しく、再び浴すれば、萬病悉に除く。古より今に至るまで驗を得ずといふことなし。故、俗人、神湯と曰ふなり」というもので、この記述から、この時代既に、玉造温泉は老若男女が集い賑わう歓楽地であったことが分かる。さらにはここから、この地では出雲国造家がその地位に就く際に禊ぎが行われ、また天皇に献上するための玉の製作が行われていたことも明らかにされている。

このような形態における玉の献上がいつ頃まで行われたのかははっきりしない。しかし、延長5年（927）に編纂された『延喜式』には、「出雲國造神券詞を奏す。玉六十八枚。赤水精八枚、白水精十六枚、青石玉四十四枚…」とあることから、少なくともこの頃までは行われていたようである。また『延喜式』には、「凡そ出雲國の進る所の御宮岐玉六十疋。三時大殿祭料卅六疋、臨時廿四疋。毎年十月以前、意宇郡神戸玉作氏をして造り備へしめ、使いを差して進上す」ともあり、大殿祭等の儀式のため、出雲の玉が毎年進上されていたことが分かる。さらに、「正倉院文書」の「出雲國計会帳」によれば、天平5年（733）の8月19日に、真珠などとともに「水精」が進上されていることが分かる。あるいは、「九条家本『延喜式』卷十」の裏文書にある「主税寮出雲國正税返却帳」によれば、長保2年（1000）や同4年（1002）に、「水精」の進上に応じて税額が返却さ

れた事實を確認できる。

一般に玉作は、弥生時代から広い地域で行われるが、律令時代になると廃れる。ところが出雲の玉作は、古墳時代後期に最盛期を迎え、少なくとも11世紀初頭までは続いていたことが文献から明らかである。そして、その出雲における玉作の中心は、玉湯川の流域と、東に隣接する松江市の忌部川流域である。これは両河川の間に、玉の原石になる良質の瑪瑙や碧玉の産出地である花仙山（『風土記』には玉作山と記載）があるためで、この辺りは、全国でも例を見ない玉作遺跡の集中地域となっている。

このように、玉湯町とその周辺は、玉作を中心に歴史的に興味深い地域である。ここでは、主な遺跡の紹介を通じて、この地域の歴史を概観しておきたい。

旧石器時代 島根県内では、この時代にまで遡ることのできる遺跡は多くはないが、近年、宍道湖・中海沿岸地域を中心に、少しずつ資料が集まっている。そのうち玉湯町林村の鳥ヶ崎遺跡からは、中期旧石器時代まで遡る可能性を持つ剥片や石核などが採集され、玉湯町湯町の杉谷遺跡では後期旧石器時代の石器が確認され、松江市乃木福富町の廻田遺跡からは、後期のナイフ形石器が出土している。

縄文時代 玉湯町内にはこれと言った資料がないが、周辺地域では遺跡が増加していく。松江市の乃木湖岸遺跡や、宍道町の野津原Ⅱ遺跡で発見された有茎尖頭器は、縄文時代草創期のものと推定される。土器が見つかっていないため時期の限定が難しいが、縄文時代も後半と推定される遺跡に、宍道町東来寺の弘長寺遺跡がある。この遺跡は、狭い範囲から豊富な種類の石器を大量に出土したことで知られる。特に石鏃の出土量が多いことから、漁労が活発に行われたことがうかがえる。その他、縄文後期から晩期の深鉢が出土した、東米特の三成遺跡などがある。

旧石器時代に深い谷であったと推定される宍道湖・中海沿岸地域は、気候が温暖化し縄文時代になると海水面が上昇し、水道状を呈するようになったと考えられる。このためこの地域は、前面に湖水、背後には低丘陵が控え、漁労や狩猟に適していた住みやすい環境だったと思われる。従って玉湯町内においても、今後この時代の遺跡が発見される可能性は充分にある。

弥生時代 島根県教育委員会が昭和61年（1986）に行った玉作遺跡分布調査では、53の遺跡が報告されている。その大部分は古墳時代以降のものであるが、弥生時代のものも幾つか確認できる。

出雲での玉作は、弥生時代前期にまで遡ることができる。現在のところ、島根県下で最古の玉作遺跡は松江市の西川津遺跡で、緑色凝灰岩を使って管玉が生産されていた。中期の遺跡としては、松江市竹矢町の布田遺跡がある。後期の遺跡としては、松江市矢田町の平所遺跡があり、ここでは水晶製の算盤玉や丸玉、碧玉製の管玉等を生産していた工房跡が発見された。玉湯町域での玉作の開始は、古墳時代まで下るものと従来は考えられてきた。しかし、昭和58～59年（1983～1984）、出雲玉作跡宮ノ上地区で実施された発掘調査では、工房跡は検出されなかったが、弥生末期～古墳時代前期の上器とともに玉類未成品が出土しており、玉作開始が弥生時代にまで遡る可能性が出てきた。

玉作に直接は関わらないが、そのほか重要な遺跡には、松江市乃木福富町・乃白町・浜乃木町にまたがる田和山遺跡群がある。ここでは以前から、全長約20mの古墳時代後期の前方後円墳である田和山1号墳をはじめとする古墳群の存在が知られていたが、それに加えて3重の環壕が巡る遺跡が検出された。時期的には弥生時代前期～中期とされる。田和山遺跡群から北東約250mのところ

には、友田遺跡がある。この遺跡は前期～中期の土壙墓26基、中期の埴丘墓6基、後期の四隅突出型埴丘墓1基などから構成される墳墓群で、土壙墓群からは勾玉や管玉のほか大量の石鐵が出土したため、「戦士の墓」などと呼ばれる。

玉湯町内では、本書で報告する布志名大谷Ⅲ遺跡の墳墓群がある。同じく布志名の大堤Ⅱ遺跡では、後期古墳7基のほか、弥生時代～平安時代にかけての住居跡や加工段が検出された。弥生時代中期の竪穴住居跡は3棟見つかり、うち1棟からは、時期が確定できるものとしては県内で最も古い鉄製の鍬が出土している。

宍道町東来待の三成遺跡からは3基の墳墓が発見されている。当初、これらは中期の古墳と報告されていたが、近年になって弥生時代の埴丘墓の可能性が指摘されている。特に2号墓は貼石が認められるもので、注目される。弥生時代中期～後期の来待地区に、有力な集団が存在していた可能性をうかがわせるものである。白石から佐々布にかけての丘陵地帯では、山守免遺跡、野津原Ⅱ遺跡、上野遺跡、上野Ⅱ遺跡など、高地性集落が次々と発見されている。

古墳時代 玉作関係の遺跡が数多く出現し、特に玉湯川と忌部川の流域に集中して営まれる。

玉湯川の流域では、宮垣地区、玉ノ宮地区、宮ノ上地区の3か所が国指定の史跡となっている。宮垣地区は記加羅志神社跡を中心に立地しており、古墳時代前期末～平安時代の工房跡が約30棟検出されたほか、玉の原石や玉類の未成品、砥石、穿孔用の鉄製鍬など、大量の玉作関係の遺物が出土した。また、同一の構造から玉作関連と生活関連の遺物が同時に出土していることから、玉作工房と住居が一体になっていたことが明らかになった。宮ノ上地区は玉作湯神社境内に位置する。玉作湯神社は『風土記』や『延喜式』に記載のある古社で、大穴持命、少彦名命に加えて、玉の神である櫛明玉命を祭神としている。この地区は、玉作開始が玉湯町内では最も早く、弥生時代まで遡ると推定されるが、古墳時代前期と後期の玉作の舞台でもあった。玉ノ宮地区には、櫛明玉命を祭る玉ノ宮という神社が、大正年間まで存在した。ここでは玉作に関わる明確な構造は確認されていないが、古墳時代～奈良時代にかけての玉作関連の遺物はまとめて出土している。また、この地区からは、鉄滓や炉壁とともに7世紀と9世紀と推定される精鍊炉が2基検出され、製鉄が行われていたことも明らかになっている。この製鉄遺跡で生産された鉄製品が、玉作の工具として使われたものなのか、製鉄と玉作の関連が興味深い。このほか玉湯川の流域には、平床遺跡、日焼廻遺跡、狐廻遺跡など多数の玉作遺跡が存在している。玉湯川の流域からは離れるが、林村の堂床遺跡は、6世紀後半～7世紀前半という短い期間に、26棟という数多くの工房が営まれた遺跡として注目される。

忌部川流域は、玉湯川流域に次いで玉作遺跡が集中して存在する。このうち後原玉作跡からは、石鍬の未成品が出土しており、古墳時代前期に遡るものと考えられる。また中島遺跡では、中期の工房跡が確認されている。大角山遺跡は、竪穴住居跡5棟から構成される中期の玉作遺跡である。出土した十師器に形式差がほとんどなく、住居跡相互の切り合い関係もないことから、ごく短期間に営まれた集落と考えられる。

古墳や横穴墓は、やはり玉湯川流域に多く分布している。このうち篠連場古墳は、5世紀末頃の築造と考えられる小型の円墳である。玉作築山古墳もほぼ同時期の築造と思われ、墳形が明確ではないが、やはり円墳と推定される。双方とも、地元では白粉石または白来待と呼ばれる石英安山岩質凝灰岩を石材とする舟形石棺を用いているという特徴がある。宍道町西来待の横田古墳でも同じ

石材を利用した舟形石棺を持つなど、舟形石棺は中海・宍道湖岸に濃く分布している。報恩寺古墳群は6基のうち5基までが小型の円墳だが、1基は全長約50mの前方後円墳で、玉湯町では扇廻古墳と並ぶ最大の古墳である。5～6世紀の築造と考えられる。6～7世紀になると、この地にも多くの横穴墓が出現するようになる。花立横穴群は5穴で構成される。調査段階で現状をとどめていたのは2穴のみだが、もともとは全ての横穴で、白粉石（石英安山岩質凝灰岩）を石材とする、切り石を組み合わせた箱式石棺を収めていたと考えられる。副葬品のほとんどは須恵器で、頭部と足元に分けて置かれている。岩屋寺跡横穴群は国指定史跡で、来侍石（凝灰質砂岩）の岩盤を掘り込んでつくられている。2穴で構成され、2穴とも4隅を柱状に陽刻するなど、極めて入念な構造である。岩屋遺跡は、岩屋寺跡横穴群の西側の尾根続きにあり、T区に存在する古墳群は後期のものである。玉湯川が形成した平野は狭小で、この地域の農業生産力も高くはなかったであろう。それにも関わらず、不相応に思えるほどの数や規模の古墳が築造された背景としては、玉作との関連性を考慮すべきであろう。

林村にも古墳や横穴墓は多く存在する。中でも林古墳群は、宍道湖に突出する低丘陵上に約50基が密集する、玉湯町内では最大規模の古墳群である。前述のように、この古墳群は林臣と密接な関わりがあると考えられる。大部分が小型の円墳だが、方墳1基、前方後円墳4基も含まれる。このうち43号墳は全長約18mの小型の前方後円墳で、横穴式石室を持つ。6世紀中期～後期の築造と思われ、出雲における横穴式石室の出現期のものとして重要である。また、多くの副葬品が認められたが、そのうち、玄室内から出土した須恵器壺の出土状況にも注目が必要である。それは、2つの壺を並べたもので、奥壁の近くに2セット、玄門付近に1セットの、計3セットが存在した。これは、壺を枕に転用したものと考えられる。

布志名地区にも、古墳がある程度まとまって存在している。前期の布志名大谷1号墳の他に、中期の樅の木古墳群、後期の大堤Ⅱ遺跡の古墳群がある。

忌部川流域では、二名留古墳群、大角山古墳群、向原古墳群、田和山古墳群、松本古墳群、苔沢谷横穴群、弥陀原横穴群などが知られ、何れも中期以降のものである。このうち大角山1号墳は、全長60m余りの大規模な前方後円墳である。田和山1号墳は、全長約20mの小型の前方後円墳であるが、前方後円墳の築造が減り横穴墓が主流になる6世紀後半になって、あえて前方後円墳を築造しているところが興味深い。また、二名留2号墳からは、5世紀後葉のものと比定される子持勾玉が出土している。

奈良・平安時代 律令時代になると全国的に玉の生産は行われなくなり、玉作遺跡の発見例は花仙山の周辺だけにほとんど限定される。製作された玉類がどのような性格のものであったかは、前述の通りである。この時期の主な玉作遺跡に、蛇喰遺跡がある。蛇喰遺跡は出雲玉作跡宮垣地区の西に隣接する遺跡で、堅穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。ここで注目されるのは、第一にヘラ書き文字のある須恵器が500点以上出土したことで、これは一遺跡としては全国的にも類を見ないほどの出土量と言える。文字には「白田」、「由」、「有」、「林」などが多く見られた。「由」や「有」が、「湯」に通ずるなど、地名を連想させるものが多い。またこれらの須恵器は、松江市東忌部町の湯峰窯跡で生産されたものと考えられる。因みに湯峰窯跡は、花仙山の南麓、玉造と忌部を結ぶ道筋に存在した遺跡で、出雲国庁もここから須恵器の供給を受けていた。また、一般に、寺院や官衙からの出土が多いとされる円面鏡、縁釉、製塙土器が多く出土している。玉類の未成品

は平玉を中心に大量に出土しているが、完成品に近いものが多くを占めた。

その他の遺跡としては、林村に、瓦類や礎石が出土した松ノ前廃寺があり、林臣一族が建立した私寺と考えられている。

鎌倉・室町時代 全国的に山城が多く出現する時期であり、玉湯町周辺地域も例外ではない。特に玉湯川に沿って山間に分け入る谷筋には、古代から奥出雲に通じる重要な街道が設けられており、付近には山城が密集している。玉作湯神社の西側には、玉造要害山城跡がある。標高約108mの小山塊にあり、規模は大きくないが、奥出雲への街道と湯岸を越えて忌部に抜ける間道を押さえる、交通の要衝に立地している。毛利氏による改修も想定できるが、築城は鎌倉時代末期にまで遡り、湯氏の居城であったと考えられている。

江戸時代 その創設については諸説あるが、18世紀の中頃までには、布志名の地で布志名焼が始まった。一説には、富士名義綱（後醍醐天皇の船上山での挙兵に、塙治高貞とともに真っ先に馳せ参じたという）の家臣船木与兵衛次政の木舟を名乗る与次兵衛村政が、明和年間（1764～1772）に開窯したと伝えられる。眞偽のほどはもう一つ定かではないが、この船木一族や、上屋氏、永原氏らによって布志名焼は発展し、松江藩主松平治郷の手厚い保護などもあり大いに繁栄した。宍道湖南岸の若山付近を中心に多くの窯跡が存在しており、現在もなお、4つの窯元が操業している。



第1図 布志名大谷Ⅲ遺跡の位置

【参考文献】

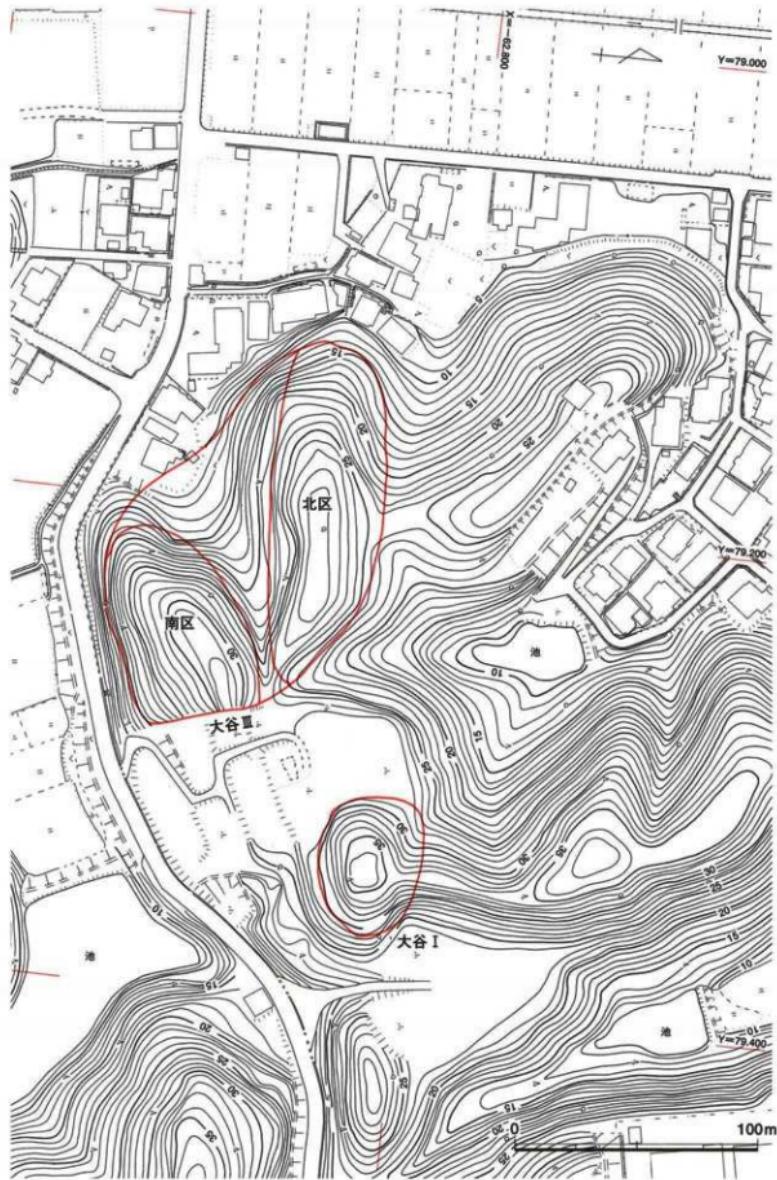
- 加藤義成「修訂 出雲國風土記参究」 1957 松江今井書店
- 『玉湯町史 上巻』 1961 玉湯町
- 『新修鳥根県史 史料篇1』 1966 鳥根県
- 『新修鳥根県史 通史篇1』 1968 鳥根県
- 『玉造 烏坊遺跡群 一古墳群・集落跡・古墓群の記録一』 1970 玉湯町教育委員会
- 『史跡出雲玉作跡 一発掘調査概報一』 1972 玉湯町教育委員会
- 加藤義成「文献に見る作りについて 一出雲國風土記を中心として一」
『松江考古 第2号』 1979 松江考古学講話会
- 『玉湯町史 下巻(一)』 1982 玉湯町
- 『松江園都市計画事業乃木本地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 1983 松江市教育委員会
- 『史跡出雲玉作跡一宮ノ上地区 第1次発掘調査概報一』 1984 玉湯町教育委員会
- 『史跡出雲玉作跡一宮ノ上地区 第2次発掘調査概報一』 1985 玉湯町教育委員会
- 『鳥根県生産遺跡分布調査報告書IV 玉作関係遺跡』 1987 鳥根県教育委員会
- 『史跡出雲玉作跡一ノ宮地区 第1次・2次発掘調査概報一』 1988 玉湯町教育委員会
- 勝部衛「玉造・花立横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書第XV集』 1989 島根県教育委員会
- 『田和山古墳群発掘調査概報』 1991 松江市教育委員会
- 『二名岱古墳群発掘調査報告書』 1992 松江市教育委員会
- 『菅沢谷横穴群』 1994 創松江市教育文化振興事業団
- 加藤義成「古代文化叢書1 出雲國風土記論究」 1995 鳥根県古代文化センター
- 『二名岱遺跡発掘調査報告書』 1995 創松江市教育文化振興事業団
- 『福高1号墳・星形1号墳 一般国道9号松江道路(西地区)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書2』 1997 鳥根県教育委員会
- 『松本古墳群・大角山古墳群・すべりざご古墳群 一般国道9号松江道路(西地区)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書3』 1997 鳥根県教育委員会
- 『布志名大谷Ⅰ遺跡・布志名大谷Ⅱ遺跡・布志名才の神遺跡 一般国道9号松江道路(西地区)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書4』 1997 鳥根県教育委員会
- 『古代出雲文化展―神々の国 悠久の遺産―』 1997 鳥根県教育委員会 創日新聞社
- 『鳥根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター年報V』 1997 鳥根県教育委員会
- 『島根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター年報VI』 1998 鳥根県教育委員会
- 『田和山遺跡群発掘調査現地説明会資料』 1998 松江市教育委員会 創松江市教育文化振興事業団
- 『鳥根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター年報VII』 1999 鳥根県教育委員会
- 『宍道町史 史料編』 1999 宍道町
- 『蛇喰遺跡発掘調査報告書』 1999 玉湯町教育委員会
- 『玉造美山古墳』(玉湯町立出雲玉作資料館パンフレット) 玉湯町教育委員会
- 『報恩寺古墳群』(玉湯町立出雲玉作資料館パンフレット) 玉湯町教育委員会
- 『林古墳群第43号古墳』(玉湯町立出雲玉作資料館パンフレット) 玉湯町教育委員会



第2図 布志名大谷Ⅲ遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1:25000)

地図番号	遺跡名	種別	地図番号	遺跡名	種別
1	布志名大谷Ⅲ遺跡	古墳・四隅突出型埴丘墓	46	蓮田遺跡	散布地
2	布志名大谷Ⅰ遺跡	古墳・建物跡	47	蓮田古墳	古墳
3	布志名才の神遺跡	祭祀遺跡	48	大舟山遺跡	集落跡地
4	布志名大谷Ⅱ遺跡	古墳・炭窯	49	尾形遺跡	散布地
5	瀬舟木窯跡	窯跡	50	蘿花垣遺跡	散布地
6	後福島窯跡	窯跡	51	松本遺跡	散布地
7	空福島窯跡	窯跡	52	福富Ⅰ遺跡	散布地
8	永原窯跡	窯跡	53	乃白玉作跡	玉作跡
9	利平窯跡	窯跡	54	乃白遺跡	散布地
10	沢窯跡	窯跡	55	尾形古墳群	古墳
11	舟木藤平窯跡	窯跡	56	大角山古墳群	古墳
12	鍋治川窯跡	窯跡	57	すべりざこ横穴墓群	横穴
13	鍋治畑遺跡	散布地	58	松本古墳	古墳
14	布志名遺跡	建物跡	59	松本修法壇跡	修法壇跡
15	二斗垣古墳群	古墳	60	天場古墳	古墳
16	大堤Ⅱ遺跡	古墳・住居跡	61	乃白櫛現遺跡	玉作跡
17	大堤Ⅰ遺跡	古墳	62	強乾原横穴群	横穴
18	大堤古墳	古墳	63	松本横穴群	横穴
19	助次郎古墳群	古墳	64	岩屋口古墳	古墳
20	真野谷遺跡	古墳	65	中垣古墳	古墳
21	桜ノ木古墳群	古墳	66	下殿治古墳	古墳
22	糸塚墳墓群	墳墓	67	宮の上遺跡	散布地
23	糸塚遺跡	玉作跡	68	小城口遺跡	玉作跡
24	柏田古墳群	古墳	69	平松遺跡	玉作跡
25	水丁部遺跡	玉作跡	70	清水尻遺跡	散布地
26	岩屋口遺跡	玉作跡	71	菅沢横穴群	横穴
27	布田遺跡	玉作跡	72	野向古墳	古墳
28	山崎横穴群	横穴	73	菅沢遺跡	散布地
29	中河原古墳群	古墳	74	大久保古墳群	古墳
30	宮田古墳群	古墳	75	大久保遺跡	散布地
31	後追古墳	古墳	76	義師前遺跡	散布地
32	小川古墳	古墳	77	後友田古墳群	古墳
33	布志名城山城跡	城跡	78	田和山遺跡群	弥生環壕・古墳
34	山室跡	窯跡	79	友田遺跡	墳墓
35	水保山窑跡	窯跡	80	宇賀Ⅱ遺跡	散布地
36	茂芳日遺跡	散布地	81	巖沙門山古墳群	古墳
37	利宵山古墳群	古墳	82	荒神古墳	古墳
38	伝富士上名利官義御古墳	古墓	83	伝佐々木高御墓	古墓
39	足立窯跡	窯跡	84	堀尾忠暗墓	古墓
40	カナクソ谷鉄跡	製鉄遺跡	85	人參方跡	役所跡
41	欠田遺跡	散布地	86	茶町遺跡	散布地
42	稻富湖岸遺跡	散布地	87	天倫寺前遺跡	散布地
43	二名留古墳群	古墳	88	荒原城跡	城跡
44	神立遺跡	散布地	89	松江藩主松平家廟所	墓地
45	福宮Ⅱ遺跡	散布地	90	K32古墳	古墳

第1表 周辺の遺跡一覧



第3図 布志名大谷I・III遺跡調査対象地位置図 (S=1:2000)

第3章 調査の経過と概要

大谷Ⅲ遺跡は、八東郡玉湯町布志名771-29番地外に所在する。遺跡は現在の穴道湖岸から約500m南方の丘陵頂部から緩斜面上にかけて立地する。標高約30m前後を測り、俯瞰すると馬蹄形の尾根筋に位置している。現在、遺跡周辺は山林等で開まれ見通しは良くないが、樹木が無ければ、北方に穴道湖、西方に布志名の小平野、南西方向に瑪瑙、碧玉を産出する花仙山山稜を一望することができる。また、東方には古墳時代前期の方墳が検出された布志名大谷Ⅰ遺跡が近接している。しかし、両遺跡間は既に開墾等による削平が著しく旧地形はほとんど留めていない。

現地調査は、平成10年（1998）度に実施した遺構・遺物の埋蔵状況の把握、調査対象地の範囲確認のためのトレンチ調査に始まる。この調査結果に基づき、北尾根にあたる北区と南尾根にあたる南区に便宜上二分して、本調査区を設定した（第3図）。そして、平成10～11年度にかけて全面的な発掘調査を実施し、多くの成果を得るに至った。

以下、本調査について、調査区ごとに調査経過と概要を述べておく。

【南区】南区は、トレンチ調査及び地形観察の結果に基づき、北東方向から南西方向に伸びる標高約21～32mを測る痩せ尾根の頂部緩斜面に設定した。調査区東端付近は後世の開墾等によって崖面となっているが、その他周辺地形は、旧地形を比較的良くとどめているものと推察された。

発掘調査は、平成10年（1998）10月30日に着手した。まず、調査区をおよそ東西方向、南北方向に継続、横断する複数の土層観察用の畦を設けた。それによって調査区内を細分しつつ、総面積約1,000m²を対象とする全面発掘を開始した。

冬期の寒風吹き荒ぶ中の調査であった。しかし、現地表面から遺構検出面（地山面）までの土砂堆積が浅いこと、地形的に排水が容易な状況にあったこと、なども手伝って、調査は順調に進んだ。平成10年12月24日には作業員を撤収、現地調査を終了した。調査開始から実働のペリオド30日間の現地調査であった。

この間、同年11月19日には、島根大学教授 渡邊貞幸氏、11月20日には島根県文化財保護審議会委員 蓬岡法暉氏、11月25日には、島根県文化財保護審議会委員・島根大学教授（当時）田中義昭氏の現地における調査指導を得ている。

南区の調査では、調査区東半のやや幅広い尾根頂部付近から、弥生時代後期後半頃と推定される土塙墓4基とそれらを東西に二分するかの箱掘り状の溝1条、時期、性格とともに不明で不整形を呈する溝状遺構1、尾根頂部から若干北方へ斜面を下った位置に、弧状を描く溝1条とそれによって区画された時期不詳のマウンド状地形1を検出した。

このうち、土塙墓直上付近からは、弥生時代後期後半の弥生土器小片が多数出土し、一部の土塙墓内からは、標石と推定される磨石等の石器が出土している。溝状遺構内からも、弥生時代後期後半から終末頃の土器片が複数出土している。

一方、調査区西半の痩せ尾根上からは、古墳時代後半期と推定される石棺墓4基と石蓋土塙墓1基、時期は判然としないが尾根筋に直交する周溝を伴う埴丘墓もしくは古墳1基、時期・性格ともに不明確な土坑1基を検出した。これらの遺構周辺からは遺物がほとんど出土しなかったが、一部の石棺墓、石蓋土塙墓付近から須恵器数点が副葬品を推察させる状況で出土している。

【北区】 北区は、南区の尾根と小さな谷を挟んで反対側（北側）の尾根上に位置する。尾根頂部から緩斜面にかけて位置し、尾根幅は南区よりもかなり幅広い印象をもつ。

調査区は、トレンチ調査及び地形観察の結果に基づき、ほぼ東西方向に伸びる標高約18～30mの尾根上緩斜面に三区を設定した（第35図）。便宜上、東から北Ⅰ区、北Ⅱ区、北Ⅲ区と呼称する。北Ⅰ区の東端付近は後世の作道や削壁による旧地形の変化が顕著であったが、その他周辺地形は比較的旧地形をとどめているものと推察された。ただし、調査が進むにつれ、尾根筋の一部には後世の耕作に伴う削平の痕跡も顕著に認められることとなった。

発掘調査は、平成10年度と平成11年度の2か年にわたり実施した。

平成10年（1998）度には、南区の調査と並行して、北Ⅰ区のトレンチ調査、北Ⅱ区、北Ⅲ区の全面発掘調査を実施した。平成10年度の調査は、平成10年11月30日に着手し同年12月24日に作業員を撤収、現地調査を終了した。

その結果、北Ⅰ区のトレンチ調査によって、のちに四隅突出型埴丘墓であることが判明する1号墓の貼石や複数の土壙墓が検出された。11月には、前述した南区同様、考古学の有識者三名による調査指導を受けた。この時点では、発見された貼石が四隅突出型埴丘墓に伴うものと断定するに至らず、上壙幕の数、規模、時期等もほとんどが不明と言わざるを得ない状況にあった。北Ⅰ区については、地権者の了解等、調査のための条件整備が不十分であり、さらに四隅突出型埴丘墓の可能性も含めて慎重な調査を期する必要があるため、本格的な発掘調査は次年度に実施することとなった。

北Ⅱ区は、北Ⅰ区と北Ⅲ区の間に位置する緩斜面上に設定した。全面発掘調査の結果、時期、性格ともに不明の土坑1基と、緩やかな弧状を描く溝を持つ古墳時代中期頃の石棺墓1基を検出した。遺物は、石棺墓付近から出土した土器片数点と石棺内から検出された水晶製勾玉未成品1点のみであった。

北Ⅲ区は、北区西端付近の斜面上に設定した。全面発掘調査を実施したが、明確な遺構は検出されなかった。調査区北壁沿いに、最近まで使用された小道の跡が検出されたのみである。ただし、標高18m付近の斜面上には、等高線とほぼ並行に立ち並ぶ貼石状の石列が検出されており注目される。埴墓に伴う貼石を想起させるが、現状では時期、性格ともに不明と言わざるを得ない。遺物は、調査区の西端付近から弥生土器小片数点が出土しただけである。おそらく斜面上方から流れ込んだ遺物と推測される。

翌年度の平成11年（1999）度には、北Ⅰ区の全面発掘調査を実施した。

発掘調査は、平成11年4月7日に着手した。まず、調査区をおよそ東西方向、南北方向に縦断、横断する複数の土層觀察用の畦を設け、調査区内を細分した。そのうえで、総面積約1,600m²を対象とする全面発掘を開始した。

調査は、春の好天気に恵まれ、また、現地表面から遺構検出面（地山面）までの土砂堆積が浅く、地形的に耕土が容易な状況であったことも手伝って順調に推移した。ほぼ全ての遺構・遺物が検出された平成11年6月28日には一日調査を終了した。

第1章でも述べたとおり、この時点で、弥生時代後期後半頃の四隅突出型埴丘墓が少なくとも1基（1号墓）は存在することが明らかになり、さらに、その可能性がある埴丘墓が2基（2号墓・3号墓）、また、墳裾に断面V字形に石を組んだ特異な石列をもつ埴丘墓1基（4号墓）も検出され

た。この他、同じ弥生時代後期後半頃と推定される上塙墓5基、中近世頃の上塙墓1基、時期と性格が判然としない上坑3基、土師器を伴う時期と性格不明の集石遺構1基などが検出された。

この間、調査が半ば進展した平成11年5月25日には、島根県文化財保護審議会委員 田中義昭氏、島根大学教授 渡邊貞幸氏の指導を受けた。さらに、調査が大詰めを迎えた同年6月14日には、島取県埋蔵文化財センター 松田 淳氏、島取県淀江町教育委員会 岩田文章氏、同年6月15日には、島根県文化財保護審議会委員 蓮岡法暉氏、渡邊貞幸氏（前述）、同年6月18日には、田中義昭氏（前述）の現地における調査指導を得ている。

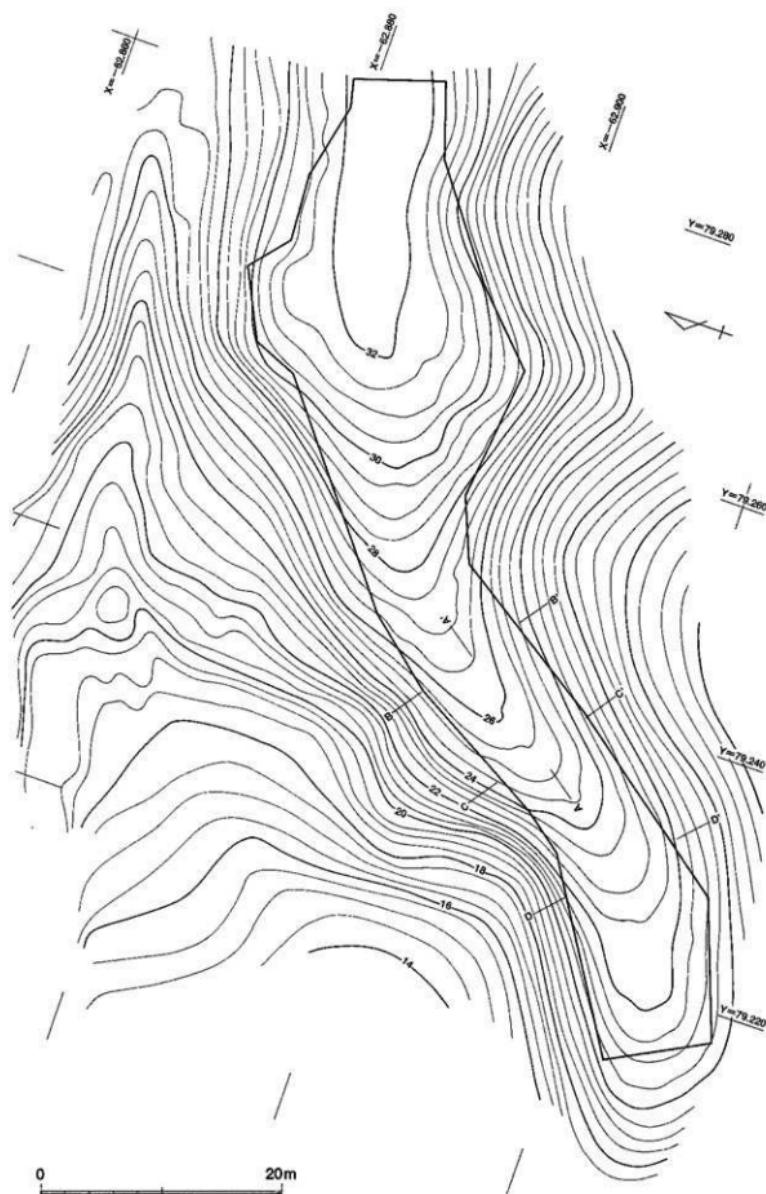
指導の結果、1号墓は四隅突出型埴丘墓に間違いないとの評価を得た。2号・3号墓については、四隅突出型埴丘墓の可能性は高いが、断定できないとのことであった。

こうした一連の調査成果と指導結果を受け、島根県教育委員会では、現地調査を一端中止し、建設省（現、国土交通省）をはじめとする関係機関と遺跡の取扱い（現状保存）に関する協議を実施することとなった。言うまでもなく、四隅突出型埴丘墓という当地域の弥生時代墓制を代表する遺構が検出された重要性を鑑みてのことである。さらに、玉湯町内で初めて発見された四隅突出型埴丘墓であり、検出された他の墳墓とともに宍道湖東南岸における弥生時代から古墳時代にかけての墓制の様相、変遷過程を知るうえで重要な資料に位置づけられたからである。

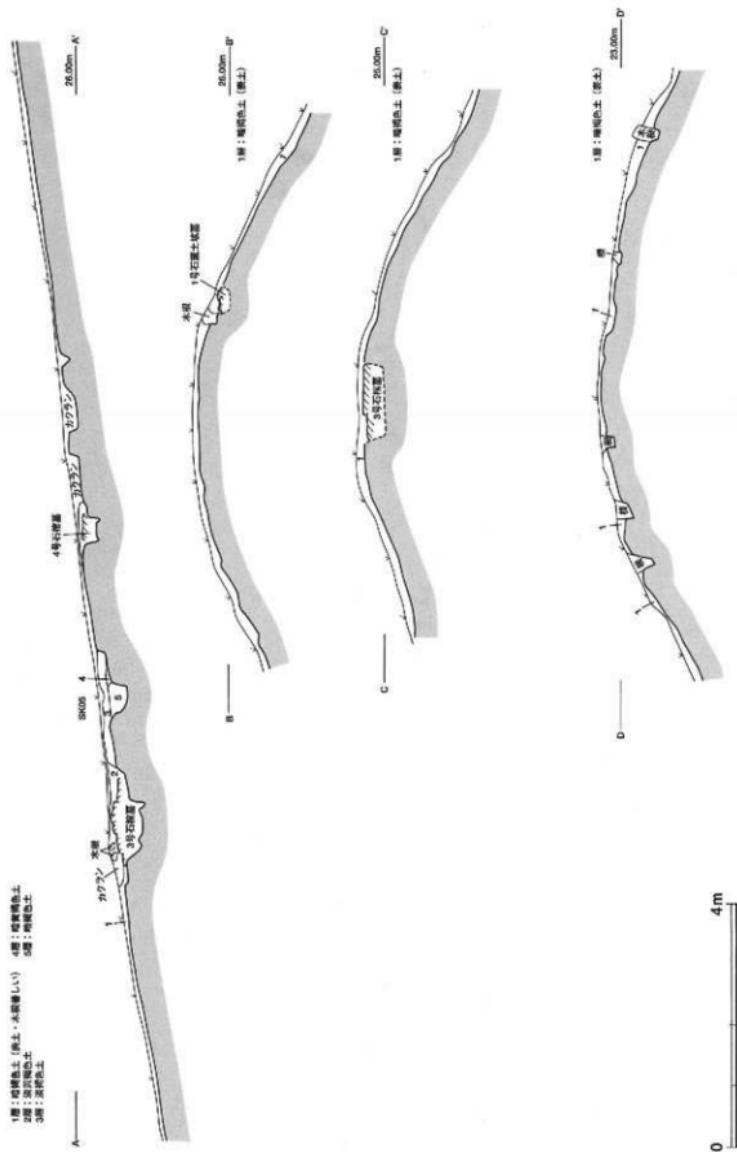
しかし、協議を重ねた結果、遺跡が複数の道路が連結するインター部に位置すること、しかも二層におよぶ立体構造の道路が設計されている地点にあたること、現状保存のためにはルート変更（迂回）しか手段が無く物理的に不可能であること、等の理由によって設計変更による現状保存は困難との結論に至った。

こうして、平成11年7月7日島根県教育委員会は、当遺跡の記録保存やむなしと判断し、同年7月12日には、埴丘の断ち割り、貼石の撤去などを伴う記録保存を前提とする追加調査を再開した。同年7月22日には、追加調査を終え、作業員を撤収、現地調査を完了した。4月の調査開始から実働のべ約60日間の現地調査であった。

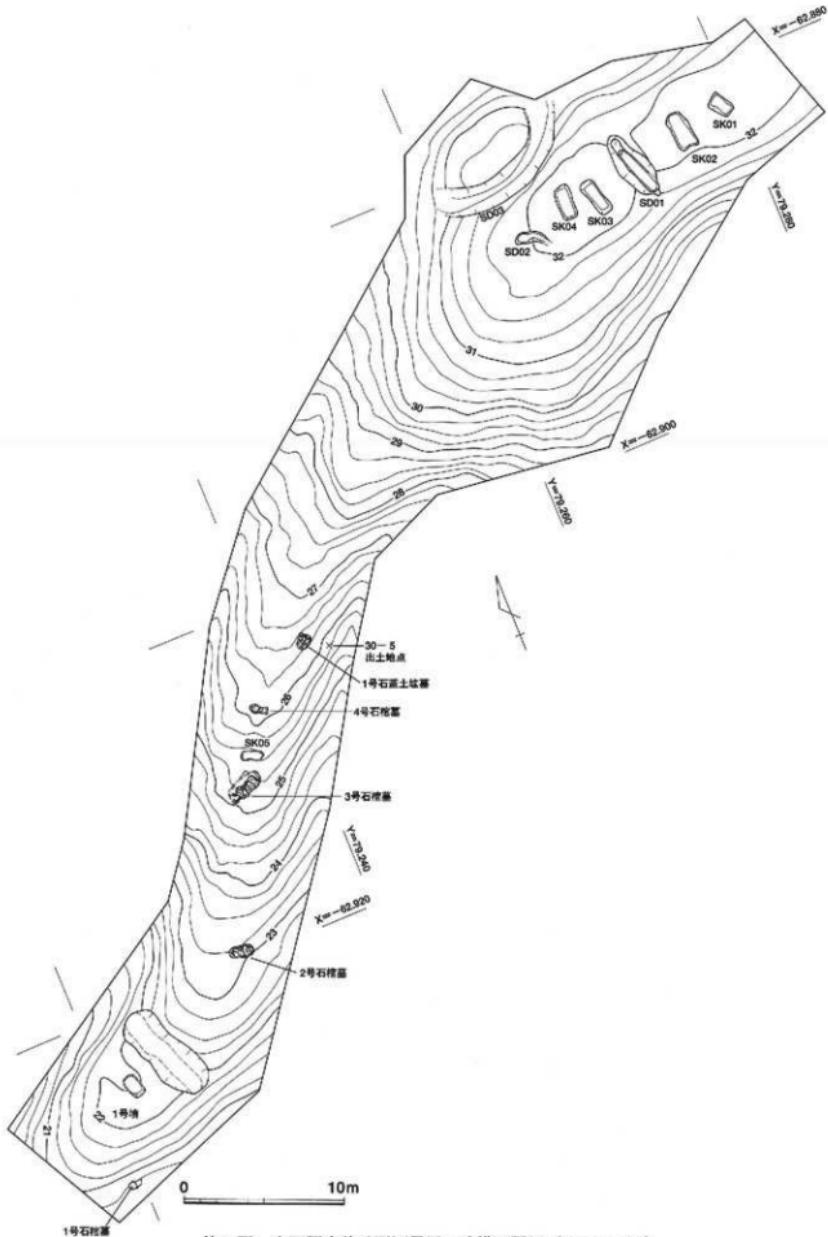
なお、同年6月19日には、建設省（現、国土交通省）、玉湯町教育委員会の協力を得て、現地説明会を実施し、地元玉湯町の方々や報道関係者を中心に約170名の見学者が遺跡を訪れた。



第4図 南区調査前地形測量図・調査区配置図 ($S = 1 : 400$)



第5図 南区西半部土層断面実測図 (S = 1 : 80)



第6図 南区調査後地形測量図・遺構配置図 (S=1:300)

第4章 南区の調査

第1節 基本層序

当調査区は、調査以前、雑木林からなる山林及び竹林であった。そのため、伐木後の地表面には大小の木根が著しくはびこり、木根による層序の搅乱も随所に認められた。

基本層序は、A-A'、B-B'、C-C'、D-D' ライン（第4・5図）およびX-X'、Y-Y'（第7・8図）ラインの土層断面に代表される。

調査区内の大部分において、表上下には木根が著しくはびこる暗褐色土が浅く単層堆積し、発掘調査時の確実な遺構検出面であった地山面に到達する。ただし、土壤墓、石棺墓等の遺構付近では、若干色調を異にする複数の土層堆積も認められた。

現地表から地山面までの深さは平均すると約15cm以内とごく浅かった。これは、やせ尾根の頂部という地形条件に起因する堆積上の流失、かつての植林・耕作に伴う削平、開墾の結果と推測される。遺物は、遺構内堆積土のほかは、表土下の暗褐色土層中から出土している。

第2節 南区東半部の遺構と遺物（第6・7・8図）

概要 標高31~32m前後を測る丘陵頂部から、土壤墓4、溝状遺構3、弧状の溝を持つマウンド状地形1を検出した。遺構付近の上層堆積状況は第8図のとおりである。現地表面から明確な遺構検出面（地山面）までの深さは、約5~15cmと極めて浅かった。

【SK01】（第9図）

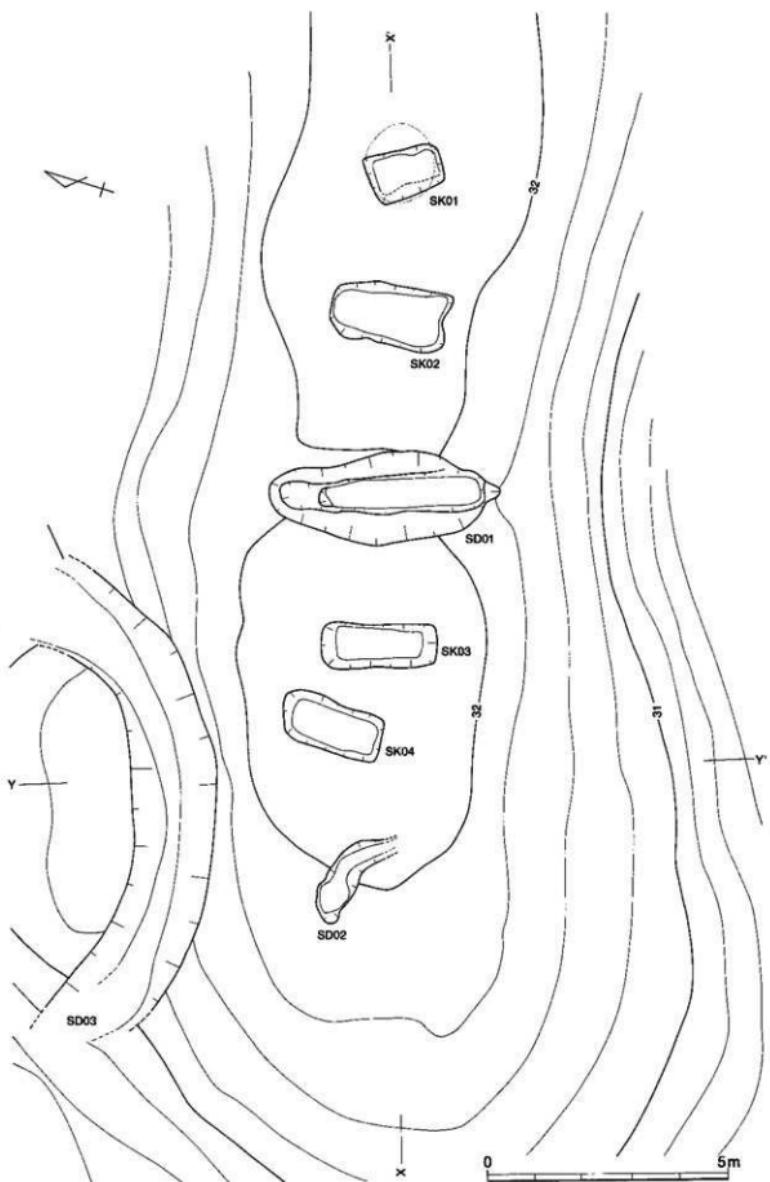
位置 標高約32mを測る尾根頂部の平坦面に位置する。南区東端付近にほど近く東方約4mの地点は、後世の造成工事に伴う採土により崖面となっている。

形状・規模 平面形は正な長方形を呈し、縦横の断面形はいずれも逆台形状を呈している。規模は、遺構検出面上面で長軸径1.5m、短軸径0.97m、深さ0.1~0.2mを測る。上層の主軸（長軸）は、N=37°-Wをとる。およそ東西方向に伸びる尾根筋に対して、土壠の主軸（長軸）がほぼ直交していることになる。

覆土 遺構内は木根が著しくはびこる暗褐色土の堆積が顕著であり、ごく一部に淡赤色土が認められた。後者は、地山面を掘りすぎた可能性もある。土層観察による限り、木棺等の埋設は想定できず、素掘りの土壠であったと推測される。第7・8図に示したとおり、遺構上面に約5cm程堆積した表土中からは多数の弥生土器片が集中的に出土している。この現表土面は本来、遺構内堆積土であった可能性もあるが、本来の掘り込み面（掘り方）は判然としない。

出土遺物（第17図） 土壠直上付近の表土中から、弥生土器小片が多数（コンテナ約1/2箱分）出土している。おそらく土壠上に置かれた土器類が遺存したものと推察される。ほとんどが実測に耐えない小片であったが、次の11点を実測した。

17-1は、器種、口径とともに不明の上器片である。器台の筒部片もしくは蓋の頸部片の可能性が



第7図 南区東半部尾根頂部付近調査後地形測量図 ($S = 1:100$)
(赤い丸は、表土直下から発生土断片が集中出土した地点を示す)

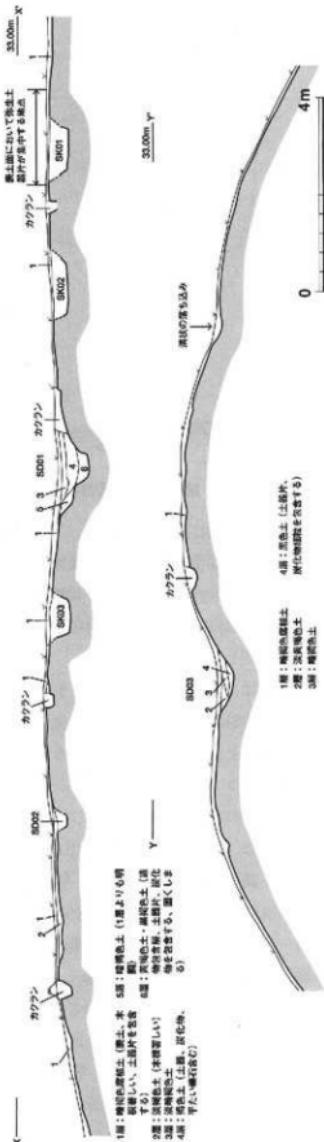
ある。調整は、外面と内面上半にナデ、内面下半にヘラケズリが認められる。焼成は良好で、内外面黄褐色を呈する。胎土は微細砂粒を微量含むが緻密である。小片につき時期は判然としない。

17-2は、鼓形器台の受部片か脚台部片であろう。口縁部の約6分の1が残存し、復元口径20cmを測る。口縁端部が若干外折している。調整は器表の風化が著しく判然としないが、外面にはナデが観察される。焼成は良好で、内外面淡褐色を呈し、胎土には3mm以下の微細な砂粒を含む。小片につき時期は判然としない。

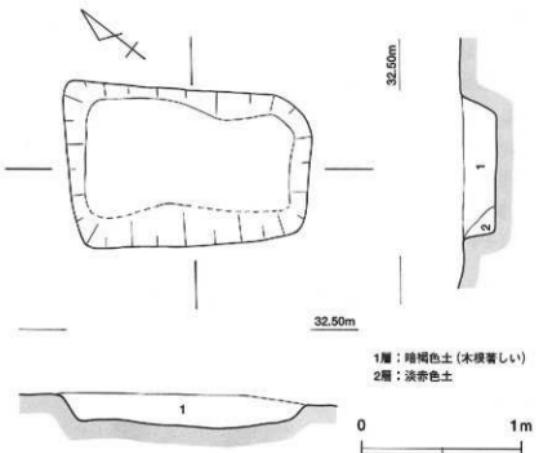
17-3は、鼓形器台の脚台部片であろう。筒部から脚台部にかけての小片で全周の約3分の1が残存する。器表の風化が著しく判然としないが、脚台部外面の一部に平行する4~5条の浅い直線紋が観察される。調整は、内面にヘラケズリが認められる。焼成は良好で、内外面黄褐色を呈する。胎土は微細砂粒を微かに含むが緻密である。時期は判然としないが、器形と紋様から弥生時代後期後半（松本編年出雲・隱岐V-3様式⁽¹⁸⁾）頃の所産に位置づけておきたい。

17-4は、鼓形器台の脚台部片であろう。筒部から脚台部にかけての小片で全周の約5分の1が残存する。脚台部外面の一部に刺突による羽状紋がめぐる。器表の風化が進み調整は不明瞭であるが、内面にヘラケズリが認められる。焼成は比較的良好で、内外面淡黄褐色を呈する。胎土には径1~3mmの砂粒を含む。時期は判然としないが、器形と紋様から弥生時代後期後半（松本編年出雲・隱岐V-3様式⁽¹⁸⁾）頃の所産に位置づけておきたい。

17-5は、鼓形器台の脚台部片であろう。全周の約2分の1が残存する。器表の風化が著しく不明瞭ではあるが、外面下半に平行する浅い直線紋数条の痕跡が微かにうかがえる。調整は不明瞭であるが、外面にナデ、内面にヘラケズリが観察される。焼成は良好で、内外面淡褐色を呈する。胎土は径1~3mmの砂粒を微量含むが緻密である。時期は判然としないが、器形と紋様から弥生時代後期後半（松本編年



第8図 南区東半部尾根頂部付近土層断面実測図 (S = 1 : 100)



第9図 南区SK01実測図 (S=1:30)

小片のため時期は判然としない。

17-7は、器台の脚部片か口縁部片であろう。前者として図化した。底部全周の約8分の1が残存し、復元底径約17cmを測る。調整は器表風化のため不明瞭であるが、外面を中心にはナデが認められる。焼成は良好で、内外面明褐色を呈する。胎土は微細な砂粒を含むが緻密である。小片のため時期は判然としない。

17-8は、器台の脚部片であろう。裾広がりに大きく開脚する。底部全周の約2分の1が残存し、復元底径約23cmを測る。器表は風化が著しいが、外面上半に平行する直線紋数条の痕跡が、下端附近に二条の平行する直線紋が認められる。調整は不明瞭であるが、外面及び内面下半にナデが、内面上半にヘラケズリが観察される。焼成は良好で、内外面明褐色を呈し、胎土には微細砂粒を多く含む。小片のため時期は判然としない。

17-9は、低脚杯の脚台部片である。底部のほぼ全体が残存し、底径5.0cmを測る。器表の風化が著しく調整は不明瞭であるが、外面にはナデが認められる。焼成は良好で、内外面黄褐色を呈し、胎土には微細砂粒を含むが緻密である。

17-10は、低脚杯である。脚部の全体と杯部の約5分の2が残存し、復元口径9.7cm、底径4.5cm、器高3.8cmを測る。調整は内外面ともにナデが認められる。焼成は良好で、内外面淡黄褐色を呈し、胎土には径1mm以下の微細な砂粒を含むが緻密である。器形から弥生時代後期後半（松本編年出雲・隱岐V-3様式）頃の所産と推定される。

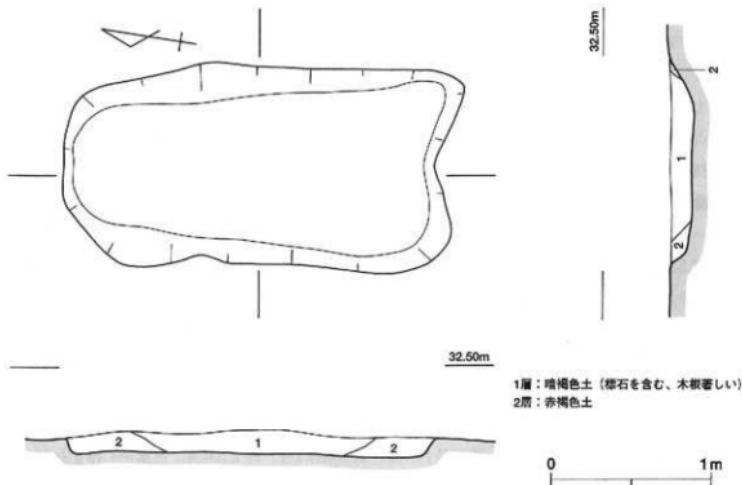
17-11は、低脚杯の杯部から脚部にかけての破片である。胴部の全周が残存しているが、低脚杯としてはかなり大型である。器表は風化が著しく調整は不明瞭であるが、外面にはナデの痕が観察される。焼成は良好で、内外面明褐色を呈し、胎土には1~3mmの微細砂粒を多く含む。器形から弥生時代後期後半（松本編年出雲・隱岐V-3様式）頃の所産と推定される。

時期と性格 土壤直上から出土した弥生土器片はSK01に共伴する遺物である可能性が極めて高い。

出雲・隱岐V-3様式
頃の所産に位置づけて
おきたい。

17-6は、器台の脚部片であろうか。外面に若干の稜を持ち裾広がりに開脚する。底部全周の約4分の1が残存し、復元底径10.6cmを測る。調整は、外面にナデ、内面にヘラケズリが認められる。焼成は良好で、内外面褐色を呈し、胎土には径1~3mmの微細砂粒を若干含むが緻密である。

多くは小片で判然としないが、時期を示唆する主な土器は、いずれも弥生時代後期後半（松本編年出雲・隱岐V-3様式）頃の様相を呈している。供獻を推察させる土器の出土状況や遺構の形態、規模、立地からして当該期の土壤墓と推定できよう。なお、被葬者の頭位は、土壤の両小口の大小から察するに、北方向と推定される。



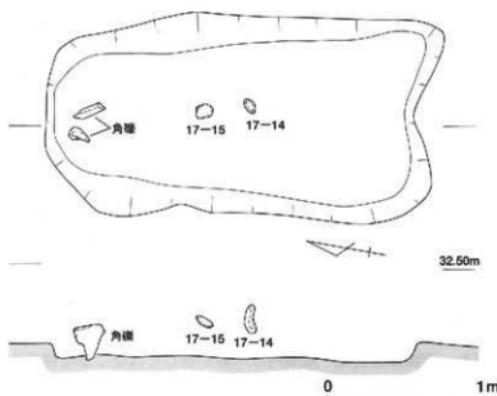
第10図 南区SK02実測図 (S= 1:30)

【SK02】(第10・11図)

位置 標高約32mを測る尾根頂部の平坦面に位置する。東方約1.5mにはSK01が、西方約2mにはSD01が検出された。それらと同様、東西方向に伸びる尾根筋に対して、土壤の主軸（長軸）方向は、ほぼ直交している。

形状・規模 平面形は歪な長方形形状を呈し、縦横の断面形はいずれも逆台形状を呈している。規模は、遺構検出上面面（地山面）で長軸径2.3m、最大幅1.27m、深さ0.1~0.15mを測る。土壤の主軸（長軸）は、N=10°-Wをとる。

覆土・遺物出土状況 遺構内は木根が著しくはびこる暗褐色土の堆積が顕著であり、両小口付近には地山と近似する赤褐色土が若干認められた。赤



第11図 南区SK02石杵・礫石出土状況実測図 (S= 1:30)

褐色土は、地山風化上の可能性もある。上層観察による限り、木棺等の埋設は推定されない。おそらく素掘りの土壤であっただろう。遺構検出面から上層の現地表面までは、約10~20cm程の暗褐色腐植土層の堆積が見られた。この上層と遺構内覆土（暗褐色土）の肉眼観察による絞別は困難で、土壤本来の掘り込み面（掘り方）は同層中にあった可能性も高いが、現状では判然としない。

土壤直上付近の表土中からは、複合口縁をもつ甕片など弥生土器の細小片10数点が採取されている。いずれも、実測に耐えない小片であり図化は省略した。

一方、図示（第11図）したとおり、遺構中央部上層の暗褐色土層中からは直立する石杵状の磨製石器1点、円錐1点が出土している。また、北壁付近の同層から土壤底面にかけては、直立する角礫2点が出土している。いずれも偶然混入したものとは思われず、ほぼ原位置に近い状態を保つものと判断された。

出土遺物（第17図） 前述した磨製石器2点について詳述する。

17-14は、いわゆる石杵である。土壤上層付近からほぼ直立する状況で出土した。ほぼ完形で、全長17.5cm、最大幅8.9cm、厚さ5.9cm、重量1,416.64gを測り、灰白色を呈する。岩種は、角閃石ディサイトに該当し、産地は不明である。図中のアミかけ部分には擦痕が、上端面の器表にはいわゆる「つぶれ」といわれる敲打痕が観察され、使用面であったことがわかる。特に、下端面は使い込まれたのであろうか、かなり平滑になっている。なお、肉眼観察による限り朱等の赤色顔料は器表からも土壤内からも一切検出されなかった。

17-15は、石杵から約20cm程離れた地点から出土した円錐である。下端部を欠損するが、歪な梢円形を呈するものと推測される。残存長11.4cm、最大幅9.1cm、厚さ3.6cm、重量564.49gを測り、黄褐色を呈し一部は赤みを帯びている。全体に丸みを帯びた自然石と思われ、明確な加工痕、顔料等の付着は認められない。岩種は安山岩の可能性があり産地は不明である。

時期と性格 土壤直上から出土した弥生土器片は細小片のため時期を確定することはできない。しかし、土壤上から出土する弥生土器片や砾石・石杵は、弥生時代後期から古墳時代前期頃にかけて山陰地方の墳墓上にしばしば認められるいわゆる「供献土器」や「標石」の可能性が高い。したがって、遺物出土状況、遺構の形態、規模、立地を加味し、SK01とそう遠からぬ時期（弥生時代後期後半頃）の土塚墓と推定できよう。なお、土壤の幅は北側小口から南側小口へと徐々に広がっている。土壤墓とすれば、被葬者の頭位は南方向と推察される。

【SK03】（第12図）

位置 標高約32mを測る尾根頂部の平坦面に位置する。東方約1.6mにはSD01が、西方約0.6mにはSK04が近在する。前述したSK02とは、中央にSD01を挟んで、ちょうど東西の対称的な位置にある。他の土壤と同様、東西方向に伸びる尾根筋に対して、主軸（長軸）方向がほぼ直交している。

形状・規模 平面形は長方形形を呈し、縦横の断面形はいずれも逆台形状を呈している。規模は、遺構検出面上面（地山面）で長軸径2.40m、短軸径0.85m、深さ0.24~0.30mを測る。土壤の主軸（長軸）は、N-16°-Wをとる。

覆土・遺物出土状況 遺構内は木根が著しくはびこる暗褐色土の単層堆積が認められた。上層観察による限り、木棺等の埋設は確認されず、素掘りの土壤であったと推定される。遺構検出面（地山）から上層の現地表面までは、約10cm程の暗褐色腐植土層の堆積が見られた。この上層と遺構内覆土

(暗褐色土) の肉眼観察による岐別は困難であった。したがって、土壤本来の掘り込み面(掘り方)はこの土層中にあった可能性が高いが、現状では判然としない。

土壤直上付近の表土中からは、弥生土器の細小片数点が採取されたが、いずれも実測に耐えず図化は省略した。

時期と性格 土壇直上から出土した弥生土器片は細小片のため時期を確定することはできない。しかし、SK01・02に近在し、遺物出土状況、遺構の形態、規模、立地が類似しているので、それらと遠からぬ時期(弥生時代後期後半頃)の土壤墓と推定しておきたい。なお、土壤の幅は、南側小口から北側小口へと徐々に広がっている。土壤墓とすれば、被葬者の頭位は北方向と推察される。

【SK04】(第13図)

位置 標高約32mを測る尾根頂部の

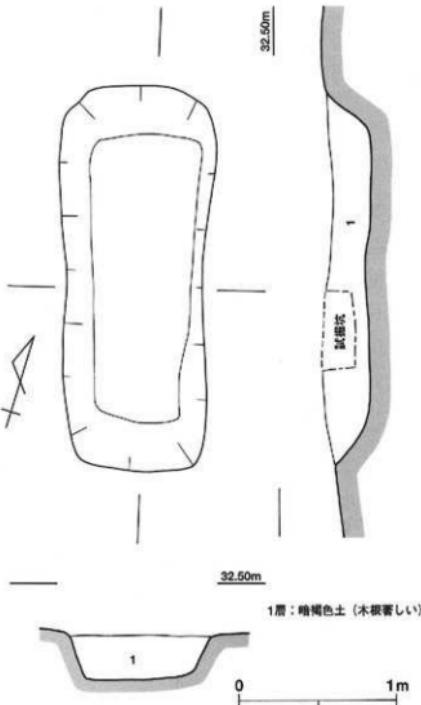
平坦面に位置する。東方約0.6mにはSK03が、西方約1.6mにはSD02、北方1.5mにはSD03が近在する。前述したSK03と共に、SK01・02とは、ほぼ中央にSD01を挟んで、東西の対称的な位置にある。他の土壤と同様、東西方向に伸びる尾根筋に対して、主軸(長軸)方向がほぼ直交している。

形状・規模 平面形は長方形状を呈し、縦横の断面形はいずれも不整な逆台形状を呈している。規模は、遺構検出面上面(地山面)で長軸径2.12m、短軸径0.96m、深さ0.08~0.15mを測る。土壤の主軸(長軸)は、ほぼ南北方向に沿っている。

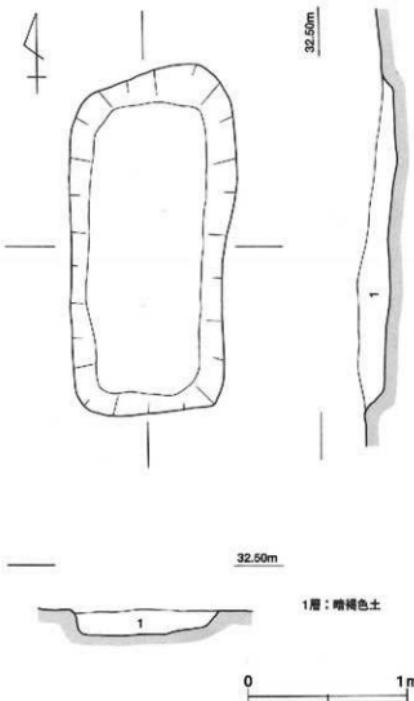
覆土・遺物出土状況 遺構内には暗褐色土の単層堆積が認められた。上層観察による限り、木棺等の埋設は確認されず、素掘りの土壤であったと推定される。遺構検出面から上層の現地表面までは、約10cm程の暗褐色腐植土層の堆積が見られた。この土層と遺構内覆土(暗褐色土)の肉眼観察による岐別は困難であった。したがって、土壤本来の掘り込み面(掘り方)はこの土層中にあった可能性が高いが、現状では判然としない。

土壤直上付近の表土中からは、土器の細小片数点が採取されたが、いずれも実測に耐えず図化は省略した。

時期と性格 土壇直上から出土した土器片は細小片のため時期を確定することはできないが、周辺



第12図 南区SK03実測図 (S=1:30)



第13図 南区SK04実測図 (S=1:30)

形状を呈する。壁面は溝の中程へと緩やかに落ち込みながら途中で傾斜を変換し、溝の中央部では平面形が細長い長方形状を呈して底面に至る。縦横の断面形は不整な逆台形状を呈するが一律ではない。横断面形は南壁側に近いほど整っており、いわゆる箱掘状となる。規模は、遺構検出上面で長軸径4.7m、短軸径1.92m、深さ約0.14~0.65mを測る。遺構の主軸（長軸）は、およそN-E~Wをとる。

覆土・遺物出土状況 覆土には第8図のとおり、暗褐色腐植土からなる表土以下、淡暗褐色土（3層）、褐色土（4層）、暗褐色土（5層）、黄褐色・黒褐色土（6層）の層序関係が見られた。このうち褐色土（4層）からは、弥生土器細小片数点、炭化物、長さ15~35cm程の扁平な礫石約15点が出土している。また最下層の黄褐色・黒褐色土層（6層）からも、少量の弥生土器小片（コンテナ約1/8箇分）と炭化物が出土している。いずれも周辺の土砂とともに自然に流入したかのような状況にあり、埋納等の行為は看取されなかった。ただし、褐色土層から検出された扁平な礫石のうちの3点（第14図参照）は、溝西壁斜面の地山直上に貼り付く様な状況で検出されており注目される。他の扁平な礫石ともども本来はこの溝の壁面に貼石状に置かれていた可能性も検討の余地がある。これらの礫石は、いずれも板状節理した安山岩で、松江市の乃白あるいは忌部周辺で

から出土した弥生土器片と胎土や色調が酷似している。また、SK01・02・03に近在し、遺物出土状況、遺構の形態、規模、立地が類似している点を重視すれば、それらと遙かに時期（弥生時代後期後半頃）の土壙墓と想定されよう。なお、土壙の幅は、南側小口よりも北側小口がわずかに広い。土壙墓とすれば、被葬者の頭位は北方向と推察される。

【SD01】（第14図）

位置 標高約32mを測る尾根頂部の平坦面に位置する溝状遺構である。東方約2mにはSK02が、西方約1.6mにはSK03が近在する。既述したとおり東方のSK01・02と西方のSK03・04の土坑群をちょうど二分するような位置にある。他の遺構と同様、東西方向に伸びる尾根筋に対して、主軸（長軸）方向がほぼ直交しており、尾根頂部平坦面を南北に分断するような溝である。

形状・規模 明確な遺構検出上面（地山面）における平面形は、歪な紡錘

容易に採取されるという。

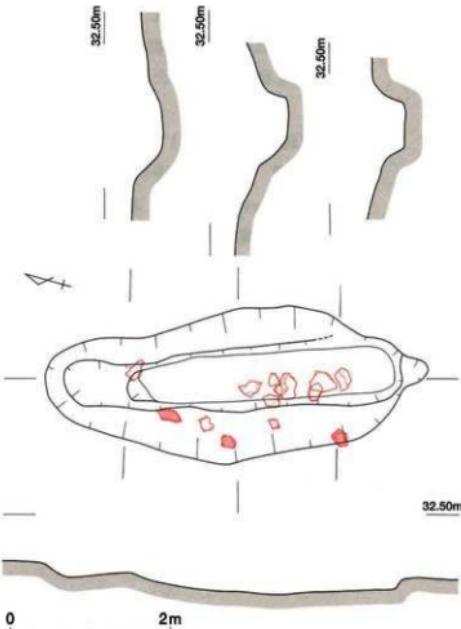
出土遺物（第17図） 覆土中から出土した弥生土器片は、ほとんど細小片からなり実測可能な2点のみ詳述する。

17-12は、覆土最下層の黄褐色・黒褐色土層（6層）中から出土した甕の口縁部～頸部片である。複合口縁で口縁下端がくの字状に突出し上端部にむけて緩やかに外反している。口唇部の器壁は薄く、外方へと細く尖り気味にすぼまっている。口縁部の約3分の1が残存し、復元口径19cm、器壁は0.2～0.8cmを測る。調整は風化が著しく不明瞭であるが、内外面ともヨコナデ、内面の頸部下端以下にヘラケズリが観察される。焼成は良好で明褐色を呈し、径1mm以下の微細砂粒を含む。安来市鍵尾遺跡A区5号墓出土資料と類似し、弥生時代後期後半から終末（松本編年出雲・隱岐V-4様式）頃の所産と推定される。

17-13は、覆土最下層の黄褐色・黒褐色土層（6層）中から出土した甕の口縁部～頸部片である。複合口縁で口縁下端がくの字状に突出し上端部にむけて強く外反している。口唇部の器壁は薄く、外方へと細く尖り気味にすぼまっている。口縁部の約5分の1が残存し、復元口径16.3cm、器壁は0.2～0.9cmを測る。調整は風化が著しく不明瞭であるが、内外面にヨコナデ、内面の頸部下端以下にヘラケズリが観察される。また、外面の胴部上端付近に数条の平行する直線紋が認められる。焼成は良好で明褐色を呈し、径2mm以下の微細な砂粒を含む。17-12と同様、弥生時代後期後半から終末（松本編年出雲・隱岐V-4様式）頃の所産と推定される。

時期と性格 覆土最下層から出土した土器片を重視すれば、弥生時代後期後半から終末頃の遺構である可能性が指摘される。土器の様相は、当遺構の東方に位置するSK01付近出土資料よりも、やや時期が下る状況を示している。

遺物の出土状況、遺構の形態、規模、周辺遺構との位置関係からするとSD04は単独で機能する溝ではなく、近在する土壙墓群を画する溝としての機能を帯びている可能性が高い。土壙墓群とほぼ平行して並ぶこと、先述した貼石状の躰石が溝の西壁斜面上から検出されたこと、周辺遺構と近い時期の弥生土器片が出土することはそれを傍証するものである。現時点では類推の域を出ないが、



第14図 南区SD01・同様石出土状況実測図 (S=1:60)
(アミかけした躰石は、地山直上の出土。他は、溝内堆積土中の出土)



第15図
南区SD02実測図
(S=1:60)

貼石状の礫石の存在、また尾根頂部周辺の方形マウンド状を呈する地形を勘案すれば、土塚墓群と言うよりは、むしろ墳丘墓に伴う周溝であった可能性も指摘しておきたい。

【SD02】(第15図)

位置 標高約32mを測る尾根頂部の緩斜面に位置する溝状遺構である。東方約1.6mにはSK04が、北方約2.2mにはSD03が近在する。他の周辺遺構と異なり、尾根筋に直交するような掘り方は認められず、SK01~04、SD01との平行関係はない。これらの遺構とは無関係に、単独で存在する印象がうかがえる。

形状・規模 明確な遺構検出面(地山面)における平面形は、蛇行する歪な形を呈する。溝の断面形は不整な「U」字形を呈しており一定していない。

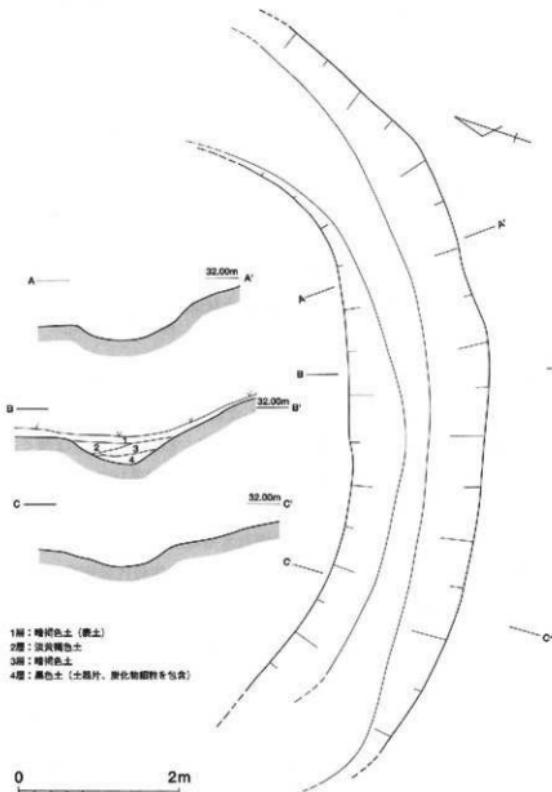
底面は判然とせず、凹凸が顕著で、地形なりに南東方向から北西方向へと緩やかに傾斜している。規模は、遺構検出面上で長さ約2.2m、幅0.4~0.7m、深さ約0.25m以下を測る。

覆土・遺物出土状況

覆土には木根が著しくはびこる暗褐色土が単層堆積していた。同層からは、弥生土器あるいは土師器の細小片が約10点出土しているが、いずれも周辺から流入、自然堆積したものと推察される。

時期と性格

遺構の明確な時期、性格とともに判然としない。調査前、付近に大木が存在したことから木根によ



第16図 南区SD03実測図 (S=1:60)

る擾乱の痕跡である可能性も高く、遺構としての評価には慎重を要する。

【SD03】（第16図）

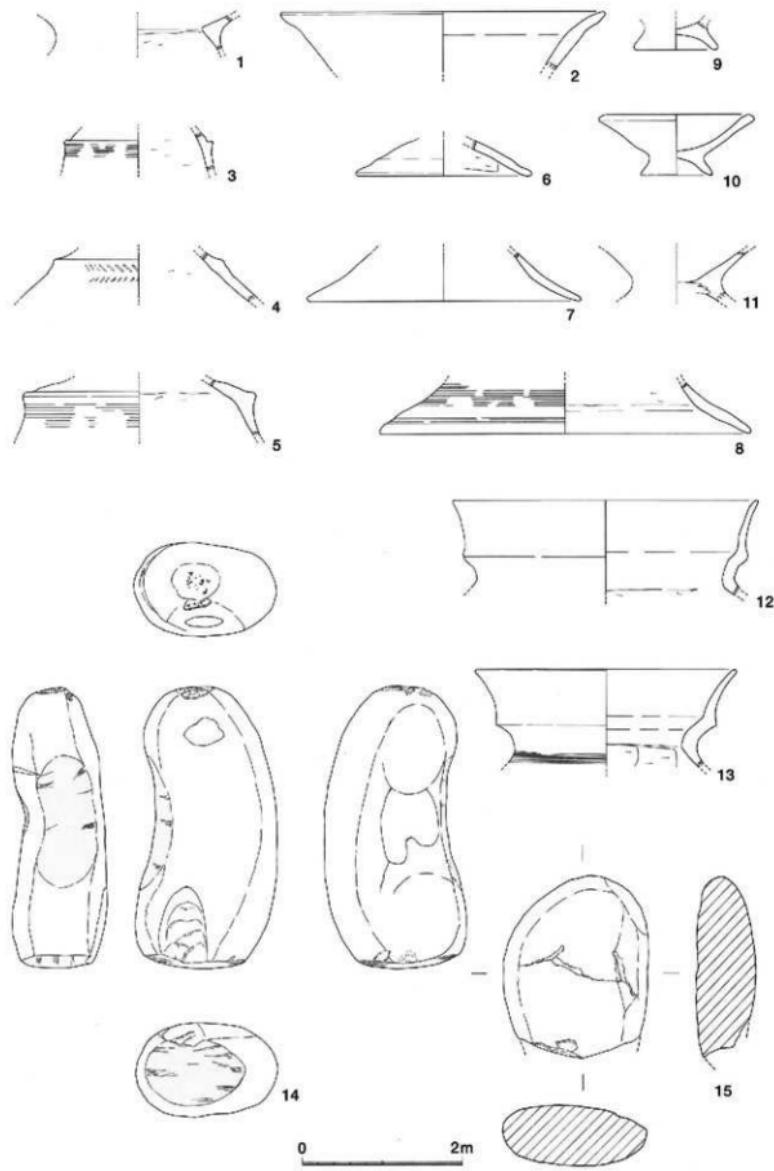
位置 既述した遺構群が存在する尾根頂部から北側へやや下がった標高約30.5～31.75mを測る緩斜面上に位置する溝状遺構である。南方約2mの尾根頂部にはSK03・04が近在し、北側には、標高約31m前後の歪な楕円形のマウンド状地形が隣接する。SD03は、ちょうどこの両地形に挟まれた窪み状の地形を形成していることになる。

形状・規模 明確な遺構検出面（地山面）における平面形は、整った弧状を呈している。遺構の両端は北側の谷地形の下方に向けて消失しており、本来の形状や規模は判然としない。断面形は緩やかな弧状を呈し、底面は地形なりに中央部から両端部へ向けて緩やかに傾斜している。規模は、遺構検出面上で長さ約10.3m、幅1.55～1.8m、深さ約0.3～0.5m前後を測る。地形観察の結果、北側のマウンド状地形を取り巻くように掘られたものと推測される。

覆土・遺物出土状況 覆土には第8・16回に図示したとおり、暗褐色腐植土からなる表土（1層）以下、淡黄褐色土（2層）、暗褐色土（3層）、黒色土（4層）の層序関係が見られた。このうち最下層の黒色土（4層）からは、弥生土器と推定される上器の細小片7点、炭化物の細粒多数が出土している。いずれも周辺の土砂とともに自然に流入したかのような状況にあり、埋納等の人為的な行為は看取されなかった。

時期と性格 遺構の明確な時期、性格ともに判然としないが、周辺地形から察するに北側のマウンド状地形を画する機能が推定される。

マウンド状地形については、発掘調査前の地形観察において墳墓の可能性が推察されたため、土層観察用のベルトを設定し表土以下慎重に掘削した。しかし、表土以下約10cm程度で全面が地山面に到達し、埋葬施設、伴出遺物は一切検出されなかった。調査時にはマウンド状地形の北側は急斜面の谷地形となっており、土砂流失等により旧地形は既に損壊したものと判断された。かつて墳墓が存在したとすれば、それに伴う周溝として機能した可能性が高いといえる。



第17図 南区東半部出土遺物実測図 (S=1:3)
(アミ部分は使用痕が認められる箇所を示す)

第3節 南区西半部の遺構と出土遺物

概要 標高20~26.5m前後を測る痩せ尾根の頂部及び緩斜面上から、一辺に溝を伴う方形状の墳丘墓もしくは古墳1基、石棺墓4基、石蓋土塚墓1基、土坑1基を検出した。遺構付近の土層堆積状況は、第4・5岡に図示したとおりである。痩せ尾根上の地形条件や後世の開墾等による地表面付近の削平のためか、現地表面から明確な遺構検出面（地山面）までの深さは、約5~15cmと浅かった。

【1号墳】

<調査前の状況と調査方法> (第18図)

調査前の現地は、主に松林と雜木林からなる山林であったが、地表面観察により方形に近いマウンド状の地形が観察された。そこで、墳丘墓もしくは古墳1基が存在するものと推測し、立木伐採後に地形測量を実施したうえで、墳形、規模、残存状況を検討し、上層観察用の畦（ベルト）を縦横ほぼ直交するように設定（第18図A-A'、B-B'）した。その後、土層観察を慎重に行いながら、表土以下の堆積土を墳頂部から丁寧に掘り下げ、墳丘盛上、埋葬施設、周溝、共伴遺物の検出に努めた。

<位置> (第6図)

南区を設定した丘陵の最下部で調査区西端付近の尾根頂部にあたり、標高約21~22.25mを測る。北東方向上方に痩せ尾根が続くが、他方は全て急斜面となっている。西方向への眺望は極めて良く、現、布志名の集落、水田が広がる小平野を一望することができる。

<墳丘>

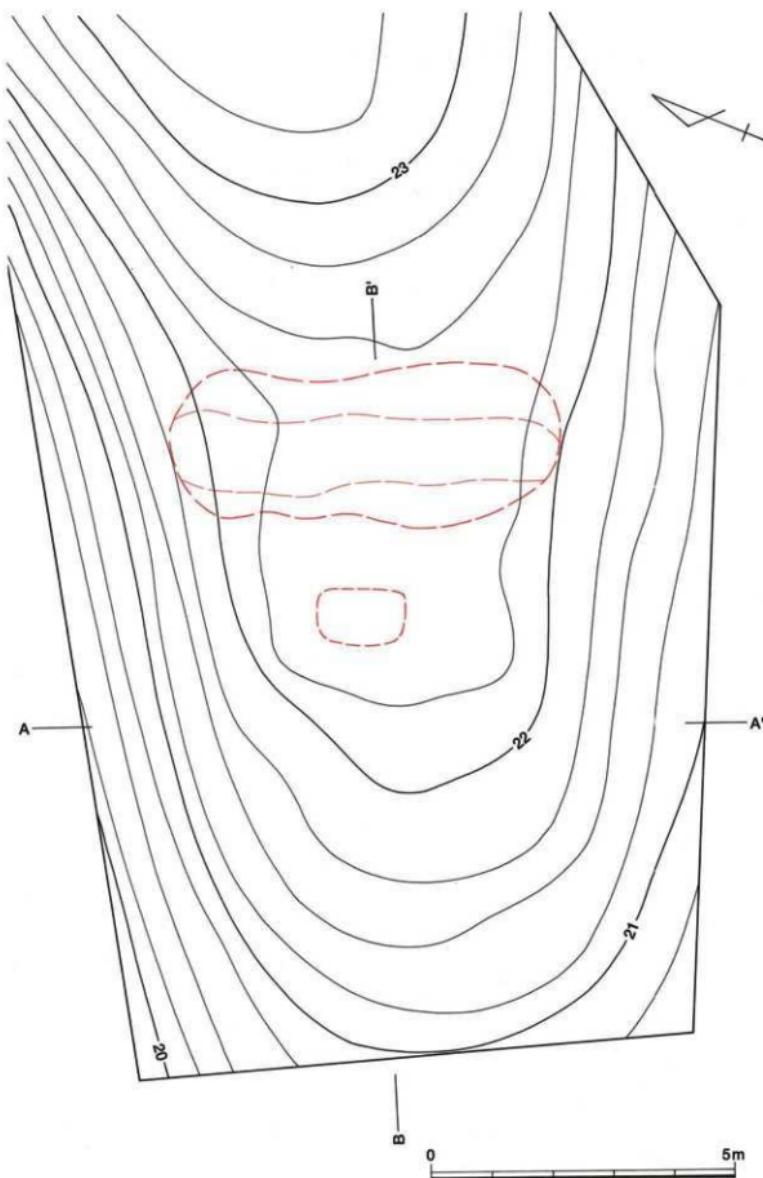
形状・規模 (第18・19・20図) よそ東西方向に伸びる痩せ尾根を、南北方向に寸断する1条の溝で区画した方形を基調とする墳丘である。丘陵頂部の自然地形を利用したもので、東側に幅の広い溝を持つ他は、周溝や段築、躰石、葺石等の外表施設は認めらない。そのため、いわゆる墳體、墳頂部の明確な区分は難しく、規模も判然としない。現状では、1辺6~7mの小規模な低墳丘と位置づけておく。

土層堆積・遺物出土状況 (第18・19図) 図示のとおり、墳丘付近には木根がはびこる表土以下、暗褐色土（1層）が単層堆積し、約5~20cmの深さで地山面に到達した。いわゆる明確な盛土層及び表土層の堆積は全く検出されず、墳丘付近から遺物は一切出土しなかった。

<周溝> (第18・19・20・21図)

形態・規模 (第21図) よそ東西方向の尾根筋を直交して寸断し墳丘東端を画するように掘られた浅く幅の広い溝である。平面形は直角長方形形状を呈し、横断面形は緩やかな弧を描く。溝底面の輪郭は不明瞭で、底面は中央部から北端側、南端側に向てそれぞれ緩やかに傾斜する。規模は、遺構検出面（地山面）上面で長さ約6.4m、最大幅約2.7m、深さ約0.4m以下を測る。溝の主軸（長軸）は、ほぼN-23°-Wをとる。

土層堆積・遺物出土状況 (第19図) 図示したとおり、周溝内には表土の暗褐色土（1層）以下、暗褐色土（2層）、淡黒褐色土（3層）という比較的単純な土層堆積が認められた。周溝は地山面を掘込んで作られており、その後墳丘や墳丘外の周辺土砂が流入し自然堆積して埋没したものと思われる。遺物は、周溝内最下層である淡黒褐色土（3層）から、炭化物の細粒が僅かに検出されたほかは一切出土しなかった。



第18図 南区1号墳調査前地形測量図 ($S = 1 : 80$)

<埋葬施設> (第19・20・21図)

墳頂付近を掘り下げる過程で、土壤1基を検出した。

位置 尾根頂部付近で、東側の周溝と約1.2mの距離にある。主軸（長軸）は周溝とほぼ平行し、尾根筋に対して直交する位置関係にある。明確な遺構検出面は地山面で、壁面、底面ともに地山面で確認された。

形状・規模 土壇の北側約3分の2の壁面は、調査時に誤って掘りとばしてしまったが、平面形は長方形を呈し、縦横の断面形はいずれも逆台形状を呈するものと推定される。規模は、遺構検出面上面で、長軸径約1.5m前後、幅約0.9m前後、深さ約0.25m以下を測るものと推定される。土壇の主軸（長軸）は、N-19°-Wをとる。

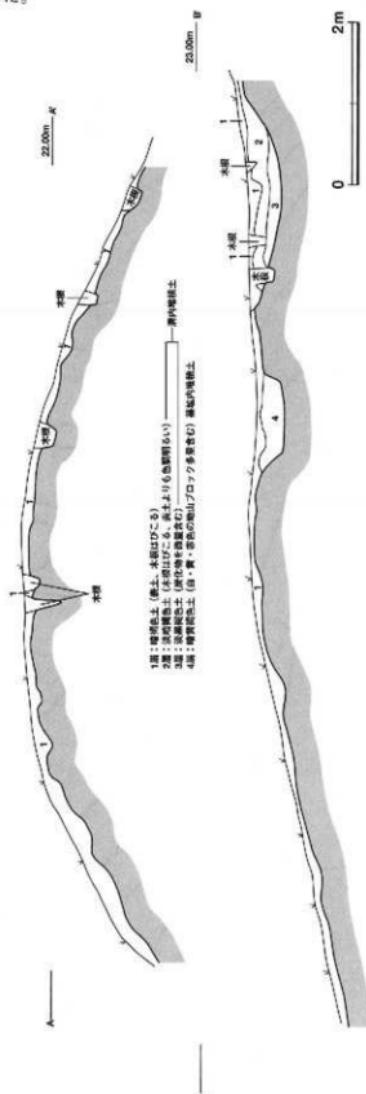
覆土・構造 (第19・22図) 土壇内は木根が著しくはびこり、地山ブロックを多量に含む暗黃褐色土が単層堆積していた。遺構検出面上面から上層の現地表面までは、約5-15cm程の表土、暗褐色土層の堆積が見られた。検出された土壤が比較的浅いことから、土壇本来の掘り込み面（掘り方）はこの土層もしくはこれより上層にあった可能性が高いが、現状では判然としない。

土層観察による限り、木棺等の埋設は想定されず、素掘り土壇であったと推定される。なお、土壇の形状等からは、被葬者の頭位を類推することはできなかった。

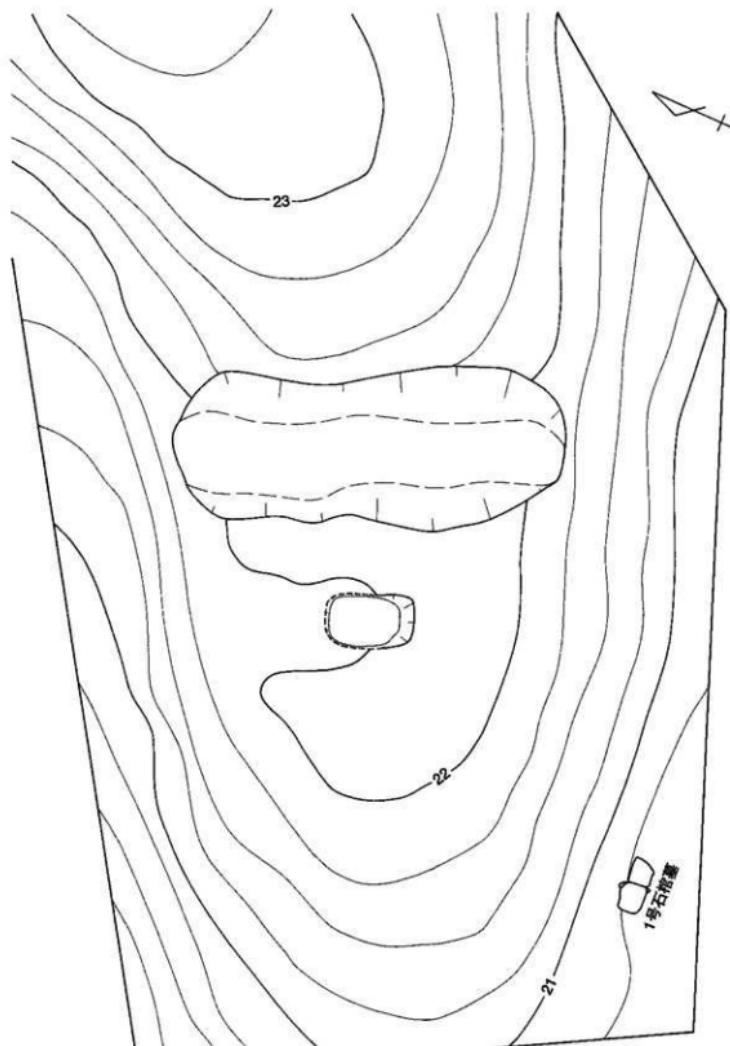
出土遺物 土壇内から、遺物は一切出土しなかった。

<時期と性格>

周辺から遺物が出土せず、時期を確定することはできない。墳丘、周溝、埋葬施設の状況、立地から察するに弥生時代から古墳時代にかけての低墳丘を有する小規模な墳丘墓もしくは古墳である蓋然性が高い。墳丘の築成方法については、遺構の残存状況に左右されるため判然としないが、尾根頂部の自然地形を利用し、1条の周溝で墳丘を画した比較的単純なものと推察される。

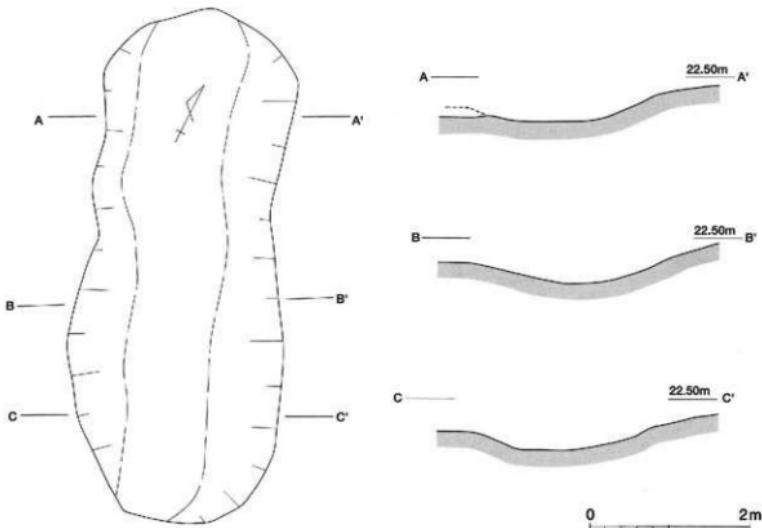


第19図 南区1号墳墳丘土層断面実測図
(S=1:60)



0 5m

第20図 南区1号墳調査後地形測量図 ($S = 1 : 80$)



第21図 南区1号墳溝実測図 ($S = 1:60$)

なお、墳丘の南下方の斜面上には、後述する小型の石棺（1号石棺墓）が検出された（第20図）。この墳丘付近にあえて構築されたかの印象をもつが、両者の共伴関係、先後関係は不明である。

【1号石棺墓】

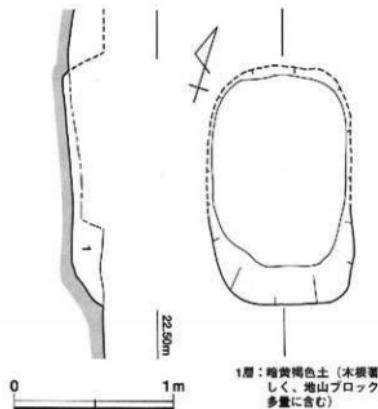
調査前の状況と位置（第18・20図） 調査前の現地は、主に植林と雑木林からなる山林であった。1号墳南側斜面を掘り下げる過程で、表土下から偶然蓋石が検出されたのが発見の契機である。

この石棺墓は、南区の西端付近で1号墳南方の標高約20.75m前後を測る斜面上から検出された。1号墳と近接するが、両者の共伴関係、前後関係は全く不明である。

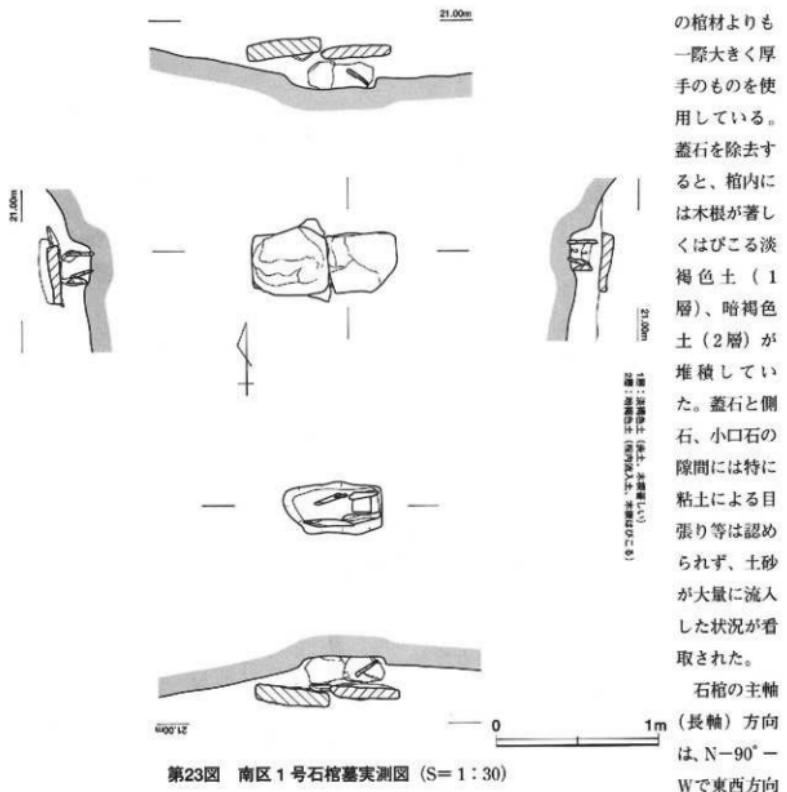
なお、この石棺墓に伴う周溝や埴丘などの付随施設、共伴遺物は一切検出されなかった。

石棺（第23図） 削石を組み合わせた小型の箱式石棺である。

蓋石は主として2枚の扁平な板状の石からなり、ほぼ東西に並べ置かれている。この石材には他



第22図 南区1号墳主体部実測図 ($S = 1:30$)



第23図 南区1号石棺墓実測図 ($S=1:30$)

の棺材よりも一際大きく厚手のものを使用している。蓋石を除去すると、棺内には木根が著しくはびこる淡褐色土(1層)、暗褐色土(2層)が堆積していた。蓋石と側石、小口石の隙間には特に粘土による目張り等は認められず、土砂が大量に流入した状況が看取された。

石棺の主軸は、N-90°Wで東西方向

に合致しており、丘陵斜面の等高線とほぼ平行し、斜面に対しておよそ直交する様に築かれている。

棺内の構造は、底石と西側小口石が無く、南北両側石と東側小口石から成る点が特徴的である。棺床は平坦な地山面となっており、ほぼ水平を保ち特別な構造は認められなかった。側石は板状の石からなり、北側に2枚、南側に2枚を立て並べている。前者よりも後者がやや厚手の石材を使用しており、地形上生じる棺材への負荷の差を考慮したものかもしれない。東側小口石は板状の石1枚からなり、棺内に向かって斜めに倒れ込むような状況で出土している。土圧によって内傾した可能性が高い。この小口石は両側石に挟まれるように配置されている。

規模は棺底面の内法で、長さ約0.5m、幅約0.12m、深さは約0.2m以下を測るものと推定され、箱式石棺としてはかなり小型である。

石棺材は全て、板状節理した安山岩からなり、遺跡周辺(松江市乃白～忌部周辺)で容易に採取できるものを使用しているようだ。

墓壙(第24図) 石棺を納めた墓壙は、明確な遺構検出面(地山面)において歪な長方形状を呈し、縱横の断面形は逆台形状を呈する素掘り上坑からなる。規模は石棺材がほぼ収まる程度で、遺構検

出面上面で、長軸径約0.6m、短軸径0.3m、深さ0.03~0.12mを測る。

時期と性格 遺物が出土せず、構築時期は判然としない。しかし、後述する古墳時代後半期頃の石棺墓と立地、形態等が類似するので、およそその頃の所産と考えておきたい。石棺墓としては、かなり小規模で小児埋葬用であった可能性もあるが判然としない。被葬者の頭位については不明である。

【2号石棺墓】

調査前の状況と位置 (第6図) 調査前の現地は、主に植林と雜木林からなる山林であった。発掘の過程で、表土下から偶然蓋石が検出されたのが発見の契機である。

2号石棺墓は、1号墳の東方約6~7mの標高約23.25m前後を測る緩斜面上に位置する。いわゆる尾根筋の緩斜面をあえて外して尾根頂部から南側へ若干下がった斜面上に意図的に築かれたような印象をもつ。この石棺墓に伴う周溝や埴丘などの付随施設、共伴遺物は一切検出されなかった。

石棺 (第25図) 割石を組み合わせた箱式石棺である。

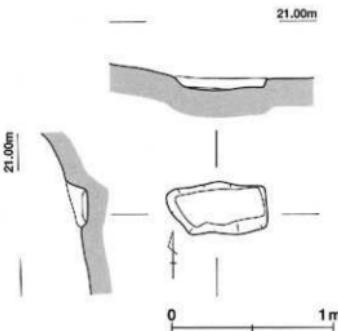
蓋石は主として10枚以上の扁平な板状石を二重、三重と重ねながら並置している。その石材は、他の棺材よりも大きく厚手のものを使用している。蓋石を除去すると、棺内には、木根が著しくはびこる褐色砂質土(1層)、黄色砂質土(2層)、黄白色砂質土(3層)が堆積していた。いずれも棺外から流入した土砂が大半と推察される。棺外には墓域の壁面との隙間に地山ブロックを多量に含む褐色土(4層)が単層堆積していた。これは、石棺を据え置くために充填されたいわゆる裏込め土に相当するものと推定される。蓋石と側石、小口石の隙間には特に粘土による目張り等は認められず、小砾石を利用して埋めようとする意図は看取されたが、棺内に土砂が大量に流入していた。

なお、当初、蓋石の形状に沿って調査用の縦横主軸線を設定したが、開蓋時に石棺本体の主軸軸と大きな誤差が生じることが判明した。よって、それ以後は、石棺本体の主軸線に従い発掘、実測図化を実施した。石棺の主軸(長軸)は、N-73°-Wをとる。

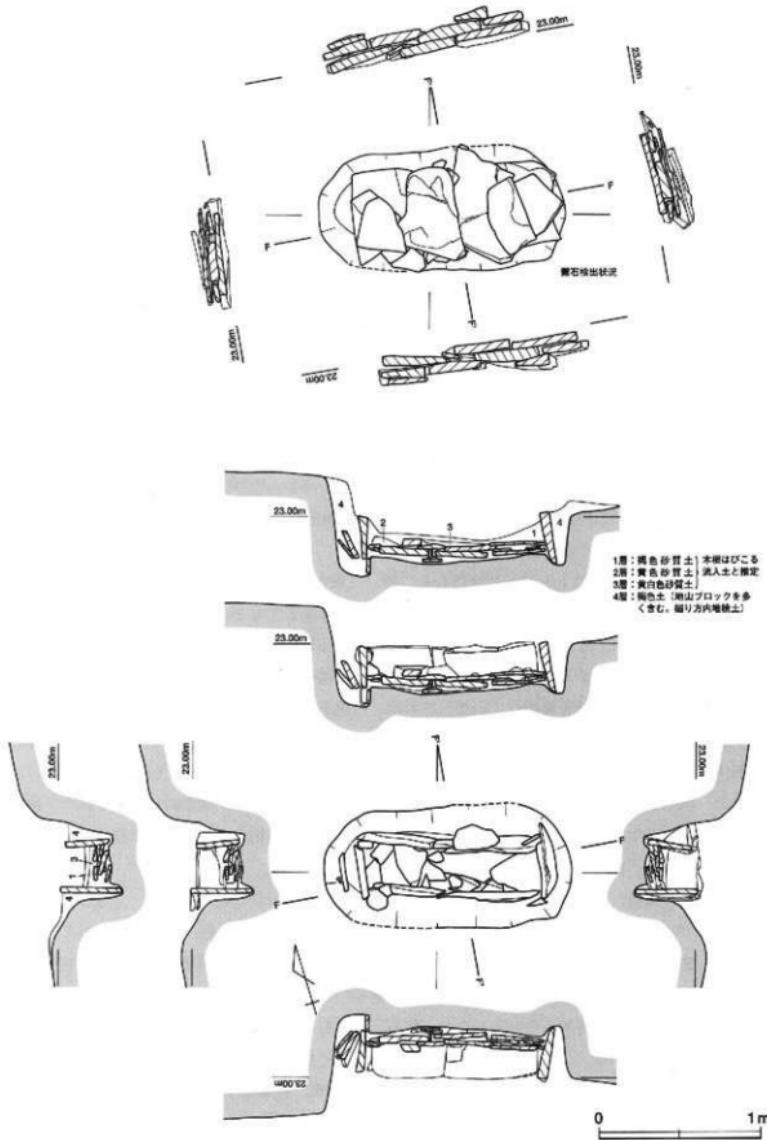
次に棺内の構造について述べる。棺床は、10枚以上の扁平な板状の底石を二重、三重と重ねながら並置しており、蓋石と構造が類似する。棺床面が底石上面とすれば、凹凸が顕著で決して平坦ではない。側石は長方形形状を呈する大型の板状石からなり、北側に2枚、南側に2枚を立て並べている。小口石は正方形形状の大型の板状石からなり、両小口に一枚ずつを用いている。それらが、両側石を挟み込むような配置がみられる。なお、側石、小口石とも、棺内に向かって若干内傾するような状況で出土している。これは、土圧によって内傾した可能性が高い。なお、西側小口石の外側に2~3枚の扁平な板状石が外傾して立っているが、この機能、用途は不明である。

規模は棺底面の内法で、長軸径約1.1m、短軸径約0.25m、深さは約0.2m前後を測る。

石棺材の岩種は、全て板状節理した安山岩からなり、遺跡周辺(松江市乃白~忌部周辺)で容易に採取できるものを使用している。



第24図 南区1号石棺墓基壇掘り方実測図
(S=1:30)



第25図 南区2号石棺墓実測図 ($S = 1 : 30$)
(F-F'、F'-F'は、蓋石の縱横断線を示す)

墓壙（第26図） 石棺
を納めた墓壙は、明確な遺構検出面（地山面）において直な長楕円形状を呈し、石棺本体よりも一回り大きい。底面には、側石、小口石を安定して据え置くため、棺材の形状に合わせて掘られた浅い溝がめぐっている。

規模は、遺構検出面上で、長軸径約1.5m、短軸径約0.75m、掘り方上面から溝を除く底面までの深さ0.25~0.5mを測る。

時期と性格 遺物が出土せず、構築時期は判然としない。しかし、後述する古墳時代後期頃の石棺墓（3号墓）と立地、形態、構造等が類似するので、およそその頃の所産と考えておきたい。石棺墓としては小規模で小兒埋葬用であった可能性もあるが判然としない。なお、石棺の小口幅の大小、蓋石の状況から被葬者の頭位は東方小口側であったと推察される。

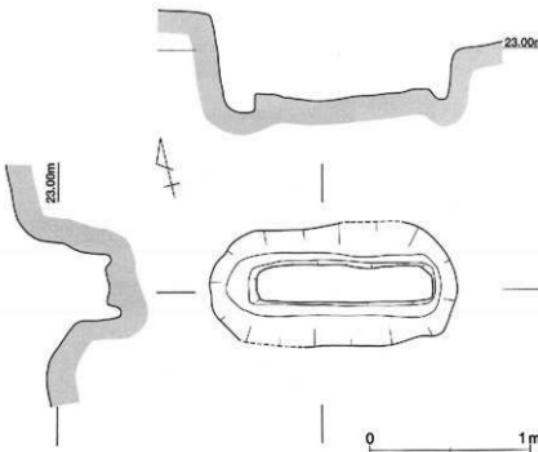
【3号石棺墓】

調査前の状況と位置（第6図） 調査前の現地は、主に植林と雑木林からなる山林であった。発掘の過程で、表土下から偶然蓋石が検出されたのが発見の契機である。

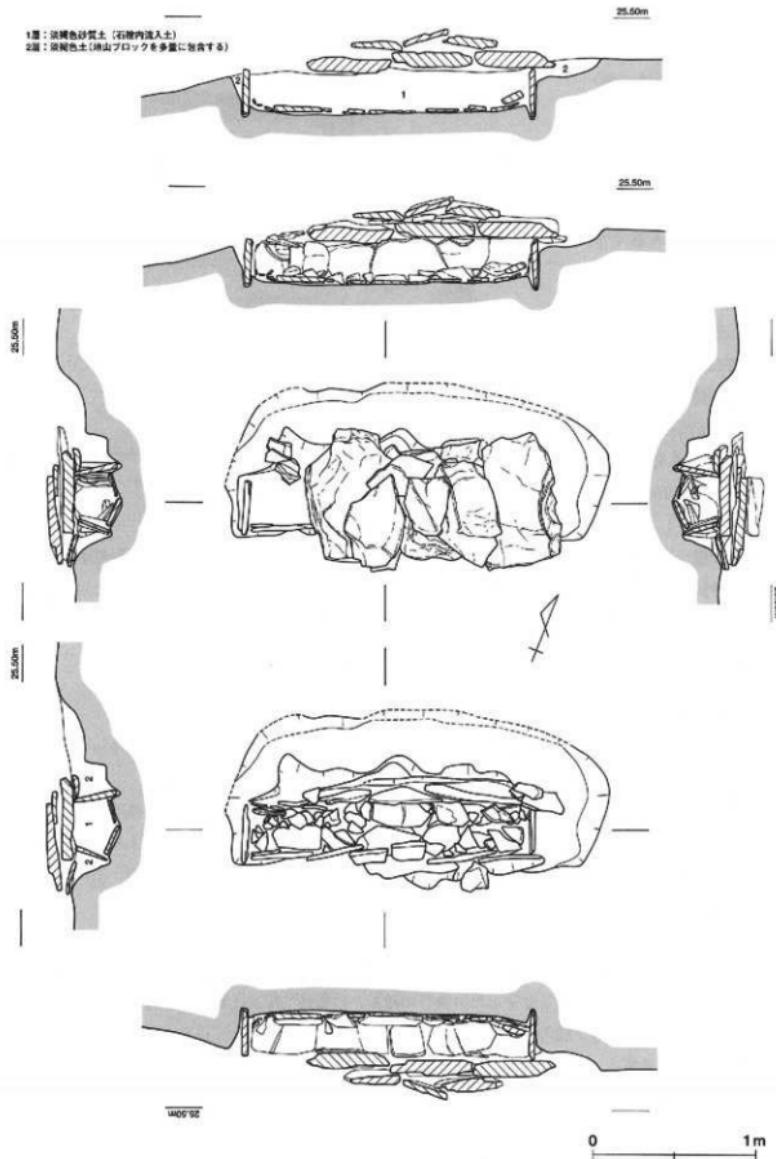
3号石棺墓は、尾根筋上の標高約25.25m前後を測る緩斜面に位置する。2号石棺墓の斜面上方約9~10mの地点にあたり、北方約1mの斜面上方にはSK05が、同じく約4mの斜面上方には4号石棺墓が近在する。この石棺墓に伴う周溝や埴丘などの付随施設は検出されなかったが、石棺北側の墓壙内上層部から須恵器の蓋杯が二組出土している。

石棺（第27図） 割石を組み合わせた箱式石棺である。

蓋石は、主として大小7~8枚の扁平な板状石を二重、三重と重ねながら並置している。ただし、西側小口付近には蓋石が存在しなかった。後世に何らかの事情で除去されたか、自然流失した可能性がある。蓋石の石材は、他の棺材よりも一際大きく厚手の材を使用している。蓋石を除去すると棺内には淡褐色砂質土（1層）が単層堆積していた。棺外から流入した土砂が大半と推察される。棺外には墓壙壁面との空間に地山ブロックを多量に含む淡褐色土（2層）が単層堆積していた。これは、石棺を据え置くために充填されたいわゆる裏込め土に相当するものと推測される。蓋石と側石、小口石の隙間に特に粘土による目張り等は認められず、小砾石を利用して埋めようとする意図は看取されたが、土砂の流入は顯著に認められた。



第26図 南区2号石棺墓壙掘り方実測図 (S=1:30)



第27図 南区3号石棺墓実測図 (S=1:30)

石棺の主軸（長軸）は、N-68°-Eをとる。棺床には約30枚程の小型の扁平な底石を両側石側から棺底の主軸（長軸）に向かい内傾するように敷き並べおり、棺底面は断面V字形を呈している。遺体を安置するには不安定で特異な構造であるとの印象が否めない。両側石は長方形あるいは正方形を呈する比較的大型の板状石からなり、片側にそれぞれ5枚前後を立て並べている。小口石は、両小口に一枚ずつ正方形の大型の板状石を用いており、東側小口石は両側石に挟み込まれ、西側小口は両側石を外側から押さえるような配置となっている。両側石は棺内に向かって内傾するような状況で検出されており、周辺堆積土の土圧によって内傾した可能性が高い。

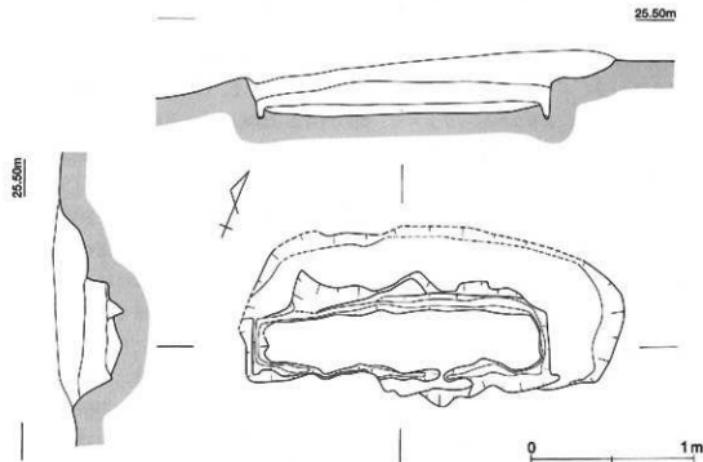
規模は棺底面の内法で、長軸径約1.72m、短軸径約0.38m、深さは約0.2~0.25m前後を測る。

石棺材の岩種は、全て板状節理した安山岩からなり、遺跡周辺（松江市乃白一忌部地域）で容易に採取できるものを使用している。

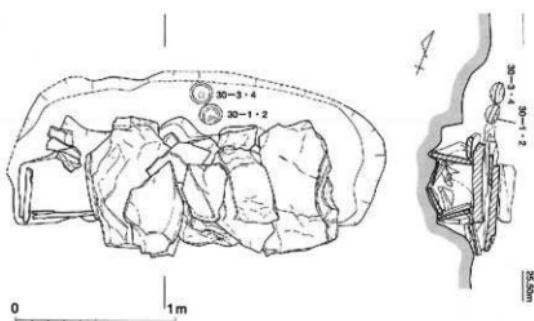
墓壙（第28図） 石棺を納めた墓壙は、明確な遺構検出面（地表面）において歪な隅丸長方形形状を呈し、一部二段掘りとも呼びうる構造を有している。それは、図示したとおり、この墓壙が石棺より一回り大きい程度の石棺自体を埋設するための掘り方（下段）と、その掘り方を大きく取り囲む浅い土坑（上段）の二つの土坑から構成されているからである。この両者が同時に掘られた一体のものなのか、また、ある時期差をもって掘られた別々のものなのかは判然としない。ただし、両者の位置的な合致、墓壙内の土層堆積状況、後述する須恵器の出土状況からすると、同一遺構ととらえる方が妥当である。ここでは3号石棺墓にかかる一つの墓壙として報告する。

まず、一段目の浅い掘り方は、石棺の北側石、東側小口石の棺外方向へと広がりをみせる大きなものである。長軸径約2.3m、短軸径約1m弱、一段目の平坦面までの深さ0.17m以内、墓壙最底面までの深さ0.4m以内を測る。

この浅い墓壙の南隅部に沿って石棺自体の掘り方である二段目の墓壙が偏在する。この墓壙は、



第28図 南区3号石棺墓墓壙掘り方実測図 (S=1:30)



第29図 南区3号石棺墓遺物出土状況実測図 (S=1:30)

石棺の側石、小口石の縁辺に沿うように掘られており、底面には、側石、小口石を安定して据え置くため、棺材の形状に合わせた浅い溝がめぐっている。底面の横断面は石棺底石と対応して断面V字形に掘り窪められている。規模は、上面で、長軸径約1.9m、短軸径約0.72m、そこから墓壙底面までの深さ0.25m以内を測る。

既述のとおり墓壙内の覆土には、地山ブロックを多量に含む淡褐色土（第27図2層）の単層堆積が観察され、分層はしかねる状況にあった。

出土遺物（第29・30図） 石棺蓋石の北側に近接し、墓壙内覆土の上層から、須恵器の蓋杯2組が水平に据え置かれたかのような状況で出土している。いずれも杯身の上に蓋をしっかりと被せた状態であったが、内部から遺物は検出されなかった。石棺の蓋石とほぼ水平位にあたることから、被葬者を棺内に安置し蓋石を閉じた際、墓壙内の裏込め土層中に副葬もしくは供獻行為に伴って埋納したものと推察される。

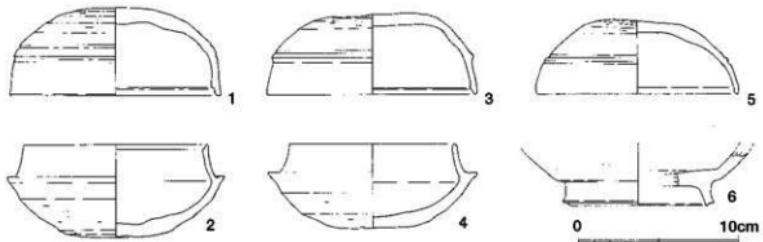
また、この墓壙上の表土付近からは、高台付きの須恵器小片1点が出土している。石棺に直接伴う遺物ではなく、周辺から偶然流入したものと推定される。

出土遺物は以下のとおりである。

30-1は、ほぼ完形で出土した須恵器の杯蓋である。口縁端部を肥厚させ、その内側に沈線を入れ段状にしている。天井部と肩部の境には、二条の沈線がめぐる。口径13.1cm、器高5.5cmを測る。調整は、外面天井部に丁寧な回転ヘラケズリ、他の内外面は回転ヨコナデを施し、内面天井部には回転ナデの後、不定方向のナデが認められる。焼成は良好で淡灰色を呈し、微細な砂粒を少量含むが緻密である。古墳時代後期前半（大谷編年出雲2期）頃の所産である。

30-2は、30-1と組合わさせて出土した須恵器の杯身である。口縁部の立ち上がりは高く、口縁端部を僅かに肥厚させ内部を段状にしている。完形で口径11.3cm、器高5.8cmを測る。調整は、外面底部に丁寧な回転ヘラケズリ、他の内外面は回転ヨコナデを施し、内面底部には不定方向のナデが認められる。焼成は良好で淡灰色を呈し、微細な白色砂粒を多く含むが緻密である。古墳時代後期前半（大谷編年出雲2期）頃の所産である。

30-3は、完形で出土した須恵器の杯蓋である。口縁端部を僅かに肥厚させ、その内側を段状にしている。天井部と肩部の境には、二条の沈線とその間にやや強い棱がめぐる。口径13.0cm、器高5.1cmを測る。調整は、外面天井部に丁寧な回転ヘラケズリ、他の内外面は回転ヨコナデを施し、内面天井部には回転ナデの後、不定方向のナデが認められる。焼成は良好で淡灰色を呈し、4mm以下の微細な砂粒を多く含むが緻密である。古墳時代後期前半（大谷編年出雲2期）頃の所産である。



第30図 南区西半部出土遺物実測図 (S=1:3)

30-4は、30-3と組合わさって出土した須恵器の杯身である。口縁部の立ち上がりは高く、口縁端部を僅かに肥厚させるが内面に段は無い。ほぼ完形で口径10.3cm、器高5.3cmを測る。調整は、外面底部に丁寧な回転ヘラケズリ、他の内外面は回転ヨコナデを施している。焼成は良好で淡灰色を呈し、4mm以下の微細な白色砂粒を多く含むが緻密である。古墳時代後期前半（大谷編年出雲2期）頃の所産である。

30-6は、墓壇上の表土付近から出土した須恵器の高台付き杯身片である。底部から杯部にかけての小片で、底部全周約10分の1が残存する。復元底径9.3cmを測る。調整は、内面と外面底部に回転ヨコナデ、外面杯部に回転ヘラケズリを認めることが出来る。7世紀後半から8世紀前半頃の所産と推定される。

時期と性格 墓壇内から出土した2組の蓋杯から、3号石棺墓は古墳時代後期前半頃の所産と推定される。南区から検出された他の石棺墓とは、立地、形態、構造等の共通点も多いが、相違点もある。とりわけ石棺の規模が他に比して一際大きいこと、石棺を大きく取り囲む墓壇の存在、須恵器の副葬もしくは供献の状況などである。なお、石棺の小口幅の大小、蓋石の状況から被葬者の頭位は東方の小口側であったと推察される。

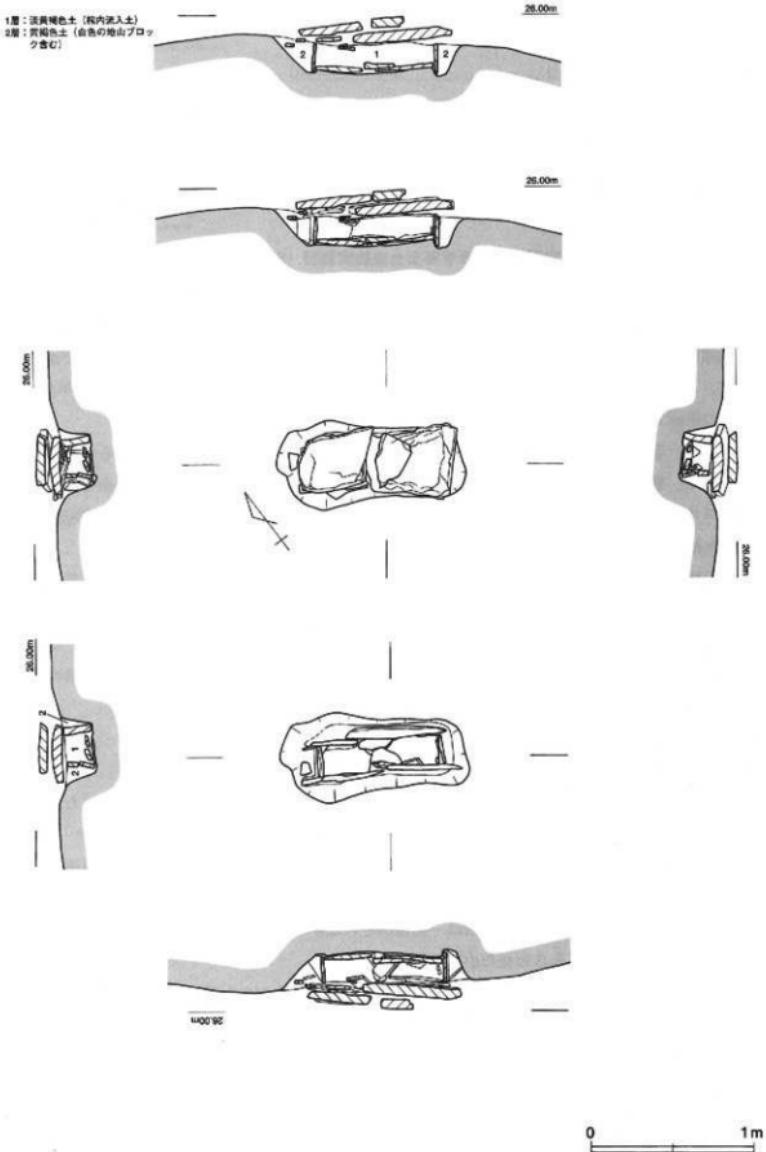
【4号石棺墓】

調査前の状況と位置（第6図） 調査前の現地は、主に植林と雜木林からなる山林であった。発掘の過程で、表土下から偶然蓋石が検出されたのが発見の契機である。

4号石棺墓は、標高約26m前後を測るいわゆる尾根筋の緩斜面上に立地する。東方の斜面上方約5mには1号石蓋土壙墓が、南方の斜面下方約2.5mの地点にはSK05が近在する。この石棺墓に伴う周溝や壇丘などの付随施設、共伴遺物は一切検出されなかった。

石棺（第31図） 削石を組み合わせた小型の箱式石棺である。

蓋石は主として大型の扁平な板状石2枚を並置し、それより小型の板状石を部分的に重ね置く構造を呈している。これは、1号石棺墓の蓋石と比較的似ている。石材は、他の棺材よりも大きく厚手のものを使用している。蓋石を除去すると、棺内には淡黄褐色土（1層）が単層堆積していた。棺外から流入した土砂が人半と推察される。棺外には墓壇壁面との空間に地山ブロックを含む黄褐色土（2層）が単層堆積していた。これは、石棺を据え置くために充填されたいわゆる裏込め土に相当するものと推定される。蓋石と側石、小口石の隙間には特に粘土による目張り等は認められず、隙間を小蝶石を利用して埋めようとする意図は看取されたが、上砂の流入は顯著であった。



第31図 南区4号石棺墓実測図 (S=1:30)

石棺の主軸（長軸）は、N-53°-Wをとる。棺床は、4枚程の扁平な板状の底石を一部重ねながら敷き並べている。棺床面が底石上面とすれば、凹凸が顕著で決して平坦ではない。側石は長方形状を呈する大型の板状石からなり、北東側に2枚、南側に2~3枚を立て並べている。両側石とともに棺内に向かって若干内傾するような状況で出土している。

これは、土圧によって内傾した可能性が高い。小口石は、両小口に一枚ずつ方形状の扁平な板状石を用いている。小口石は両側石によって挟まれ、底石の両端を挟み込む位置に立てられている。

規模は棺底面の内法で、長軸径約0.73m、短軸径約0.21m、深さは約0.15m前後を測る。

石棺材の岩種は、全て板状節理した安山岩からなり、遺跡周辺（松江市乃白～忌部周辺）で容易に採取できるものを使用している。

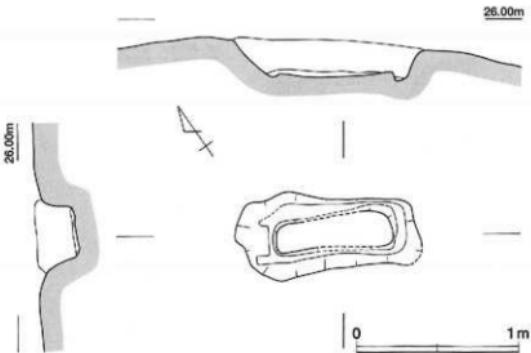
墓壙（第32図） 石棺を納めた墓壙は、明確な遺構検出面（地表面）において歪な隅丸長方形状を呈している。石棺本体よりも一回り大きい。底面に棺材の形状に合わせ、側石、小口石を安定して据え置くための浅い溝がめぐっている。規模は、遺構検出面上面で、長軸径約1.15m、短軸径約0.42m、掘り方上面から溝を除く底面までの深さ0.25m前後を測る。

時期と性格 遺物が出土せず、構築時期は判然としない。近在する石棺墓と立地、形態、構造等が類似するので、およそ古墳時代後半期頃の所産と考えておきたい。石棺墓としては小規模で小児埋葬用の可能性もあるが判然としない。なお、石棺の小口幅の大小、蓋石の状況から被葬者の頭位は南東方向の小口側であったと推察されるが定かではない。

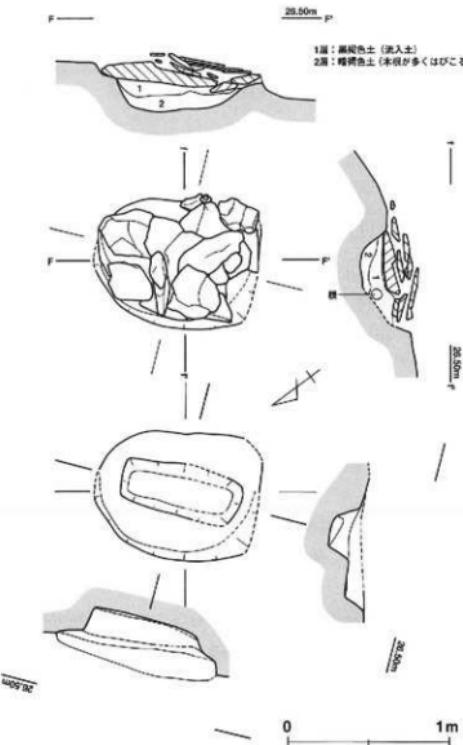
【1号石蓋土壙墓】

調査前の状況と位置（第6図） 調査前の現地は、主に植林と雑木林からなる山林であった。発掘の過程で、表土下から偶然蓋石が検出されたのが発見の契機である。4号石棺墓の斜面上方約5mの位置に当たり、標高約26.25m前後を測る緩斜面上に位置する。いわゆる尾根筋を外して尾根頂部から南東側へ若干下がった地点にある。付近に墳丘や周溝など付随する遺構は検出されなかった。

構造と規模（第33図） 蓋石は10枚以上の扁平な板状石を二重、三重と重ね、小山状に積み置いている。大小の割り石を使用し、土壤上をぼぼ覆いつくしている。長軸径約1m、短軸径約0.75m、厚さ約0.2m以内を測る。蓋石を除去すると土壤内には黒褐色土（1層）、暗褐色土（2層）が堆積していた。蓋石の隙間には特に粘土による目張り等は認められず、周辺の土砂が多量に流入したものと推察された。蓋石の岩種は、灰褐色を呈する板状節理した安山岩からなり、遺跡周辺（松江市



第32図 南区4号石棺墓墓壙掘り方実測図 (S=1:30)



第33図 南区1号石蓋墓実測図 (S=1:30)

面から上塙底面までの深さ約0.4m前後を測る。

出土遺物 (第6・30図) 直接伴う遺物は出土しなかったが、第6図に図示したとおり遺構の南東下方約1.2mの斜面上から、須恵器の杯蓋1点が出土している。付近に他の遺物が出土しないこと、近接する地山直上面から出土していることから、元来この遺構に伴う可能性が高いといえる。

30-5が、ほぼ完形に復元された須恵器の杯蓋である。口縁端部を僅かに肥厚させ、その内面に極浅い沈線をめぐらせており。天井部と肩部の境には、二条の沈線がめぐる。口径12.5cm、器高4.6cmを測る。調整は風化のため不明瞭であるが、外面天井部に回転ヘラケズリ、他の内外面には回転ヨコナデを施し、内面天井部には回転ナデの後、不定方向のナデを施している。焼成は良好で灰白色を呈し径1~2mmの微細な砂粒を多く含む。古墳時代後期後半（大谷編年出雲3期）頃の所産である。

時期と性格 付近から出土した須恵器の年代を重視して古墳時代後期後半頃の所産と推定する。規模・構造・立地が近在する石棺墓類と似ており、いわゆる石蓋土壙墓と推定される。埋葬主体部である遺構中央の土壙は小規模であり、小児埋葬用の可能性もあるが判然としない。なお、被葬者の

乃白～忌部周辺で容易に採取できるものを使用している。

なお、当初、蓋石の形状に従って調査用の縦横主軸線を設定したが、開蓋時に土壤の主軸と異なることが判明した。そのため、図示したとおり蓋石と上塙はそれぞれ異なる主軸線によって図化している。

蓋石下の地山上には、不整な長方形形状を呈する一部二段掘りの土壙が検出された。中央部は平面長方形、縦横断面逆台形形状を呈し、底面がほぼ水平に整った土壤が掘られている。この土壤の周辺に認められるテラスは、蓋石をほぼ水平に埋設するための構造と察せられる。遺構の主軸（長軸）方向は、等高線とほぼ平行しており、N-51°-Eをとる。

規模は明確な遺構検出面上で、上段の土壤が、長軸径約1m、短軸径約0.8m、深さ約0.13m以内を測る。下段の土壤は、長軸径約0.75m、短軸径約0.32m、テラス

頭位方向は判然としない。

【SK05】

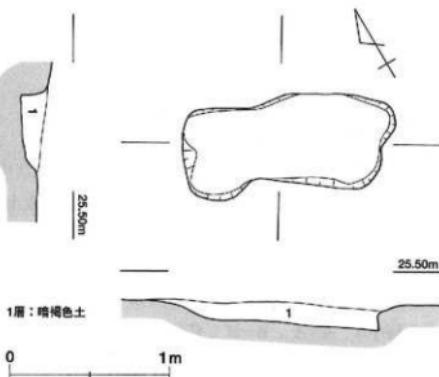
位置（第6図） 標高約25.5mを測る尾根筋の緩斜面に立地する。南側約1mには3号石棺墓が近接し、北方約2.5mの斜面上方には4号石棺墓が近在する。およそ北東から南西方向に伸びる尾根筋に対して、主軸（長軸）方向を直交させ、斜面の等高線と平行するように築かれている。

形状・規模（第34図） 平面形は歪な長方形形状を呈し、縦横の断面形はいずれも不整形を呈している。規模は、遺構検出面上面（地山面）で長軸径1.25m、短軸径0.53m、深さ約0.17m以内を測る。土坑の主軸（長軸）は、N-59°-Wをとる。

覆土 遺構内には暗褐色土の単層堆積が認められた。土層観察による限り、素掘りの土坑であったと推定される。遺構検出面上面から上層の現地表面までは、約20cm程の堆積土が確認された。土坑本来の掘り込み面（掘り方）はこの土層中にあった可能性もあるが、現状では判然としない。

出土遺物 遺構周辺から遺物は一切出土していない。

時期と性格 遺物が出土せず時期は不明である。他の石棺墓や土壙墓と立地や規模が似ているので、土壙墓の可能性もあるが定かではない。



第34図 南区SK05実測図 (S=1:30)

（註1） 本書における弥生土器の年代観については、下記文献を参考にした。

松本岩雄「7 出雲・隠岐地域」「弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編」（1992年）

（註2） 本書における須恵器の年代観については、下記文献を参考にした。

大谷亮二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥根考古学会誌』11（1994年）

第5章 北区の調査

第1節 北I区の遺構と遺物

概要（第35・36・38図） 標高約25.5～30mを測る幅広い尾根筋の丘陵頂部から、墳丘墓4基、土坑もしくは土壙墓9基等を検出した。遺構に伴って弥生土器小片、石器、鐵器等が少量出土している。

基本層序（第36・37図） 当調査区は、調査前は雜木林からなる山林及び竹林であった。そのため、伐木後の地表面には大小の木根が著しくはびこり、木根による層序の攪乱も隨所に認められた。

基本層序は、A-A'、B-B'、C-C' ライン（第36図）の土層断面に代表される。

調査区内の大部分において、表土下には木根が著しくはびこる暗褐色土（1層）が堆積し、その下層には地山風化土の可能性がある淡褐色土（2層）の堆積が認められた。多くの遺構の確実な検出面は、その下層の地山面であった。遺構付近の土層堆積状況は別途述べる。

現地表から地山面までの深さは約10～40cm程と浅かったが、淡褐色土（2層）を地山の一部が自然風化した土層と想定すると、これよりもさらに浅く、表土下約10cm以内で地山に到達することになる。地山上の堆積上が浅いのは、谷に挟まれた尾根頂部という地形条件、太平洋戦争の戦前・戦中・戦後の暫定期間、一部が畑作地として開墾、削平されたことに起因するものと推測される。遺物は、遺構内堆積土のほか、表土下の暗褐色土（1層）から出土している。

【北I区1号墓】

<調査方法>（第39・40図）

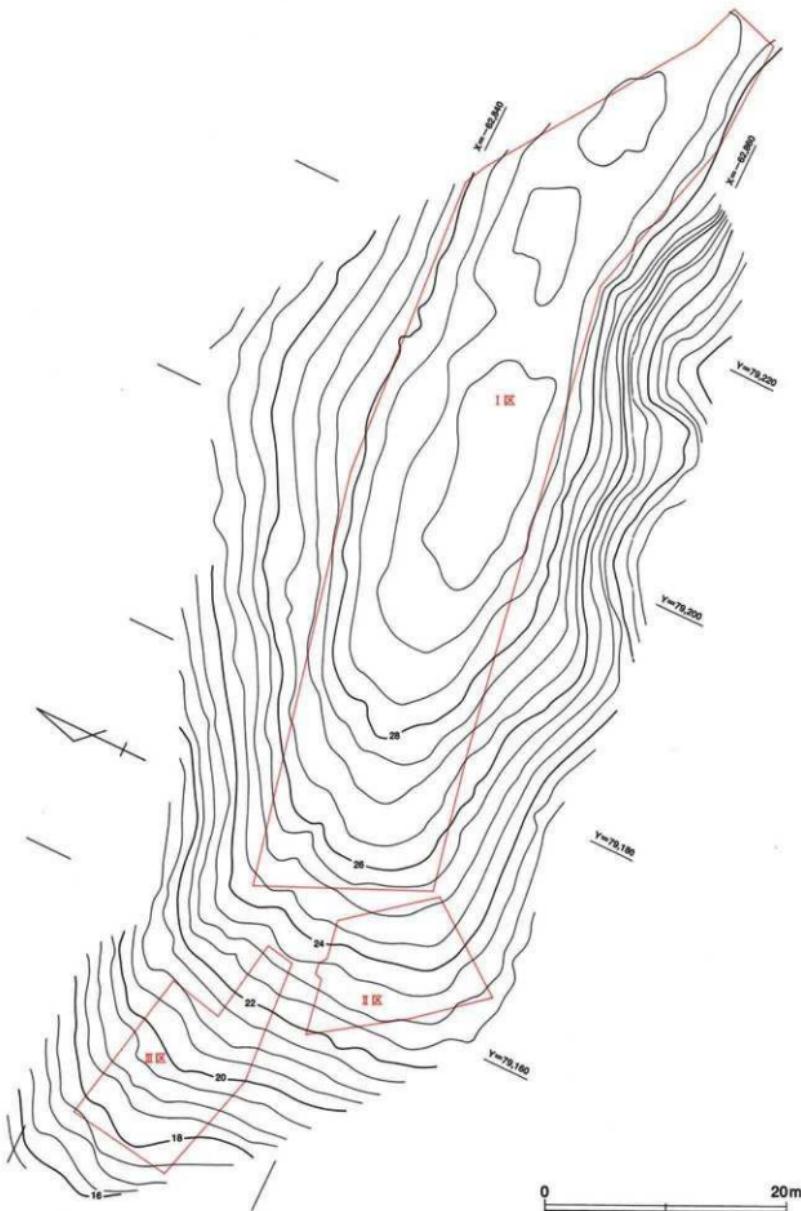
トレント調査で検出された貼石の一部から墳丘規模と形状を推定し、立木伐採後に詳細な地形測量を実施した（第39図）。これを受けて、墳丘の立地、墳形、規模、残存状況をさらに検討し、土層観察用の畦（ベルト）3本の設定（第39・40図A-A'・B-B'・C-C'）を行なった。

この土層観察用の畦を残し、表土以下の堆積土を墳頂部から慎重に掘り下げた。墳形、規模、構築方法、築造時期の確定を念頭に置き、墳丘盛土、埋葬施設、旧表土層、地山面、貼石、周溝、伴出遺物の検出に努め、隨時写真と実測による記録化を実施した。記録保存決定後は、追加調査として、貼石の除去を伴う配石構造の調査、墳丘の断ち割り調査、墳丘盛土の除去を伴う墳丘下層の地山面精査を実施した。

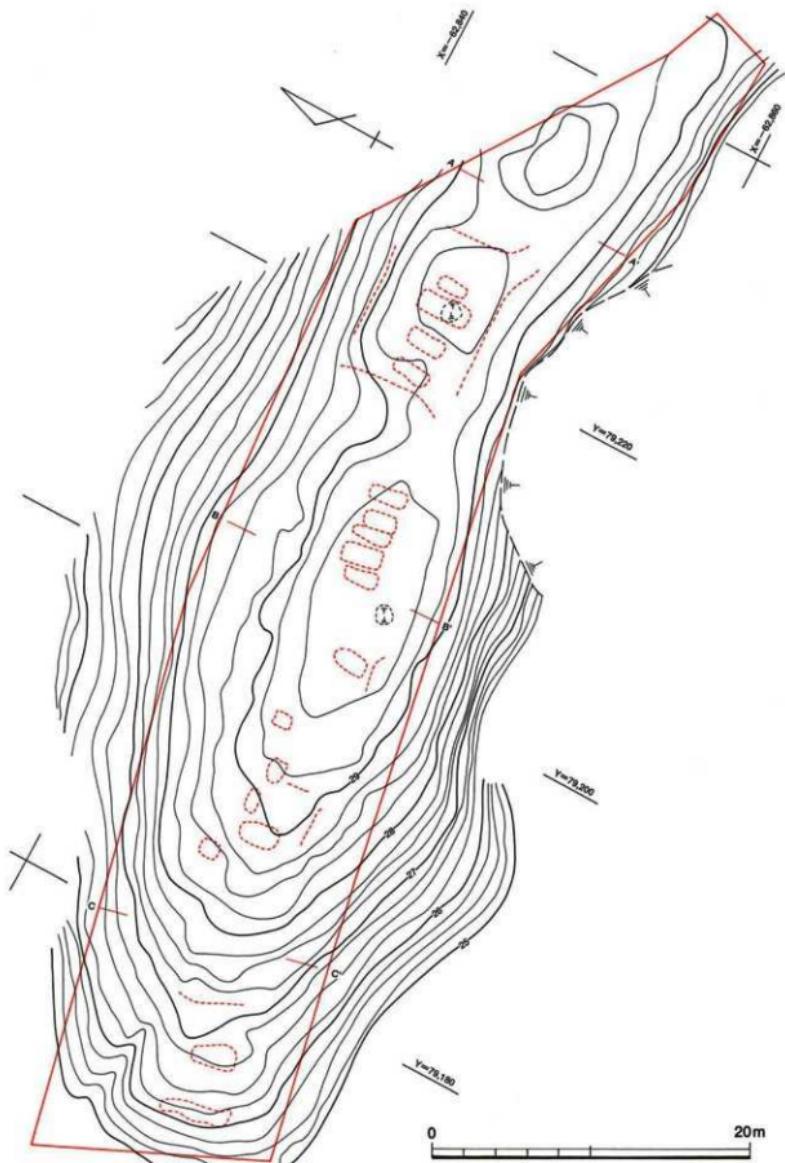
<位 置>（第36・38・39図）

北I区の東端近くに位置する。ほぼ東西方向に伸びる尾根筋の頂部平坦面にあたり、標高28～29.5mを測る地点である。1号墓の北下方は、緩やかな傾斜の谷となり、南方は土砂崩れも認められる急傾斜の谷地形となっている。西方約6mにはSK04～08の土壙墓群が近在している。調査前の地形観察、測量時には、東方約4mに低墳丘状の地形が観察されたが、ここからは明確な遺構、遺物は検出されなかった。

現状では周辺が山林となり見通しはさほど良くないが、樹木が無ければ、北方には宍道湖、島根半島を眺望し、西方眼下には玉湯町布志名の集落及び水田の広がる小平野を望むことができる。



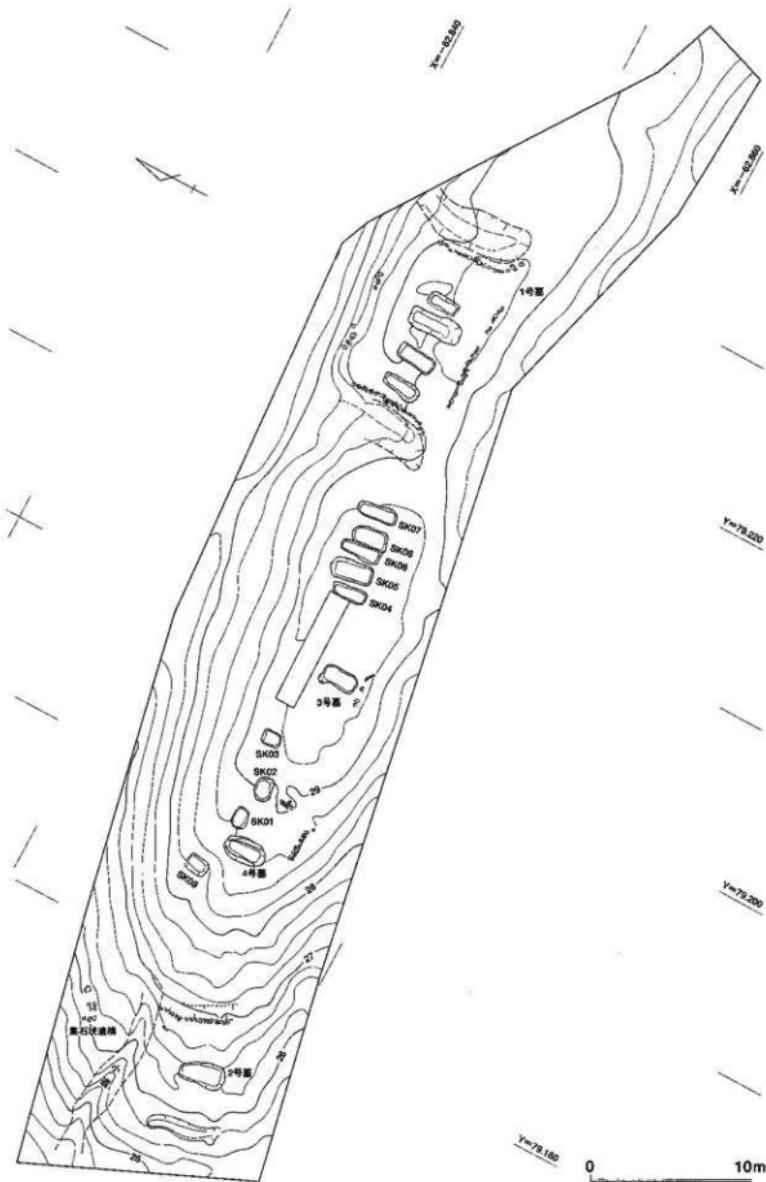
第35図 北区調査前地形測量図・調査区配置図 ($S = 1 : 400$)



第36図 北Ⅰ区調査前地形測量図 ($S = 1 : 300$)



第37図 北I区土層断面実測図 ($S=1:60$)



第38図 北I区調査後地形測量図・造構配置図 (S = 1 : 300)

<墳丘>

形態・規模（第39・40・41・42・43図） 調査前の地形観察・測量（第39図）において、低墳丘状の高まりを認めることはできたものの、墳丘及び周溝の形態・規模・位置関係を類推するには至らなかった。およその形態や規模が確定されたのは、発掘調査が進み、表土を除去し、外表施設としての貼石が確認された段階である（第41図）。その後、築造時の原位置を保っている可能性が高い貼石を特定し、周溝を掘り上げて、墳丘の全容が把握された（第42図）。

その結果、墳丘の東西南北に残存する貼石の並び、東西に検出された弧状の溝から、長方形プランを基準とする「四隅突出型」の墳形であることが判明した。しかし、墳丘の残存状況は不完全で、特に墳頂部は後世の開墾や植林によって削平及び攪乱された痕跡が顕著に認められた。

墳丘の長軸、短軸はそれぞれ東西、南北にほぼ合致しており、四方各辺の貼石も自ずからそれに平行する。

突出部は、北西・北東・南東・南西の四隅にあたる。突出部については土砂の流出や削平の影響からか残存する貼石がわずかで原形をほとんど留めていなかった。南東・南西隅部は、刃なりに外反する東西周溝の形状と貼石の曲線的な配置から突出部の形状がすこし類推される。一方、北西・北東隅部については、周溝の形状や墳丘の起伏から微かに突出する傾向が看取されたものの、その形態と規模は判然としない。

墳丘の立ち上がり、墳裾は不明瞭であるが、各辺共に貼石の下端面あたりと推察される。ただし、東西辺はそれよりもさらに周溝内へ下がった位置に墳丘斜面の傾斜変換点が存在し、これを裾部と呼称しても差し支えないかもしれない。

なお、墳丘外の北側は谷地形に沿った斜面を形成しているが、南側は極めて緩やかに傾斜し、幅約3~4mにわたって平坦面と呼ぶにふさわしい地形を呈している。

墳丘規模は、現状において、突出部を除いたおよそ墳裾と認識された部位（各辺貼石の下端付近）で、東西長約10.5m前後、南北長約7.7m前後を測る。一部残存する突出部を含めると、東西約12.6m以上、南北約8m以上を測る。また、東西周溝の外間を含めた東西最大長は約16.7mを測る。

墳丘の高さは、削平のため本来の墳頂面は不明である。現状では、墳裾（貼石下端）から表土下盛土及び地山検出面まで、約0.2~1m前後を測る。数値に幅があるのは、各辺ごとに貼石下端のレベル差が生じているためである。周溝最底面からの高さは、墳丘東方の周溝で約0.5m前後、西方の周溝で約1m前後を測る。

土層堆積状況（第40図） 図示したとおり、土砂流出あるいは削平によって、墳頂部は表土（1層）以下約5cm以内というごく浅いレベルで、埋葬主体が検出された地山面もしくは、墳丘盛土層と推定される褐色上（B-B' 3層、C-C' 4層）に到達する。

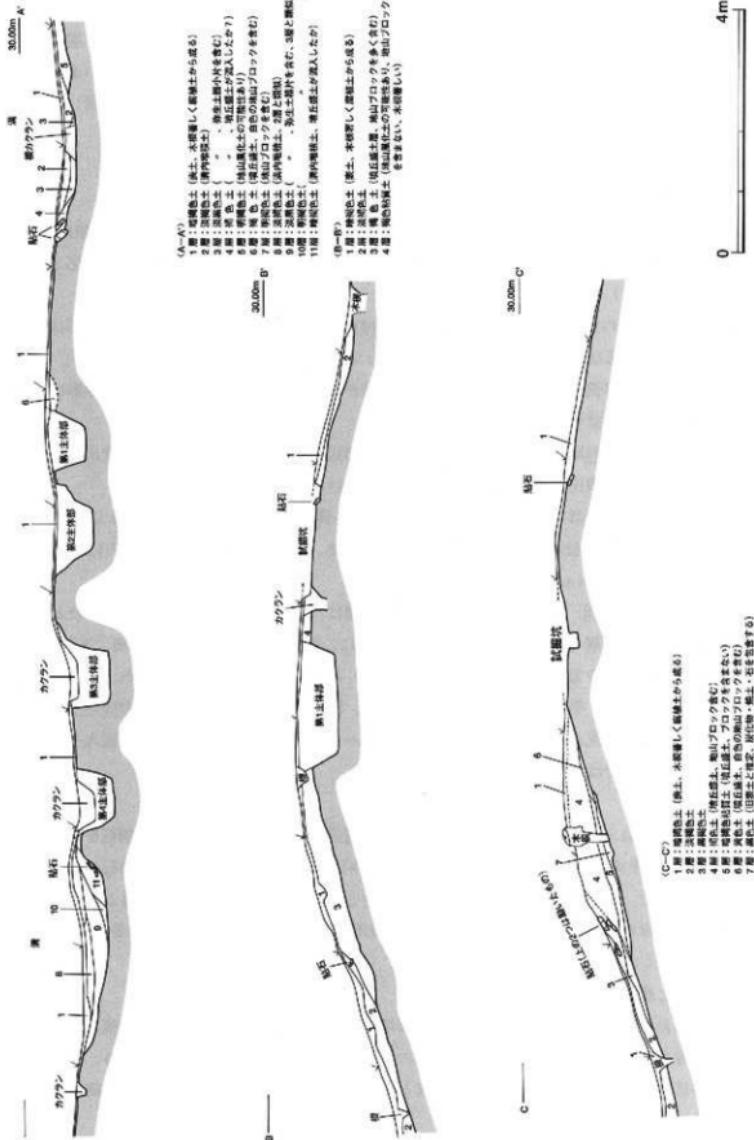
土層断面の観察によるかぎり、墳丘のおよそ南半は地山、北半は墳丘盛土から成っている。ただし、前述してきたように墳頂部は削平等により原形が不明である。埋葬主体の検出面を勘案すると、本来は墳頂部全体にある程度の盛土層が存在したと推定する方が妥当であろう。

北半の墳丘盛土に関する層序関係は比較的単純である。B-B' ラインでは、表土下腐植土層である暗褐色上（1層）の下に、地山ブロックを多く含む墳丘盛土層と推察される褐色上（3層）が堆積し、いわゆる旧表土層と推定される黒色系土層を挟むことなく地山面に達する。

また、C-C' ラインでは、表土下腐植土層である暗褐色上（1層）の下に、地山ブロックを多く



第39図 北I区1号墓調査前地形測量図 ($S = 1 : 100$)
 (赤色---破線は、貼石の形狀を示す)



第40図 北I区 1号墳丘土層断面実測図 ($S=1:80$)

含み埴丘盛土層と推察される褐色土（4層）、暗褐色粘質土（5層）、黄色土（6層）が堆積する。その下層に、いわゆる旧表土層と推定され、炭化物や焼上、礫石を包含する黒色土（7層）が堆積し、地山面に到達する。埴丘盛土層は、厚いところで約0.5m程の堆積が確認されている。埴丘盛土層は、埴頂部南半や1号墓周辺の地山面で認められる黄・白色の地山ブロックを顕著に包含しており、周辺の地山掘削上が盛られたものと推測される。

なお、層序に搅乱が生じているのは、後世の木根や開墾の影響によるものである。

＜周溝＞

形態・規模（第40・42・43図） 墓丘の東西辺に、平面形が弓形を描く浅い周溝2条が検出された。それぞれ埴裾（貼石下端）の平面形と平行する位置関係にある（以下、埴丘の各辺に対応させ、東溝・西溝と称する）。

両溝とも、南方の突出部付近から北方の突出部付近へと緩やかに傾斜している。南端部は溝を開じているが、北端部は外反しつつ北方斜面へ向かって開き、自然地形へとなだらかに移行している。後者は、後世の土砂流出や削平の影響による可能性があり、原形は判然としない。断面形は大部分が上方へ浅く聞く弧状を呈している。

両溝とも突出部を外周することなく、それぞれの辺で完結している。1号墓の突出部は周溝で断絶されることなく埴丘外と結ばれていた蓋然性が高いといえる。

周溝の規模は一定ではない（第40・43図）。いずれも溝上面で、東溝が長さ約7m以上、幅約1.7～2.5m、深さ約0.15m前後（溝上面から底面までの深さ、以下同様）、西溝が長さ約4.5m以上、幅約2.3m以内、深さ約0.4m前後を測る。

土層堆積状況（第40図） 1号墳の周溝に関する土層は、第40図A-A'ラインに図示したとおりである。表土下腐植土層である暗褐色土（1層）の下に、褐色系（2層、4層、7層、8層、10層、11層）や弥生土器片を包含する黒色系（3層、9層）の周溝内堆積土層が認められ、溝底面である地山面に達している。明確な遺構検出面は地山面で、溝内には埴丘盛土や埴丘外の周辺土砂が自然流入し、埋没した状況がうかがえる。ただし、埴丘からの流入土砂と埴丘外からの流入土砂の厳密な分別は肉眼観察では不可能であった。

＜外表施設＞

貼石の検出（第41・42・43図） 表土除去後、埴丘周辺を精査し、大小の扁平な割石を多数検出した（第41図）。平成10年度の試掘調査で検出された南辺の石列との関連性から「貼石」状の外表施設と判断された。その後、東西南北の埴裾付近を中心に原位置を保っている可能性が高い石を、出土状況・土層堆積状況を検討しつつ選択した。原位置を保持した可能性が高い貼石等を現地に留め、現状を記録化した（第42・43図）。

貼石の構造と規模（第42・43・44図）

図示のとおり、貼石は埴丘の東西南北のほぼ埴裾に沿って検出された。すでに崩落、流出、あるいは開墾等により撤去された石も多数あるものと察せられ、残存状況は不完全である。特に四隅周辺の残存状況が悪く、突出部付近の貼石はほとんど遺存していない。突出部の形態・構造を類推する上で大きな支障となった。

埴丘の東西辺には明らかに平面弓形、弧状に外反する配石構造が認められた。一方、南北辺は微かに弧状を呈する可能性もうかがえたが、ほぼ直線的な配石が確認された。以下、各辺ごとに構造

と規模を詳述する。

(東 辺) (第43・44図a～b～c～d)

貼石は、長径約20～45cmの割石からなり約18点を検出した。石は組み合わせたり、重ねたりする事はほとんどなく、埴縫付近の埴丘斜面(地山面)上へ横一列に並置されている。ただし、北端の石から約2.6m付近では埴縫の貼石外面に接してやや大型の石一つが重ね置かれている。これが、原位置を保つか否かは判断がつかない。

貼石の検出範囲は、長さ約5.5mを測り、残存部北端から約4m付近で約30～40°外反し突出部へと移行している。

貼石は、埴縫付近に認められた幅約0.5mほどの緩斜面(地山)上に据え置かれた様な状況で検出された。多くの貼石下端の地山面には、各石の形状に沿って深さ約5cm前後の凹地が検出された。石を安定させるため、わずかに掘り据えた痕跡と推測される。粘質土等を用いての貼石の固定化は認められなかった。

貼石下端のレベルは、標高約29.06～29.36mの間に収まり、北方にむかうに従ってやや低くなっている。

(西 辺) (第43・44図e～f～g～h)

貼石は、長径約10～30cmの割石からなり約30点を検出した。石列は平面図に明らかな様に一部二列に重なる箇所もあるが、多くは埴縫付近の埴丘斜面(地山)上へほぼ横一列に並置されている。

また、立面図にあるように一部で上下二段に積み置かれたような構造も認められる。ただし、西辺付近は本来の埴丘斜面とその流出土砂との差異が不明瞭で、検出された貼石の一部には、原位置から消落、崩落した位置を留めた状態を示すものも存在するかもしれない。したがって、図示した全ての貼石が原位置を保つものとは断定できず注意を要する。

貼石の検出範囲は長さ約5.5mを測り、残存部北端から約3.8m付近で約20～30°外反し突出部へと移行している。

貼石は、埴縫付近の埴丘斜面上に据え置かれた様な状況で検出された。多くの貼石下端の地山面には、各石の形状に沿って深さ約5cm前後の凹地が検出された。石を安定させるため、わずかに掘り据えた痕跡と推測される。粘質土等を用いての貼石の固定化は認められなかった。

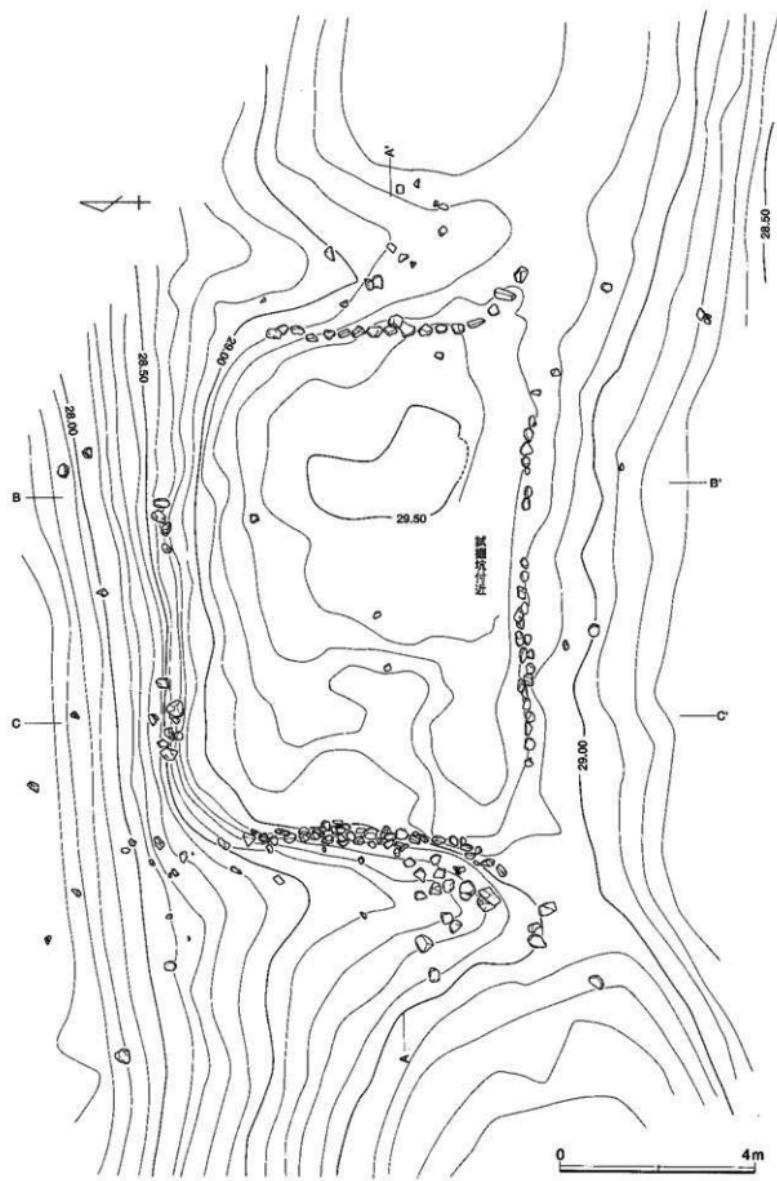
貼石下端のレベルは、標高約28.50～28.98mの間に収まり、北方にむかうに従ってやや低くなっている。

(南 辺) (第43・44図i～j～k～l)

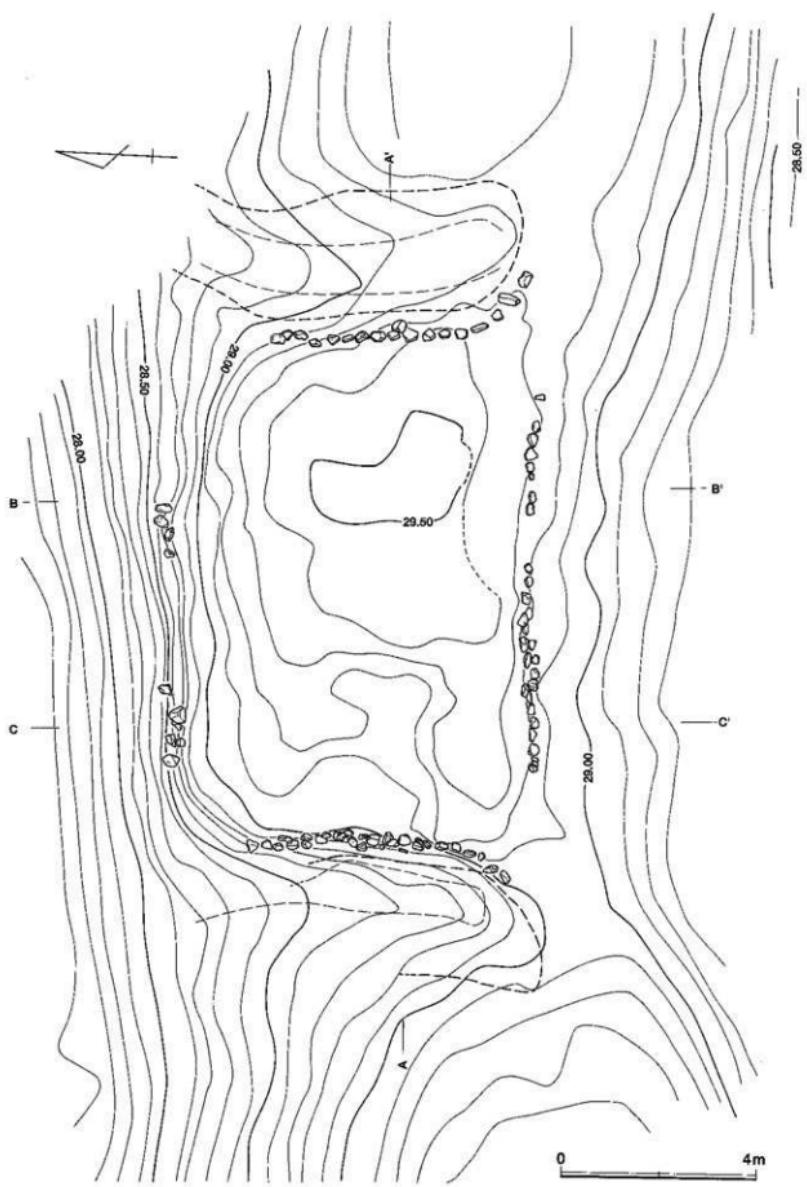
長径約10～35cmの割石からなる貼石もしくは敷石状(以下「敷石」と呼ぶ)の石約39点を検出した。図示したとおり、ほぼ東西方向に伸びる配石構造は、大半が埴縫付近の埴丘斜面(地山)上へ横一列に並置された貼石からなる。また、残存部西端から約1.6～2.8mの付近では、貼石に加え、地面にほぼ水平に置かれた「敷石」も検出されている。

立面図にあるように残存部西端から約3.2mの付近の貼石には、やや大きめの石が上下二段に積み置かれたような状況も認められる。ただし、この上方の石については、埴丘斜面上方から消落、崩落した可能性もあり注意を要する。

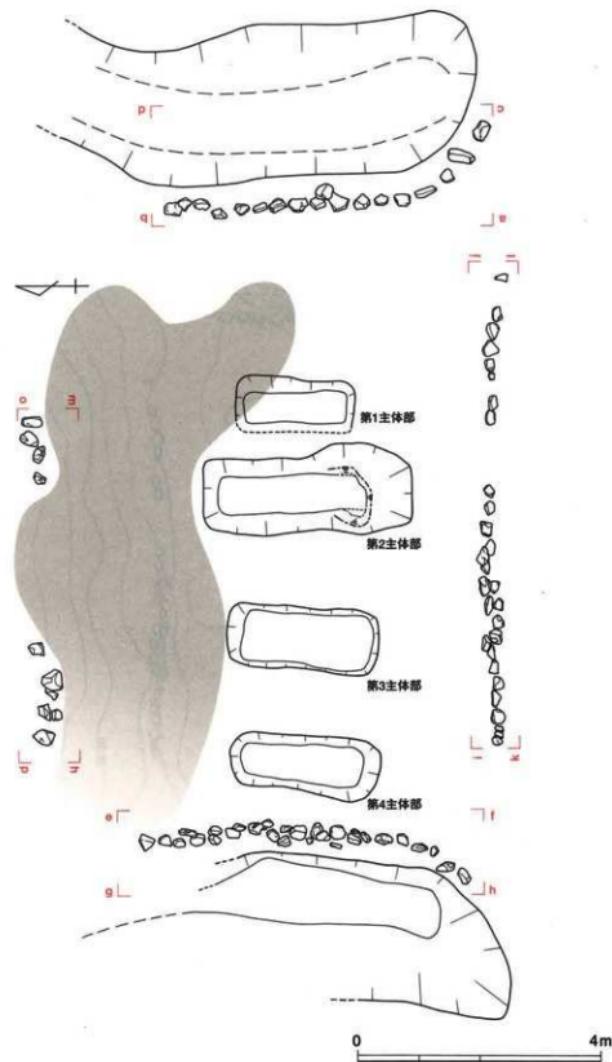
貼石の検出範囲は全長約7.3mを測るが、残存部東端から約1.4m、約2～3mの付近には石が存在しない。おそらく後世の開墾等による削平によって損壊した部分と推測される。



第41図 北I区1号墓貼石検出状況図 (S=1:100)
(原位置を保っていない行を含む状況)

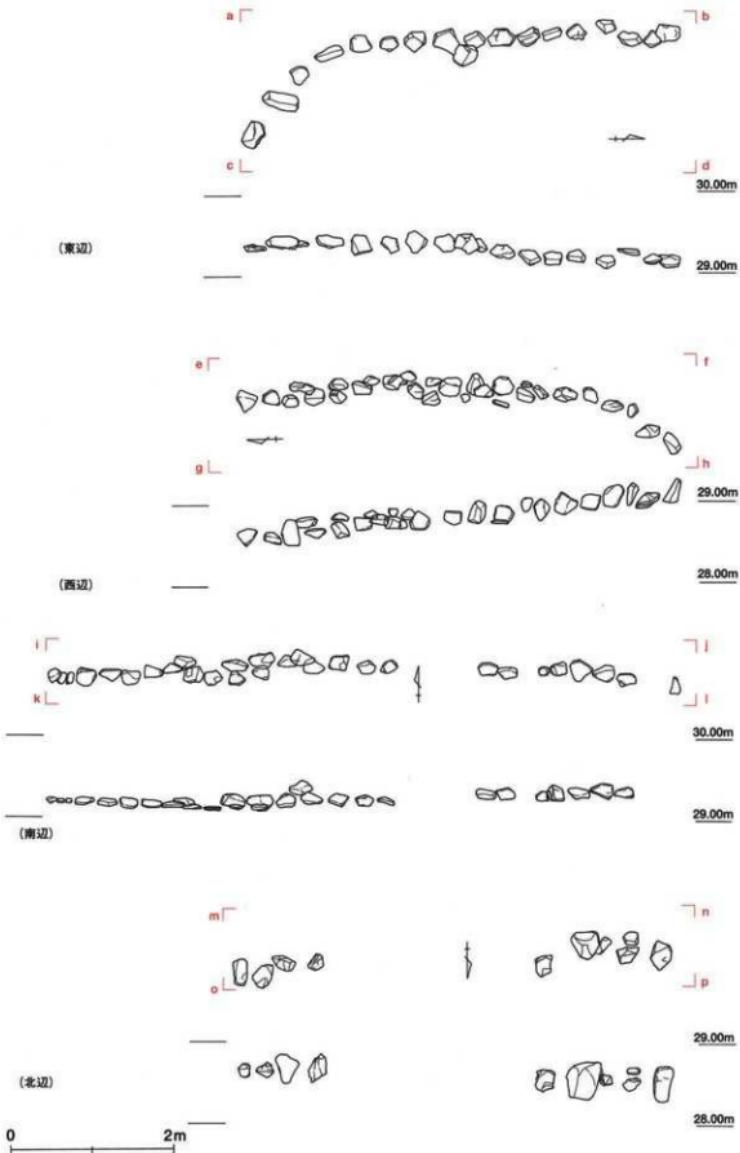


第42図 北I区1号墓墳丘測量図 (S=1:100)
 (表土を除去し、原位置を保つと思われる粘土を検出した状況。周溝は完掘状態である。)



第43図 北I区1号墓造構配置図 ($S=1:80$)
(アミ部は、埴丘盛土層を明確に検出した範囲を示す)

貼石は、埴丘斜面上に据え置かれた様な状況で、「敷石」は埴丘外の平坦な地山上に平置きされたかの状況で検出された。多くの貼石下端には、各石の形状に沿って深さ約5cm前後の凹地が検出された。また、「敷石」下端面にも僅かな凹地が検出されている。石を安定させるため、わずかに



第44図 北I区1号基貼石(平面・立面)実測図(S=1:60)

掘り据えた痕跡と推測される。なお、粘質土等を用いての石の固定化は認められなかった。

貼石下端のレベルは、標高約29.09～29.28mの間に收まり、およそ水平に近いが、西方から東方に向かってやや高くなる傾向を示す。「敷石」下端のレベルは、標高約29.09～29.10mとほぼ水平を保っている。

(北 辺) (第43・44図 m～n～o～p)

貼石は、長径約20～60cmの削石からなり約10点を検出した。他辺の石に比べやや大きいものが含まれている。

図示したとおり、大半が墳裾と推察される墳丘斜面（墳丘盛上層）上にほぼ東西方向、横一列で並置されている。一方、残存部西端から約0.5m付近では、上下二段に積み置かれたような状況も認められる。ただし、この上方の石については、墳丘斜面上方から滑落、崩落した可能性もあり注意を要する。

貼石の検出範囲は全長約5.4mを測るが、残存部東端から約1.1～3.7mの付近には石が検出されなかった。また、一部の石では、第40図B-B'ライン北端付近の土層断面に認められる貼石のように、墳丘外方向へ外傾して検出されたものもあった。これは、墳丘土砂の土圧や流出、削平行行為の影響によるものと判断される。

北辺の貼石は、他三辺と比較すると、貼石間の間隔が広いところで約20cmほど開いており、やや粗い並びとの印象がある。北辺付近は地形的に最も土砂が流出しやすい地点のため、すでに原位置から石が滑落、崩落した結果かもしれない。

このように、北辺については、図示した全ての貼石が原位置を保つものとは断定できず注意を要する。

なお、他辺では貼石下端に、石を安定して置くためと推察される石の形状に沿った深さ約5cm前後の凹地が検出されたが、北辺ではその痕跡を確認することはできなかった。

貼石下端のレベルは、標高約28.28～28.57mの間に收まるが、西方から東方に向かってやや高くなる傾向を示す。

貼石の岩種 貼石及び「敷石」に用いられた石材の大半は、暗灰褐色系を呈する板状節理した安山岩を使用しており、遺跡の近辺（松江市乃白～总部周辺）で容易に採取されるものである。なお、貼石のうち少なくとも2点は、これらと性質の異なる細粒花崗岩と推定される石材が使用されていた。これも比較的遺跡に近い总部川流域の谷沿いで採取されるものである。

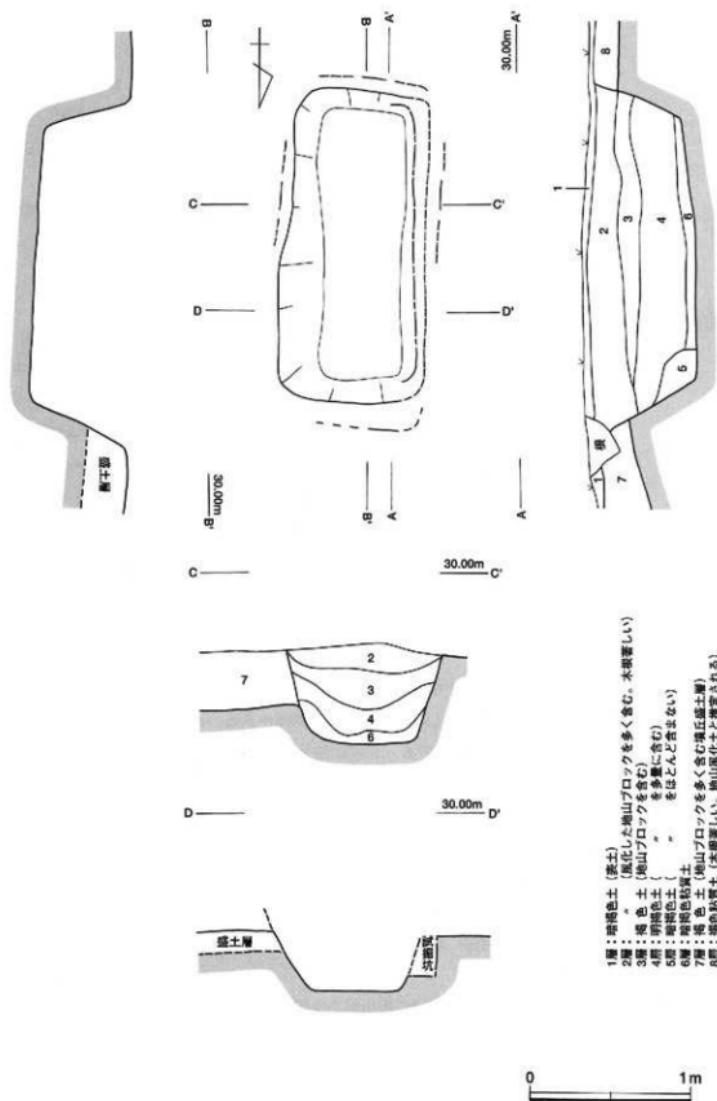
なお、貼石のうちには表面が赤みを帯びている石材が多く認められた。これは、岩石自体の風化によるもので顔料等が塗布されたものではない。ただし、墳丘墓に設置以後変色したものか、産出地における採取の段階から赤く、それらをあえて選択したものは判断しかねる。

<埋葬施設>

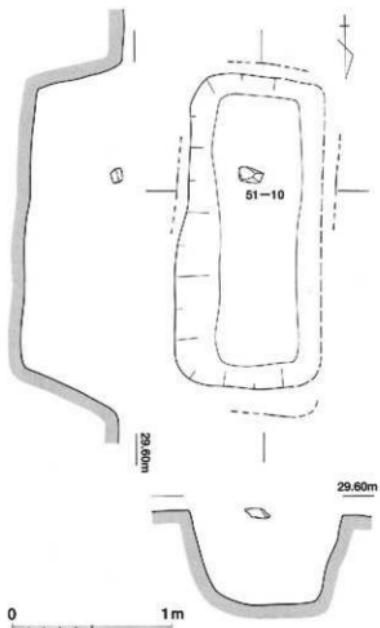
埋葬施設としては、墳頂部において表土以下約5cm前後を掘削、地山面及び墳丘盛土面を精査した段階で、平行して並ぶ土壙4基（第43図）を検出した。以下、埋葬施設については、検出順にしたがって、第1～4主体部と呼称し詳述する。

[第1主体部]

検出面と位置 (第40・43・45図) 主体部4基のうち最も東方に位置する上壙である。東辺の貼石から約3mの地点であり、これより東側の墳頂部に埋葬施設等は存在しない。明確な遺構検出面上



第45図 北I区1号墓第1主体部実測図 (S=1:30)



第46図 北I区1号墓第1主体部標石出土状況
実測図 (S=1:30)

単純な堆積状況が認められた。このうち2・3・4層には、墳丘周辺で認められる地山ブロックを包含しており、墓壇の掘削土によって埋め戻された可能性がある。なお、土壤本来の掘り込み面（掘り方）は、検出面よりもさらに上層であった可能性もあるが、すでに削平されており詳細不明である。

土層観察の結果によるかぎり、木棺の埋設は想定できず、素掘りの土壤であったと推測される。
遺物出土状況（第46図） 表土下約10cm以内で、土壤の南壁上面から約60cmの地点より角礫1点（51-10）が出土している。土壤直上では主軸（長軸）上にあたる暗褐色土層（1・2層）中に包含されていた。角礫1点が単独で主体部直上から出土する状況は偶然の混入とは思えず、土壤直上の盛土層あるいは覆土中に意図的に置かれたものと推定される。遺物の詳細については、「出土遺物」の項で述べる。

被葬者の頭位 土壤底面幅の大小及び角礫の出土地点を勘案すれば南方に頭位があった可能性が推測されるが定かではない。

第2主体部

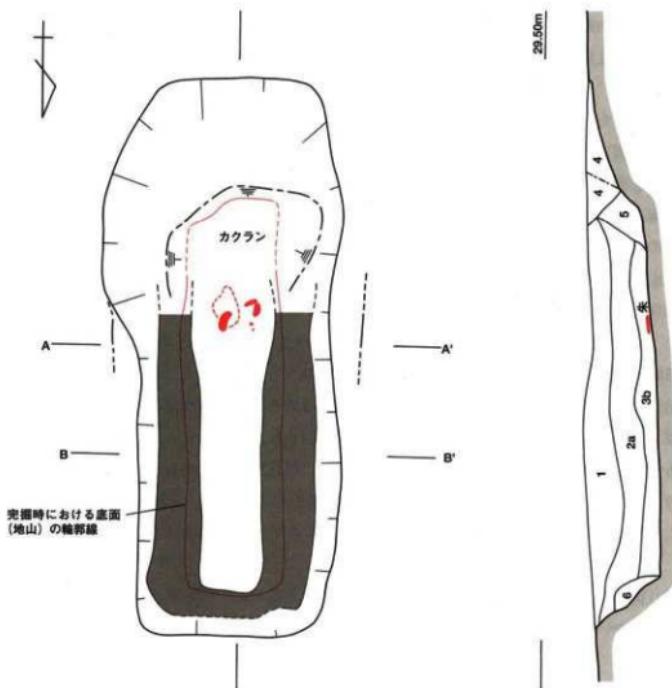
検出面と位置（第40・43・47図） 墳丘のおよそ中央部に位置する土壤である。東方約0.5mには第1主体部が、西方約1.2mには第3主体部が近在する。明確な遺構検出面上面は現地表下約5cm

面は、現地表下約5cm前後で、大半は地山面であったが、北側小口付近約3分の1は墳丘盛土層中である。墳丘の土層断面を観察した結果、土壤の壁面約3分の1強は墳丘盛土層から地山面かけて掘り込まれている。底面は全て地山面で確認されている。土層に木根による搅乱以外の乱れは認められず、未盗掘と判断された。

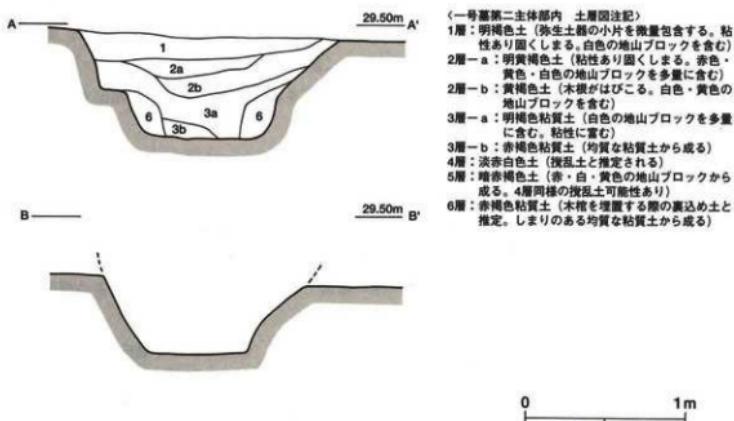
土壤の主軸（長軸）は、ほぼ南北方向をとる。当然のごとく墳丘の東西辺と平行し、南北辺と直交する位置関係にある。

形状・規模（第45図） 平面形は上面、底面ともに隅丸の長方形を呈しており、長軸・短軸方向の断面形はいずれも逆台形状である。底面はほぼ平坦で水平に近い。規模は、遺構検出面上面で長軸径約2.2m、最大幅約1m、底面で長軸径約1.67m、幅約0.48~0.55mを測り、深さは最大で約0.65m程度である。4基の主体部の中では最も小さな規模である。

覆土・構造（第45図） 土坑内覆土には表土層とその下層である暗褐色土（1・2層）以下、褐色土（3層）、明褐色土（4層）、暗褐色土（5層）、暗褐色粘質土（6層）の比較的



実掘時における底面
(地山) の輪郭線



第47図 北I区1号墓第2主体部実測図・同水銀朱出土状況実測図 (S=1:30)
(黒色アミ部は、木棺裏込め土(6層)の検出範囲、赤色アミ部は、水銀朱検出範囲を示す)

前後で、ほとんど地山面であった。壁面、底面ともに全て地山面で検出されたことになる。層序関係には木根による擾乱以外の亂れは認められず、木盜掘と判断された。

土壇の主軸（長軸）は、ほぼ南北方向をとる。当然のごとく墳丘の東西辺と平行し、南北辺と直交する位置関係にある。

形状・規模（第47図） 平面形は上面、底面ともに隅丸の長方形を呈しており、長軸・短軸方向の断面形はいずれも逆台形状である。ただし、南壁小口側は木根による擾乱によって、原形をとどめていない。底面はほぼ平坦で水平に近い。東側壁面など一部にいわゆる段掘りが認められる。

土壤完掘時の規模は、検出面上面で長軸約2.85m以上、最大幅約1.5m、底面で長軸約2.5m、幅約0.5~0.65mを測り、深さは最大で約0.65m程度である。主体部4基の中では最も大きなものである。

覆土・構造（第47図） 土壇内覆土は、表土層とその下層である明褐色土（1層）以下、明黄褐色・黄褐色土（2層）、明褐色・赤褐色粘質土（3層）、赤褐色粘質土（6層）の4層に大別される。他に擾乱の可能性がある土層（4・5層）も存在する。このうち赤色粘質土（6層）は、しまりのある均質な粘質土からなり両側壁、両小口付近に人為的に埋められた可能性が看取された。この土層は平面観察でも顯著に認められ、この上層には木棺が埋設され、6層はそれを安定させるための裏込め上であったと推定される。この他、1・2・3層は、墳丘周辺で認められる地山ブロックを包含しており、墓壇の掘削土によって埋め戻されたと推察される。なお、土壤本來の掘り込み面（掘り方）は、検出面よりもさらに上層であった可能性もあるが、すでに削平されており詳細不明である。

遺物出土状況（第47図） 土壇直上の表土直下からは、弥生土器の細小片が数点出土している。いずれも実測に耐えない細片であるが、その出土地点からこの土壇上に置かれた土器片であった可能性もある。

図示したとおり、土壇北半の底面付近からは、およそ30×30cmの範囲で赤色顔料少量を検出している。想定される木棺及び土壇の主軸（長軸）上にあたり、南壁側小口に近い地点に位置づけられる。ほぼ地山直上面にあたり、肉眼で明瞭に確認された箇所で厚さ1.5~2.5cmを測る。顔料は分析の結果、水銀朱であることが判明している。木棺内に被葬者とともに埋納されたものと推定される。

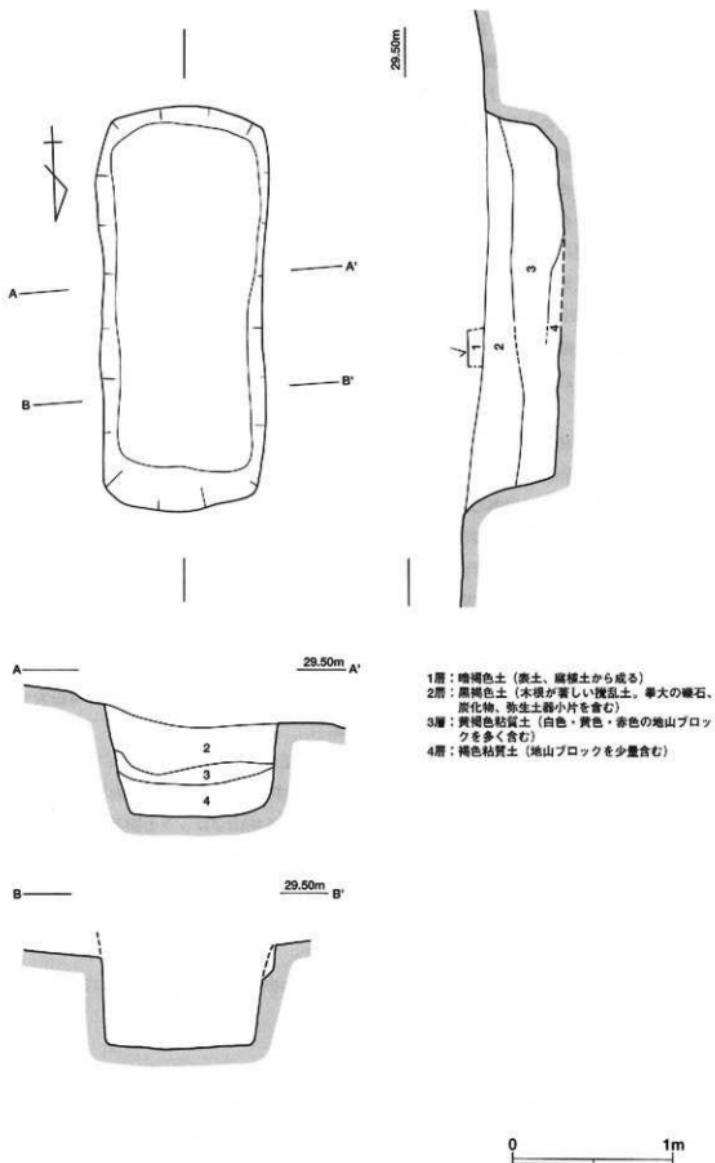
被葬者の頭位 土壇底面幅の大小及び水銀朱の出土地点を勘案すれば南方向に頭位があったと推測される。

〔第3主体部〕

検出面と位置（第40・43・48図） 墳丘の中央からやや西よりに位置する土壇である。東方約1.2mには第2主体部が、西方約1mには第4主体部が近在する。明確な遺構検出面上面は、現地表下約5cm前後の地山面で、壁面及び底面は、地山面に掘り込まれている。ただし、北壁小口上面の外周付近には墳丘盛土の堆積が平断面において明瞭に確認された。土層には、木根による擾乱以外の乱れは認められず木盜掘と判断された。

土壇の主軸（長軸）は、ほぼ南北方向のN-2°-Eをとる。当然のごとく墳丘の東西辺と平行し、南北辺と直交する位置関係にある。

形状・規模（第48図） 平面形は上面、底面ともに隅丸の長方形を呈しており、長軸・短軸方向の断面形はいずれも逆台形状である。底面はほぼ平坦で水平に近い。規模は、遺構検出面上面で長軸約2.53m、幅約1~1.10m、底面で長軸約2.13m、幅約0.8~0.9mを測り、深さは最大で約0.7m程度である。



第48図 北I区1号墓第3主体部実測図 ($S = 1 : 30$)

ある。後述する第4主体部と近似する値を示している。

覆土・構造（第48図） 土壇内覆土には木根による搅乱が著しい暗褐色土（表土）（1層）とその下層の黒褐色土（2層）以下、黄褐色粘質土（3層）、褐色粘質土（4層）の比較的単純な層序関係が認められた。このうち2層の搅乱上中からは、拳大の礫石、炭化物、土器小片が少量検出された。3層、4層は埴丘周辺で認められる地山ブロックを顯著に包含し、墓壇の掘削土によって埋め戻された可能性を示唆する。なお、土壤本来の掘り込み面（掘り方）は、検出面よりもさらに上層であった可能性もあるが、すでに削平されており詳細不明である。

土層観察の結果によるかぎり、木棺の埋設は想定できず、素掘りの土壤であったと推測される。

遺物出土状況 土壇に直接伴う遺物は出土しなかった。表土下約10cm以内の搅乱土中から出土した礫石数点、土器細小片2点は、いずれも搅乱に伴い墳頂部付近から偶然流入したものであろう。

被葬者の頭位 土壇の底面幅及び両小口側壁面の幅の大小を勘案すれば南方向に頭位があった可能性が指摘しうるが定かではない。

〔第4主体部〕

検出面と位置（第40・43・49図） 主体部4基のうち最も西方に位置する上塙である。西辺の貼石から約0.5~0.7m程しか離れておらず、東方約1mには第3主体部が近在する。明確な遺構検出面上面は、現地表下約5cm以内の地山面で、壁面及び底面は、全て地山面に掘り込まれている。墓壇上面付近は木根による搅乱が顯著であったが、それ以外の乱れは認められず未盗掘と判断された。

土壤の主軸（長軸）は、ほぼ南北方向のN-6°-Eをとる。当然のごとくおよそ墳丘の東西辺と平行し、南北辺と直交する位置関係にある。

形状・規模（第49図） 平面形は上面、底面ともに隅丸の長方形形状を呈しており、長軸・短軸方向の断面形はいずれも逆台形状である。底面はほぼ平坦で水平に近い。規模は、遺構検出面上面で長軸約2.48m、幅約0.85~1.05m、底面で長軸約2m、幅約0.5~0.65mを測り、深さは最大で約0.65m程である。第3主体部と近似する値を示している。

覆土・構造（第49図） 土壇内覆土には木根による搅乱が著しい黑色炭化土（1層）とその下層の黒褐色土（2層）以下、褐色粘質土（3層）、暗褐色粘質土（4層）の比較的単純な層序関係が認められた。このうち3層、4層には埴丘周辺で認められる地山ブロックを顯著に包含し、墓壇の掘削土によって埋め戻された可能性を示唆する。なお、土壤本来の掘り込み面（掘り方）は、検出面よりもさらに上層であった可能性もあるが、すでに削平されており詳細不明である。

土層観察の結果によるかぎり、木棺の埋設は想定できず、素掘りの土壤であったと推測される。

遺物出土状況 土壇に直接伴う遺物は出土しなかった。

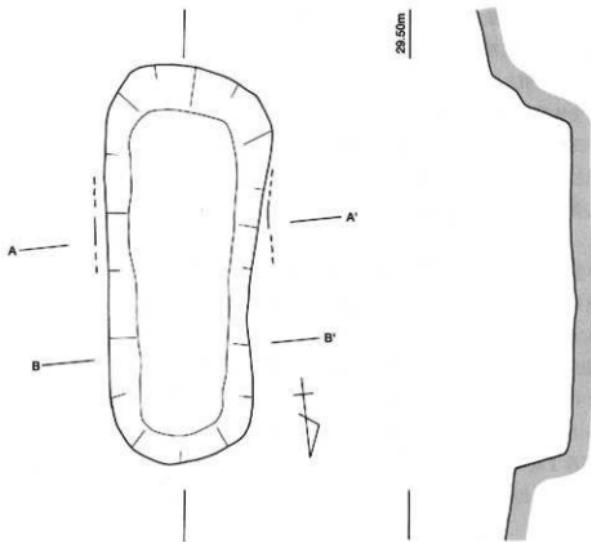
被葬者の頭位 土壇の底面幅及び両小口側壁面の幅の大小を勘案すれば南方向に頭位があったと推測される。

〔主体部間の関係〕（第40・43図）

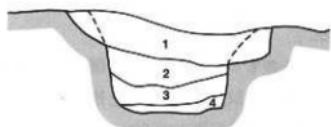
土層観察によるかぎり、検出された4基の土壤については、いわゆる切り合い関係は認められず構築の新旧、順序は不明である。被葬者の頭位はいずれも南方向と推定できよう。

これらのうち、いわゆる中心主体に位置づけられるのは、その墳丘中央にほど近い構築位置、規模の大きさ、木棺埋設の可能性、水銀朱の検出などの点から第2主体部と推察される。

また、主体部の主軸（長軸）方向はいずれもほぼ南北方向を示したが、第3主体と第4主体は



A ————— 29.50m ————— A'



- 1層：黒色炭化土（木炭が著しい搅乱土）
- 2層：黒褐色土（1層よりも色調明るい。木根多く、擾乱の影響を受けている）
- 3層：褐色粘質土（地山ブロックを多量に含む）
- 4層：暗褐色粘質土（白色の地山ブロックを含む。3層より色調明るい）

B ————— 29.50m ————— B'



0 1m

第49図 北I区1号墓第4主体部実測図 (S=1:30)

2～6度程東方に振れている。厳密にいえば、埴丘の中心を境に、西方の第1主体部と第2主体部が平行し、東方の第3主体部と第4主体部が平行する位置関係にある。

さらに、第40図A-A'に明らかなように、墓壇の掘り込みの深さすなわち底面レベルも、前者は前者、後者は後者で近似している。

このように、主体部4基は、東西二組に大別できる可能性がある。これは、被葬者間の出自や系譜等の関係性を反映した、人為的な墓壇配置の結果と考えて大過なからう。

<遺物出土状況と遺物>（第50・51図）

ここでは、主要な遺物とその出土状況について述べる。主な遺物の出土状況は、第50図のとおりである。

墳頂部周辺 弥生土器と推定される上器の細小片約10点が出土している。全て開墾もしくは植林等によって既に削平され、木根による攪乱が顯著な表土層からの出土である。出土状況から原位置を留めているものは無いと判断された。いずれも風化が著しく細小片であったため図化は省略した。

周溝内 東西南溝内の最下層からは、弥生土器細小片約40点が出土している。ほとんどが、図化に耐えない細小片であった。出土状況から原位置を保持した遺物は無いものと思われ、いずれも埴丘上や埴丘外から土砂とともに自然に転落、流入した可能性が高い。また、弥生土器の他、直徑約2.7cmを測る碧玉片1点が西溝の貼石中央部付近の地山直上から、直徑約3cmを測る瑪瑙刺片1点が同じく西溝の暗褐色土層からそれぞれ出土している。いずれも人為による刺片か否かは判然としない。

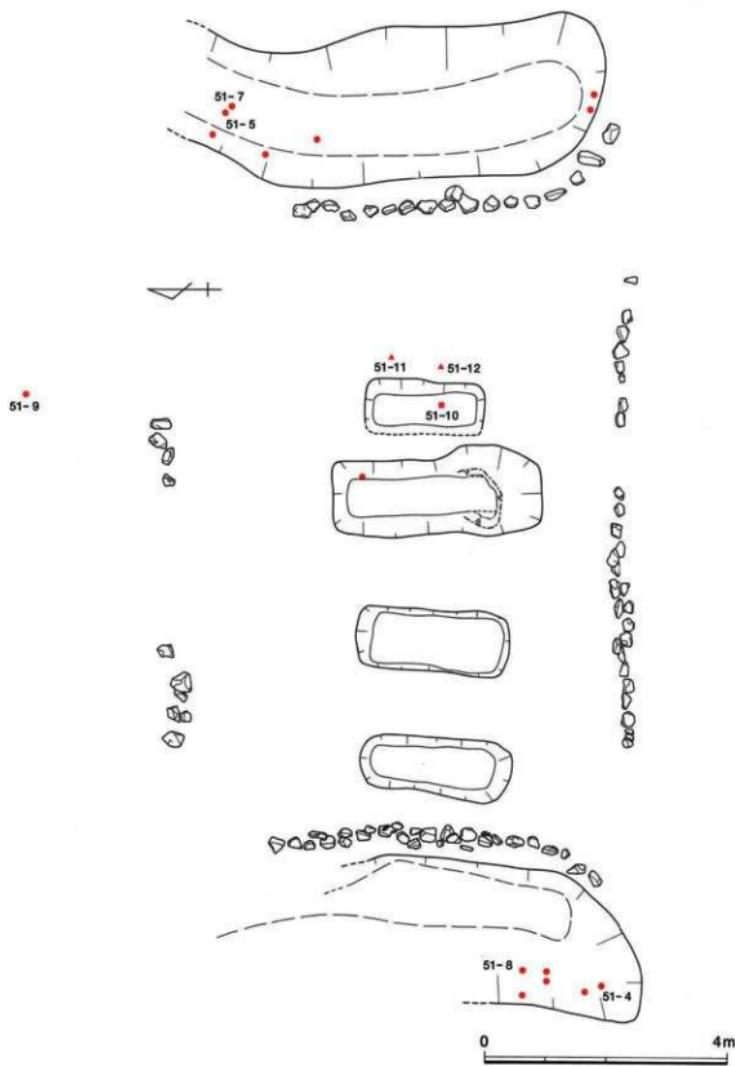
ここでは、形状がある程度推定復元される弥生土器7点について詳述する。

51-1は、東溝の地山直上から出土した壺もしくは甕の口縁～頸部片である。口縁端部を欠損するが、複合口縁を呈するもので、復元口径12cm以上を測るものと推定される。調整は、風化のため判然としないが、内外面にナデが、内面頸部以下にヘラケズリの痕跡が認められる。焼成は良好で淡褐色を呈し、胎土には径1～3mmの砂粒を含む。

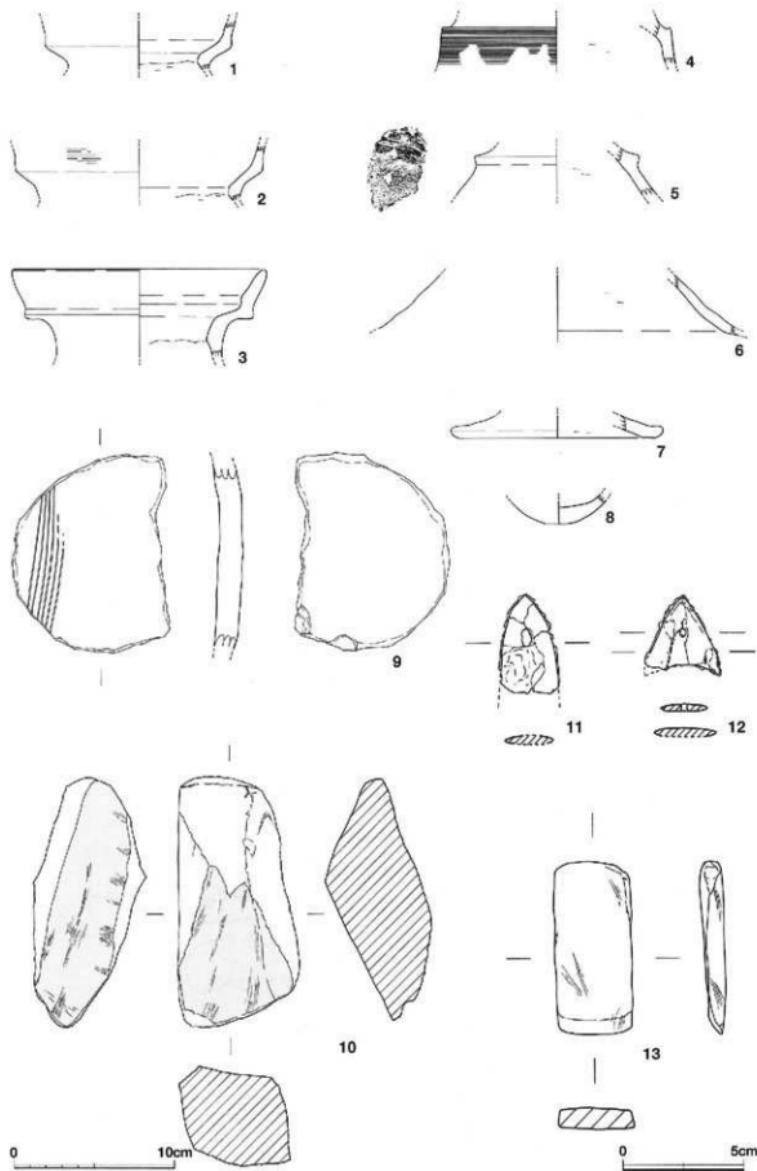
51-2は、東溝最下層である淡黒色土から出土した壺もしくは甕の口縁～頸部片である。口縁端部を欠損するが、複合口縁を呈するもので、復元口径15cm以上を測るものと推定される。器表風化のため判然としないが口縁部外面に擬凹線状の平行沈線の痕が微かに認められる。調整も不明瞭であるが、内外面にナデが、内面頸部以下にヘラケズリの痕跡が認められる。焼成は良好で黄褐色を呈し、胎土には径1～3mmの砂粒を含む。

51-4は、西溝の地山面に近い淡黒色土から出土した鼓形器台の脚台部片である。端部を欠損するが、復元底径約15cm以上を測るものと推定される。外面には擬凹線状の平行沈線がめぐっている。調整は、外面にヨコナデ、内面にヘラケズリの痕跡が観察される。焼成はおそらく不良で黄褐色を呈し、胎土には径1～3mmの砂粒を含む。細片のため判然としないが、弥生時代後期後半（松本編年出雲・隱岐第V-3様式）頃の特徴が伺える。

51-5は、東溝最下層である淡黒色土から出土した器台の脚台部片である。脚台部と筒部の境に突出する稜をもっている。端部を欠損するが復元底径約13cm以上を測るものと推定される。外面の稜より上方には一部が重なる弧状の沈線紋様が認められる。調整は風化のため不明瞭であるが、外面にヨコナデ、内面にヘラケズリの痕跡が認められる。焼成は良好と推測され、内外面明褐色を呈し、胎土には径1～3mmの砂粒を含む。



第50図 北I区1号墓主要遺物出土状況図 (S=1:80)
 (●弥生土器 ▲鉄器(盛土下地山面) ■角錐 遺物番号は遺物実測図と対応する)



第51図 北I区1号墓出土遺物実測図（1～10はS=1:3、11～13はS=1:2）
(アミ部分は使用痕が認められる箇所を示す)

51-6は、東溝最下層である淡黒色土から出土した器台の脚台部片と推察される。端部を欠損するが復元底径約23cm以上を測るものと推定される。調整は風化のため不明瞭であるが、外面にヨコナデ、内面にヘラケズリの痕跡がかすかに認められる。焼成は良好と推測され、内外面暗褐色を呈し、胎土には径1mm以下の微細砂粒を含むが緻密である。

51-7は、東溝最下層である淡黒色土から出土した器台の脚台部片と推察される。細小片であるが、復元底径約12cmを測るものと推定される。端部を僅かに肥厚させている。調整は外面から内面下端部（接地面）にかけてヨコナデ、内面の非接地面にヘラケズリの痕跡をかすかに認めることが可能。焼成は不良と推測され、内外面暗褐色を呈し、胎土には径1mm以下の微細砂粒を含むが緻密である。

51-8は、西溝の地山面に近い淡黒色土から出土した壺もしくは甕の底部片である。ほとんど丸底に近いが、微かに平底の接地面（底径1.4cm以下）を認めることができる。風化のため調整、焼成とともに不明である。胎土は褐色を呈している。

主体部内 第1主体部の墓壙最上層から標石らしき砾石1点、第2主体部の土壤底面から水銀朱が少量出土している。出土状況の詳細は、〈埋葬施設〉の項で述べたので省略し、前者について詳述しておく。

51-10が、第1主体部の土壤直上から出土した角礫である。図示した2面に明らかに人為的な擦痕が認められるほかは、顯著な加工痕、使用痕は見られない。いわゆる磨石としての機能が推察されるが詳細は不明である。出土地点から、いわゆる標石として墓壙上に置かれたものであろう。赤黄褐色を呈し、全長15.6cm、最大幅7.6cm、重量785.26gを測る。岩種は、花崗岩で、産地は不明である。

墳丘盛土下～地山直上 墳丘のおよそ北半部に認められた盛土を除去した際、地山直上面から鉄鎌2点、扁平片刃石斧1点が出土している。

前二者は、第1主体部の東方約0.2～0.3mの地点で地山面からほぼ水平な状態で出土した。2点間の距離は、約0.8mであった。鉄鎌が、墳丘墓の盛土下地山上から出土した事例は管見でほとんど例を見ない。墳丘盛土直下に集落跡や前代の墳墓等の遺構は全く検出されておらず、偶然の混入とは言い難い。墳丘墓の築造に伴う何らかの儀礼的行為において使用され、埋納された可能性もあるのではないだろうか。

51-11は、無茎三角形式と推定される鉄鎌⁽²⁾であるが、鎌身部の下端を欠損しており詳細は不明である。残存長約4.1cm、残部最大幅約2.4cm、残存部最大厚約0.3cm、重量6.38gを測る。全体に鋸化が著しく、断面形は判然としないが、両丸造りと推定される。鎌身中央部に長径約0.7cm程の孔が認められるが、破面は全て新しく、器物本来の有した孔か否かは判断がつかない。形態的な諸特徴から出雲地方における弥生時代後期後半頃の所産と考えられる。また、出土層位から、少なくとも1号墓の盛土による墳丘築成以前のものに位置づけられる。

51-12は、無茎三角形式の鉄鎌で、片側の逆刺を欠損している。全長3.0～3.3cm、残存部最大幅約3.0cm、残存部最大厚0.25cm、重量3.89gを測る。全体に鎌が付着しているが、両丸造りで、扶持部は浅い円弧状を呈し、鎌身中央部や上方に径2～3mmの孔を有していることがわかる。時期は、類例が少なく判然としないが、共伴関係から51-11とはほぼ同時期の所産と考えておく。

石斧は、墳丘北辺の西端付近にあたる地山面から出土したが、位置は特定できなかった。石斧等

が、周辺の遺構とは全く無縁な状態で山中の遺跡から出土する事例は偶々存在する。したがって、先の鉄鎌と同様の推測はしかねるが注目すべき資料といえよう。

51-13は、磨製扁平片刃石斧である。器表の風化が著しく、加工痕、使用痕は判然としないが、擦痕が微かに認められる。黄灰色を呈し、全長7.1cm、最大幅3.2cm、重量42.63gを測る。岩種は、流紋岩の可能性が高く、産地は不明である。形態から、弥生時代前期末から中期前半頃の所産と推察されるが詳細は不明である。

その他 この他、1号墓墳丘外の周辺からは、多数の弥生土器をはじめ、僅かな上師器、須恵器を含む土器類の細小片約100点（コンテナ約1/10箱分）が表土あるいは表土直下を中心に採取されている。1号墓と明確に伴う遺物は確認できず、また、次の2点を除きほとんどが図化に耐えない細小片であった。

51-9は、断面が緩やかな弧状を呈する上器片である。土製品の破片の可能性もあるが判然としない。1号墓墳丘外の北方斜面において地山（風化土）直上から出土している。全体に器表の剥離・風化が著しく、縁辺部は意図的に欠いたものか否か判然としない。調整も不明であるが、一部に単位の粗いハケメ調整らしき痕跡が認められる。明黄褐色を呈し、残存部最大径12.2cm、最大厚1.5cmを測る。

51-3は、1号墓東方約20mの北1区調査区西端付近の掘削上中から出土した壺もしくは甕の口縁～頸部片である。器壁のやや厚い細頸の複合口縁を呈するもので、復元口径15.6cmを測る。口縁全周の約8分の1が残存し、内外面にヨコナデ、内面頸部以下にヘラケズリによる調整が認められる。焼成は良好で淡黄褐色を呈し、胎土には径1～2mmの微細砂粒を含む。古墳時代中期に下るもので、1号墓との直接的な関係は無いものと推定される。

＜墳丘の築成過程の想定＞（第39-43回参考照）

上記の諸状況と上層観察結果から、次の過程が想定される。なお、すでに墳頂部を中心に削平や土砂の流出が顕著に認められ、類推の域を出ないことに留意されたい。

- I：築造場所を定め、地山及び地山上の旧表土を削平、整地する。
- II：墳丘設計に応じて周溝を掘削し、墳頂部の北半に盛上しておよそ整形する。
- III：墳裾を整形後、貼石を並べ墳丘全体の平面形、立面形を整える。
- IV：墳頂部である地山もしくは盛上層から埋葬施設である土壙を掘り込む。
- V：土壙内に被葬者を安置し、掘りあげた土砂を用いて埋葬する。
- VI：この際、土壙を埋めたある段階に土壙直上付近に標石や弥生土器を置く。墳丘表面へさらに盛土し、最終的な整形を施す。

＜時期と性格＞

弓形に外反する東西溝の形状と貼石の状況、埋葬施設の諸相から四隅突出型墳丘墓と判断される。主に墳頂部の表土付近、周溝内堆積土の最下層から出土した弥生土器片はほとんどが細小片でその詳細は不明である。しかし、他に共伴する遺物がないことから、これらは1号墓の墳丘付近へ掘え置かれたいわゆる「供獻土器」の一部であった可能性が高いと言えよう。このうち時期が推定できる上器片はいずれも弥生時代後期後半頃の様相を呈している。

したがって、北1区1号墓は、遺構・遺物の諸要素から弥生時代後期後半（松本編年出雲・隠岐第V-3様式）頃の所産である可能性が高いと思われる。

【北 I 区 2 号墓】

<調査方法>

トレンチ調査で検出された貼石の一部から墳丘規模と形状を推定し、立木伐採後に詳細な地形測量を実施した（第52図）。これを受け、墳丘の立地、墳形、規模、残存状況をさらに検討し、土層観察用の畦（ベルト）2本の設定（第52図A-A'・B-B'）を行なった（第53図）。

この土層観察用の畦を残し、表土以下の堆積土を墳頂部から慎重に掘り下げた。墳形、規模、構築方法、築造時期の確定を念頭に置き、墳丘盛上、埋葬施設、旧表土層、地山面、貼石、周溝、伴出遺物の検出に努め、随時写真と実測による記録化を実施した。記録保存決定後は、追加調査として、貼石の除去を伴う配石構造の調査、墳丘の断ち割り調査、墳丘盛上下層の地山面精査を実施した。

<位置>（第36・38・52図）

北 I 区のほぼ西端に位置する。およそ東西方向に伸びる尾根筋の緩斜面上にあたり、標高26~27.25mを測る地点である。2号墓の南・北・西下方斜面は、いずれも緩斜面となっている。東方の斜面上方約8~9mにはSK09や4号墓の一部が検出されているが、この間に他の遺構、遺物は検出されていない。

<墳丘>

形態・規模（第52・53・54図） 調査前の地形観察・測量（第52図）において、低墳丘状の高まりを微かに認めることができたものの、墳丘及び周溝の形態・規模・位置関係を類推するには至らなかった。およその形態や規模が確定されたのは、発掘調査が進み、表土を除去し、外表施設としての貼石が明確に確認された段階である。

その結果、およそ墳丘の東辺に残存する貼石の並び、東西に検出された溝から、長方形プランを基調とする「四隅突出型」の墳形であることが推察された。しかし、墳丘の残存状況は不完全で、特に墳頂部や墳丘の南北辺は後世の開墾や植林によって削平及び攪乱された痕跡が顕著であった。また、突出部については土砂の流失や削平の影響からか、ほとんど原形をとどめていなかった。唯一北東隅部に遺存した一部の貼石の形状からその規模と形態をわざわざに察することができた。

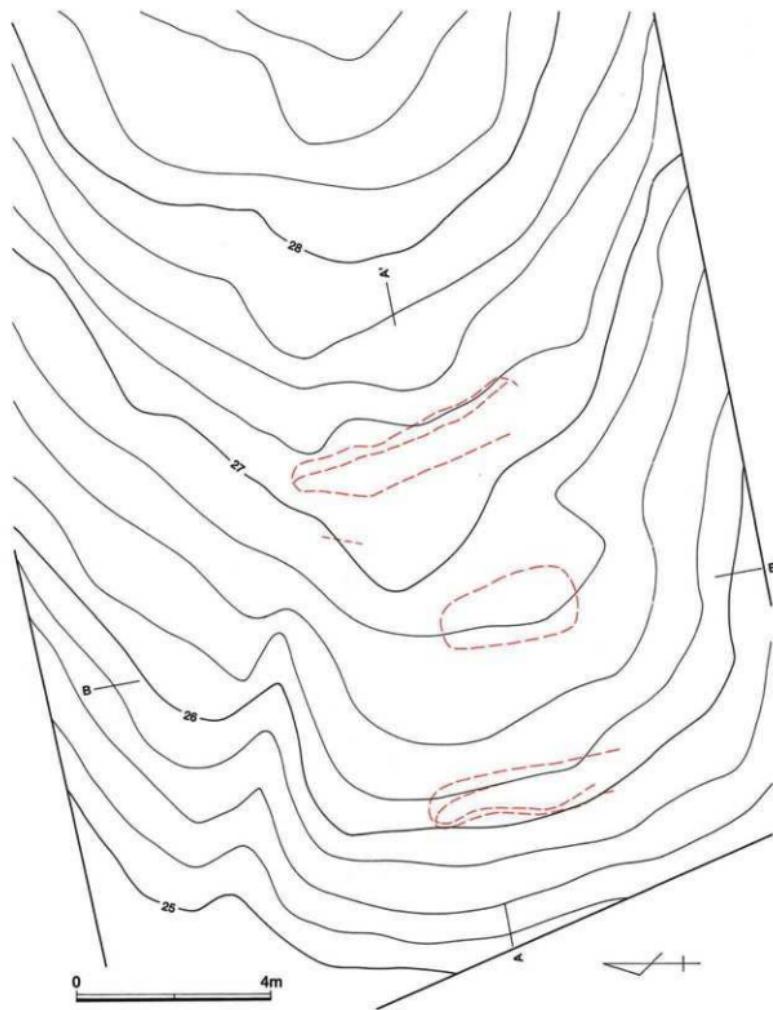
墳丘の長軸、短軸は緩斜面の等高線にそれぞれ直交、平行するような状況で検出されている。

墳裾は、東辺側は貼石の下端付近、西辺側は溝の上面付近と推察される。南北辺は周溝が検出されず、墳丘の立ち上がりも明確に認識されなかつたので不明である。

墳丘規模は、一部残存する突出部を含め、およそ墳裾と認識された部位で、東西長約6.5m前後、南北長約5m以上を測る。

墳丘の高さは、墳頂部が削平されており不明である。現状では、墳裾（貼石下端）から表上面まで約0.3m以内である。

土層堆積状況（第53図） 図示したとおり、上砂流出あるいは削平によって、墳頂部は表土（1層）以下約10~30cm以内というごく浅いレベルで、地山面もしくは地山風化土の可能性がある土層（2・6・7・8層）に到達する。木痕による攪乱も著しく、明確な墳丘盛土層は全く確認されていない。土層の断面観察によるかぎり、墳丘が地山削り出しによってのみ築成されたのか、ある程度の盛土によって築成されたのか、現状では不明と言わざるを得ない。ただし、緩斜面をなす周辺の地山地形から察するに、墳丘西半部を中心としてある程度の盛土によって整形されていたと考え



第52図 北I区2号墓調査前地形測量図 (S=1:100)

るのが妥当であろう。

<周溝>

形態・規模 (第53・54図) 墳丘のおよそ東西辺に推定される位置に、平面形がわずかに弓なりを呈する浅い周溝2条が検出されている。(以下、墳丘各辺に対応させ、東溝・西溝と称する)。

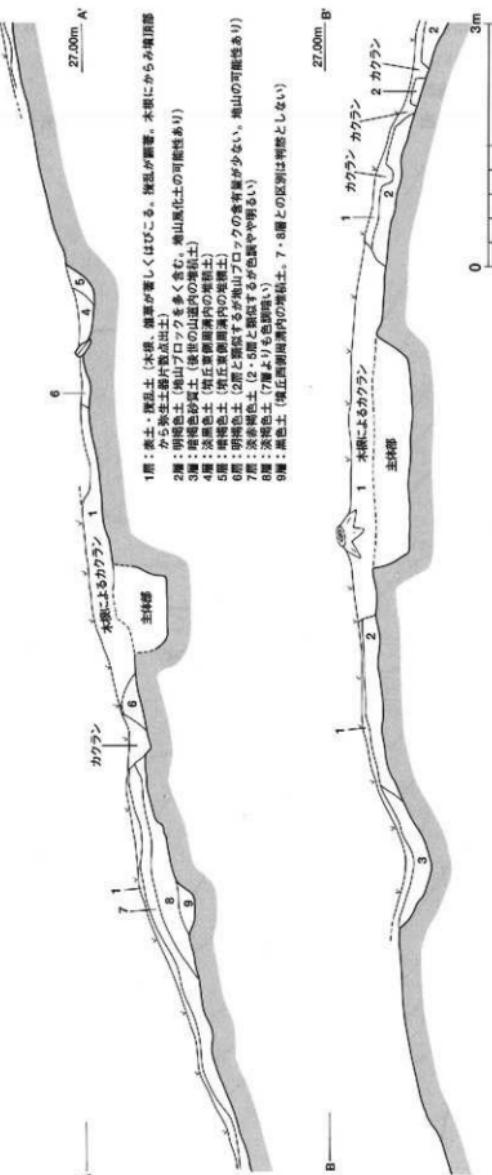
東溝は墳壠の貼石に平行する形状を示しているが、北端部は後世の山道で損壊している。

西溝は貼石が検出されず、溝と貼石の関係は判断としない。

両溝とも、溝の中央部から両端へ向かい緩やかに傾斜しており、断面形は大部分が上方へ浅く開く弧状を呈している。それぞれ、突出部を外周することではなく、各辺に対応して完結しているものと判断された。遺存状況が不完全のため断定はできないが、2号墓の突出部は周溝で断絶されることなく墳丘外と結ばれていた可能性を示唆する。

周溝の規模は一定ではないが明確な造構検出面（地山面）上面の径で、東溝が長さ約4.8m、幅約0.5~1.1m、深さ約0.35m前後（溝上面から底面までの深さ、以下同様）、西溝が長さ約4.5m、最大幅約1m、深さ約0.2m以上を測る。

土層堆積状況（第53図） 1号墳の周溝に関する土層は、第53図A-A'ラインに図示したとおりである。表土・攢乱土層である暗褐色土（1層）の下に、東溝では、淡黒色土（4層）、暗褐色土（5層）、西溝では、淡赤褐色土（7層）、淡褐色土（8層）を挟んで、黒色土（9層）の単純な堆積が認められ、溝底面である地山面に達している。現状では、周溝は地山面を掘り込んで作られ、その後、墳丘内外の土砂が流入し自然に埋

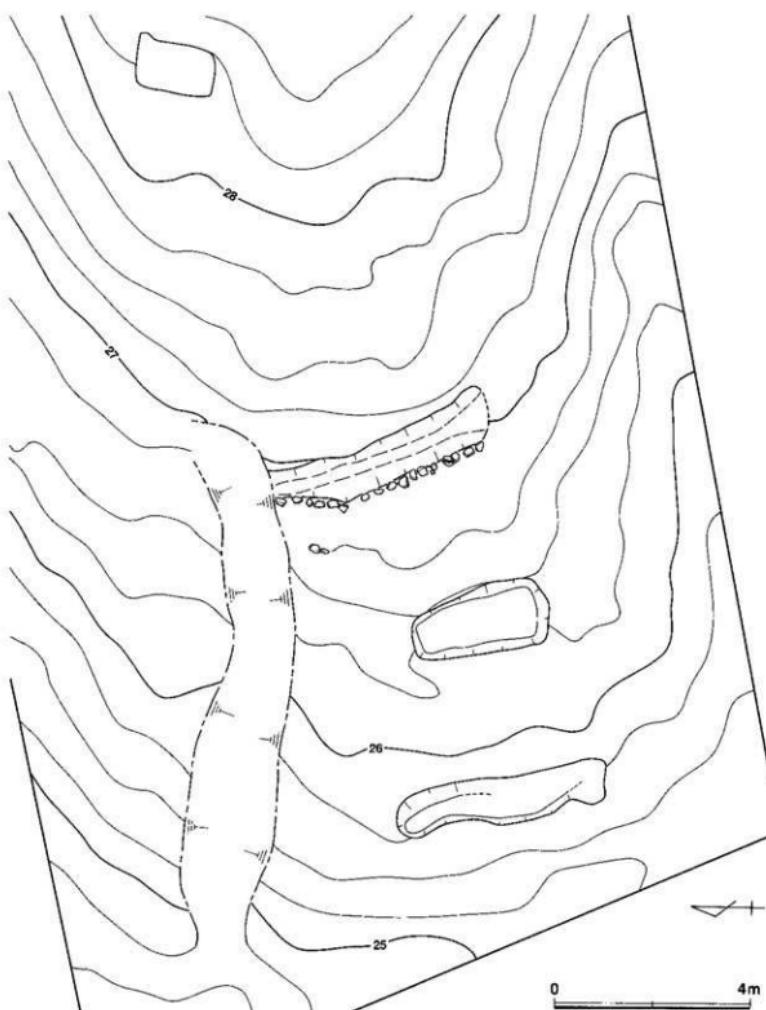


第53図 北I区2号墓土層断面実測図 (S=1:60)

没した状況が推察される。なお、本来の掘り方は、地山面よりも上層にあった可能性もあるが判然としない。

＜外表施設＞

貼石の検出（第54・55・56図） 表上除去後、トレンチ調査を実施する過程で東辺に整然と並ぶ貼



第54図 北I区2号墓調査後地形測量図 ($S=1:100$)

石上面が検出された。埴丘周辺の表土中においても、大小の扁平な割石が散在する状況が認められたが、原位置を保持した石は見あたらなかった。全面調査の過程で、出土状況から原位置を保つ貼石を精査し、現地に留めて記録化した。

貼石の構造と規模（第55・56図）

図示のとおり、貼石は埴丘の東辺埴縁に沿ってやや円なりに一列に並んで出土している。石列は突出部を構成すると推察される残存部北東端付近において周溝同様に北方向へと屈折している。この付近には反対側（北辺側）にも貼石らしき礫石2点が検出された。ちょうど突出部を構成するかの対称的な位置に検出されたが、原位置を保つものか否かは判然としない。

すでに崩落、流出、あるいは開墾等により撤去された石も複数あるものと察せられ残存状況は不完全である。特に石列の南北両端付近の残存状況が悪く、南東突出部付近の貼石はほとんど遺存していない。突出部の形態・構造を類推する上で大きな支障となった。

以下、構造と規模を詳述する。

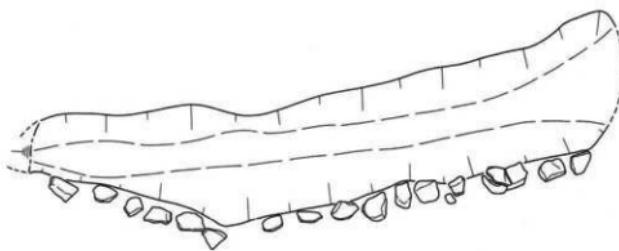
貼石は、長径約10～25cmの割石からなり約20点を検出した。石は組み合わせたり、重ねたりする事はほとんどなく、埴縁付近の埴丘斜面（地山面）上へ横一列に並置されている。貼石は必ずしも接して並ぶのではなく、約5～10cm程の間隔をあけて並ぶ傾向にある。

貼石の検出範囲は、長さ約4.5mを測り、残存部南東端から約3.2m付近で約30° 屈折し突出部へと移行している。

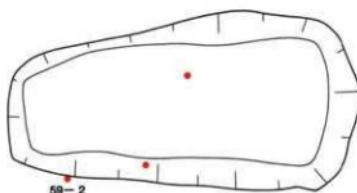
貼石下端面は埴縁付近に認められ、埴丘斜面に据え置かれた様な状況で検出されている。多くの貼石下端の地山面には、各石の形状に沿って深さ約5cm前後の凹地が検出されている。石を安定させるため、わずかに掘り据えた痕跡と推測される。粘質土等を用いての貼石の固定化は認められなかった。

貼石下端のレベルは、標高約26.85～27.00mの間に収まり、北方に向かうにしたがってやや低くなっている。

貼石の岩種 貼石は暗灰褐色系を呈する板状節理した安山岩を使用しており、遺跡の近辺（松江市乃白～忌部周辺）で容易に採取されるものである。なお、貼石のうちには表面が赤みを帯びている石材が多く認められた。これは、岩石白体の風化によるもので顔料等が染布されたものではない。ただし、埴丘基に設置以後変色したものか、産出地における採取の段階から赤く、それらをあえて使用したものかは判断しかねる。

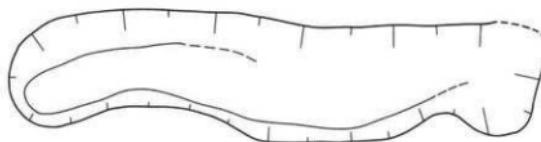


△△



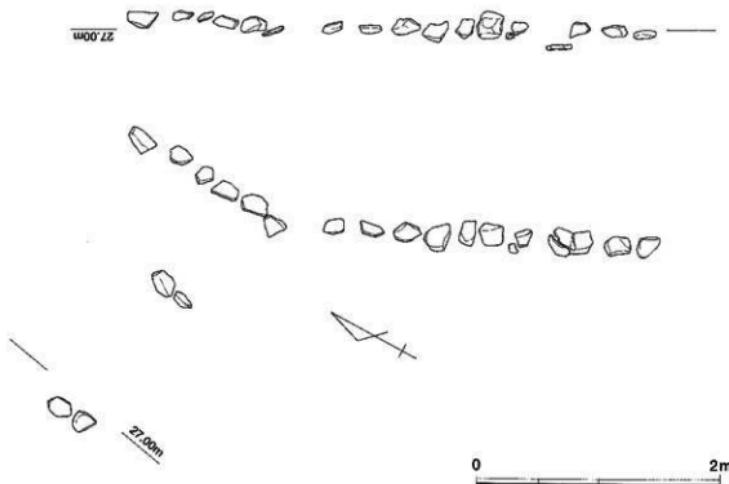
59-1

●



0 2m

第55図 北I区2号墓主要遺物出土状況図 (S=1:40)
(●弥生土器 遺物番号は遺物実測図と対応する)



第56図 北I区2号墓貼石実測図 (S=1:40)

<埋葬施設>

墳頂部において、表土中の大規模な攪乱土を掘削し、地山面精査の段階で、上塙1基を検出した。検出面と位置（第52・53・54・55図） 推定される墳丘のほぼ中央に位置する。明確な遺構検出面上面は、現地表下約30cm前後の攪乱土の下で、大半は地山面であった。土壌の壁面、底面とも全て地山面で確認されている。土層には木根による攪乱以外の乱れは認められず、未盗掘と判断された。

土塙の主軸（長軸）は、N-11°-Wをとる。墳丘の東西辺と平行し、南北辺とはほぼ直交する位置関係にある。

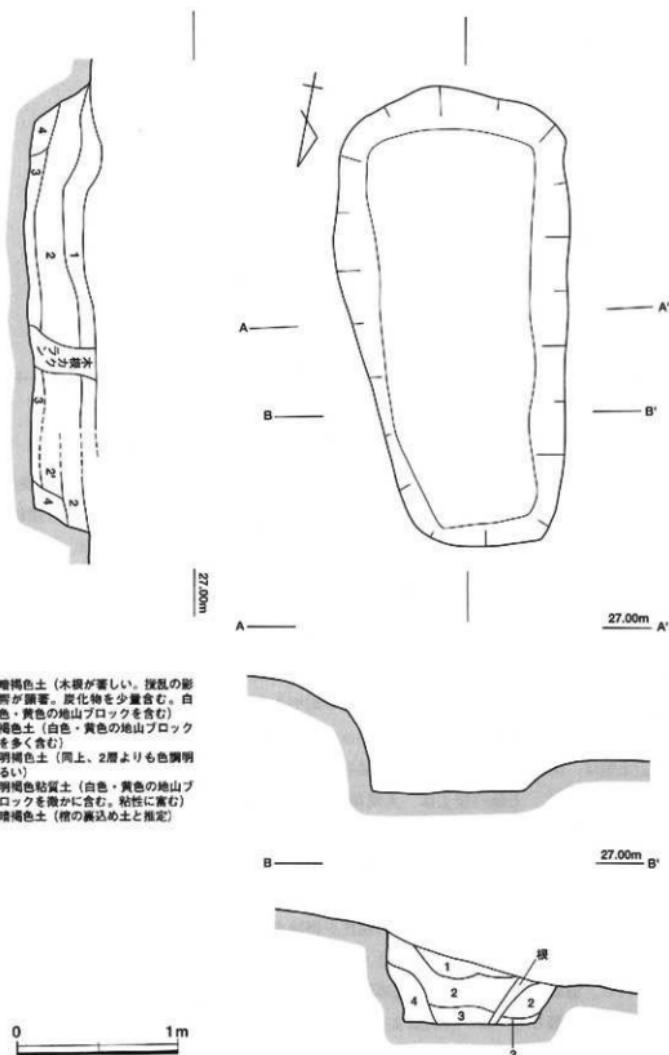
形状・規模（第57図） 平面形は上面、底面とともに隅丸の長方形形状を呈しており、長軸・短軸方向の断面形はいずれも逆台形状である。底面はほぼ平坦で水平に近い。規模は、遺構検出面上面で長軸約2.85m、最大幅約1.5m、底面で長軸約2.45m、幅約0.58~1.0mを測り、深さは最大で約0.55m程度である。上塙は、南方から北方へと徐々に幅を広げている。

覆土・構造（第57図） 土壌内覆土は、大規模な攪乱の影響を受けている最上層である暗褐色土（1層）以下、褐色・明褐色土（2・2'層）、明褐色粘質土（3層）、暗褐色粘質土（4層）の4層に大別される。このうち暗褐色粘質土（4層）は、しまりのある均質な粘質土からなり両側壁、両小口付近に人为的に埋められた可能性が伺える。この十層は平面観察でも顕著に認められることから、この土壌には木棺が埋設されていた可能性が指摘され、同層はそれを安定させるための裏込め土であったと推定される。この他、1・2・3層は、墳丘周辺で認められる地山ブロックを顕著に包含しており、墓壇の掘削土によって埋め戻された土砂からなるものと推察される。なお、土壌本来の掘り込み面（掘り方）は、検出面よりもさらに上層であった可能性もあるが、すでに攪乱、削平されており詳細不明である。

被葬者の頭位 小口幅の大小から察すると、被葬者の頭位は南方向にあったと推察される。

<2号墓北方集石遺構>

東辺貼石の北端から約4m程北方下方の標高26m地点において、貼石と同様の岩種（安山岩）からなる礫石を集石した遺構が検出された（第38図）。既に原位置を動いた石も含まれるが、地山緩



第57図 北Ⅰ区2号墓主体部実測図 ($S = 1 : 30$)

斜面をかすかにテラス状に加工（傾斜を緩やかに変換する程度の地山加工）し、人頭大の割り石が集められたかのような状況で出土している。2号墓との関係性は定かではないが、近在すること、同様の石材を使用していることを勘案しこで報告する。

集石は約15~30cm前後の割り石10点からなり、長さ2.3m、幅0.8m以内の範囲で不規則に並んで検出された。10点のうち7点は地山面にほぼ水平に置かれ、3点は上方の斜面に沿って置かれていた。東端の扁平な石の付近からは、古墳時代頃の土師器と推定される土器片（59-4）

が地山直上から出土している。遺構の時期や性格は判然と

しないが、遺物から古墳時代以後の所産と考えられる。

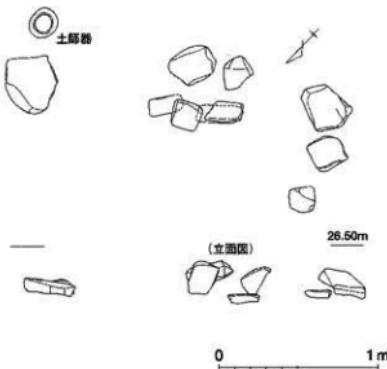
＜遺物出土状況と遺物＞（第55・58・59図）

2号墓主体部である土壇直上付近の表土直下攪乱土層からは、弥生上器の細小片約20点以上と標石と推定される川原石状の自然石1点が出土している。出土状況から原位置を留めているものは無いと判断される。おそらく埴丘周辺にあったものが攪乱等とともに流入したのであろう。

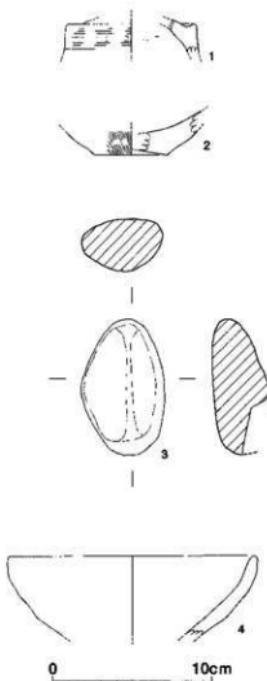
弥生土器片は、いずれも風化が著しい細小片であったが、かろうじて2点のみを図化した。

59-1は、埴頂部表土直下及び主体部直上の攪乱土層中から出土した鼓形器台の脚台部小片である。端部を欠損するが、復元底径約9cm以上を測るものと推定される。器表の風化が著しく判然としないが、外面には擬円線状の平行沈線紋がめぐっている。調整は、外面にヨコナデ、内面にヘラケズリの痕跡が観察される。焼成はおそらく不良で外面淡赤褐色、内面黄褐色を呈し、胎土には径1~2mmの微細砂粒を含む。細片のため判然としないが、弥生時代後期後半（松本編年出雲・隱岐第V-3様式）頃の特徴が伺える。

59-2は、上体部の上層に当たる埴頂部表土直下から出土した壺もしくは甕の底部片と推測される。底部の約3分の1が残存し、復元底径約4.6cmを測る。底部は若干上げ底気味である。調整は器表の風化が著しく判然としないが、



第58図 北I区2号墓北方集石状遺構実測図
(S=1:30)



第59図 北I区2号墓付近出土遺物
実測図 (S=1:3)

外面の一部に縦方向のハケメが観察され、内面は不明である。焼成は良好で、内外面赤褐色を呈し、胎土には径1~3mmの微細砂粒を含む。胎土は、弥生土器を想起させるが詳細は不明である。

同層からは標石を想起させる川原石状の自然石1点も出土している。

59-3は、主体直上の擾乱土中から出土した自然石で、岩種は細粒花崗岩と推測される。一部を欠損するが、明瞭な加工痕や擦痕など人が加わった痕跡は認められない。いびつな橢円形状で淡黄白~褐色を呈し、全長8.5cm、最大幅5.3cm、重量146.83gを測る。出土地点から、いわゆる墓上の標石としての機能が類推されるが定かではない。

2号墓北方の集石遺構からは、土師器1点が出土している。

59-4は、土師器の杯の口縁部片と推定されるが、器種は判然としない。緩やかに内湾する口縁部の全周が残存し、口径15.4cmを測る。器表の風化が著しく調整は不明である。焼成は良好と推定され、胎土は明黄褐色を呈し、径1~3mmの砂粒を含む。胎土や器形は古墳時代の土師器を類推させるが判然としない。

<墳丘の築成過程>

墳丘周辺は、搅乱、削平と土砂流失とともに地形変容が著しく、墳丘の築成過程は判然としない。既述のとおり、周辺地形の状況から察するとある程度の盛土を想定するのが妥当であるが、現地においてその痕跡は全く見いだせなかった。

<時期と性格>

報告のとおり、東西溝の形状と東辺貼石の配石構造、埋葬施設、周辺墳墓との関係性の諸相から四隅突出型墳丘墓の可能性が高いと言える。墳頂部の表土・搅乱土から出土した弥生土器片はほとんどが細小片でその詳細は不明である。しかし、他に共伴する遺物がないことから、これらは墳丘付近へ据え置かれたいわゆる「供獻土器」の一部であった可能性が指摘しうる。このうち時期が確定できる唯一の上器片は弥生時代後期後半頃の可能性がある。築造時期を示唆する遺物かもしれない。

【北I区3号墓】

<調査方法>

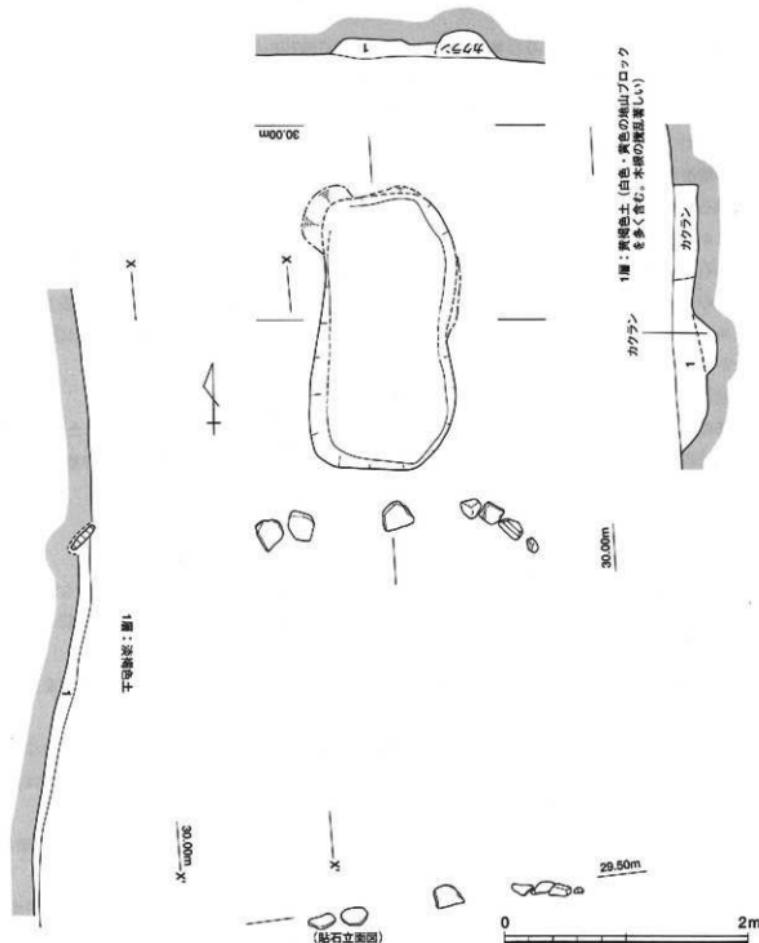
発見の契機は、尾根頂部周辺の全面発掘調査を実施する過程で、表土以下を約10cm程掘り下げ、貼石らしき石列の一部が発見されたのがきっかけである。それ以前は旧地形に墳丘上の高まりを認めることができない状況にあり、墳丘墓が存在するとの認識は無かった。墳丘墓の可能性を認識後、あらためて十層観察用の畦を設定し、周辺精査を行った。墳形、規模、構築方法、築造時期の確定を念頭に置き、墳丘盛土、埋葬施設、旧表土層、地山面、貼石、周溝、伴出遺物の検出に努め、隨時写真と実測による記録化を実施した。記録保存決定後は、追加調査として、貼石の除去を伴う配石構造の調査、墳丘の断ち割り調査等を実施した。

<位置>（第36・38図）

北I区のほぼ中央に位置する。およそ東西方向に伸びる尾根筋頂部の平坦面上にあたり、標高約29.5mを測る地点である。3号墓の北・東・西方は緩斜面となり、南方のみ急傾斜の谷地形と近接している。東方約4mにはSK04~08の十箇坑墓群が、西下方約8mには4号墓の一部が検出されている。

<墳丘>

調査前の地形観察・測量（第36図）において墳丘状の高まりは認識されなかった。全面調査時ににおいても、木根が著しくはびこる表上下は地山風化土もしくは地山面で、墳丘状の地形変化、墳丘盛土、墳丘を画する溝は全く確認されなかった（第60図）。3号墓に伴う墳丘は、開墾等による削平、土砂流出のためすでにほとんどが失われたものと判断される。したがって、その規模、形態は不明と言わざるを得ない。ただし、後述する貼石の検出状況から、貼石で墳丘を区画する小規模な



第60図 北I区3号墓実測図 ($S = 1 : 40$)

「四隅突出型」の墳形のみがかすかにうかがえた。

<外表施設>

貼石の検出（第60図） 表土除去後、ほぼ地山面において、やや円なりに並ぶ貼石の上面が検出された。この他、墳丘周辺の表土中において、大小の扁平な割石が散在する状況が認められたが、原位置を保持する貼石の類は検出されなかった。全面調査を実施する過程で、原位置を保つ貼石を現地に留めて記録化した。すでに崩落、流出、あるいは削塑等により撤去された石が多数あるものと察せられ、残存する貼石はわずか7点のみであった。

貼石の構造と規模（第60図）

図示のとおり、若干円なりに並ぶ貼石の一部が、墳丘南辺の墳裾と察せられる部位に沿って一列検出された。ほぼ東西方向に並ぶ石列は突出部を構成すると推定される残存部東端付近において緩やかに南東方向へと外反する。石は組み合わせたり、重ねたりする事ではなく、墳裾付近の墳丘斜面（地山面）上へ並置されている。貼石は必ずしも接して並ぶのではなく、約5cm程の間隔をあけて並ぶ箇所も認められる。

貼石の検出範囲は、長さ約2.3mを測り、残存部西端から約1.8m付近で約40°屈折して外反する。ここから突出部へと移行するものと推定されるが、突出部の形態、規模は不明である。

貼石下端面は、墳裾付近に認められ、墳丘斜面に据え置かれた様な状況で検出されている。貼石下端の地山面には、各石の形状に沿って深さ約10cm前後の凹地が検出されている。石を安定させるため、わずかに掘り据えた痕跡と推測される。なお、粘質土等を用いての貼石の固定化は認められなかった。

貼石下端のレベルは、標高約29.40～29.45mの間に収まり、ほぼ水平を保っている。

貼石の岩種 長径約10～30cmの割り石を使用している。暗灰褐色系を呈する板状節理した安山岩で、遺跡近辺（松江市乃白～忌部周辺）において容易に採取されるものである。北Ⅰ区1号墓、2号墓、4号墓と共に通する。

<埋葬施設>

墳頂部の地山面を精査した段階で、土壙1基を検出した。

検出面と位置（第60図） 推定される墳丘の墳頂部に位置するものと察せられる。明確な遺構検出面上面は、現地表下約10cm前後の地山面であった。土壤の壁面、底面も全て地山面で確認されている。上層には木根による大規模な搅乱が観察されたが木盗掘と判断される。

土壤は、墳丘南辺の貼石とは、約25cmと近接している。上層の主軸（長軸）は、ほぼ南北方向を指向する。

形状・規模（第60図） 搅乱により本来の形状は判然としないが、平面形は上面、底面ともによそ隅丸の長方形形状を呈しており、長軸・短軸方向の断面形はいずれも逆台形状に近い。底面は木根による破壊が顕著で起伏が激しく、本来の形状は不明である。

規模は、遺構検出面上面で長軸約2.25m、短軸約1.1m、深さは最大で約0.25m程である。土壙は、北方小口から南方小口へと徐々に幅を広げている。

覆土・構造（第57図） 表土層から及ぶ大規模な搅乱の影響を受けた黄褐色土（1層）の単層堆積が認められた。木棺等の埋設は想定されず、おそらく素掘りの上層であったと推察される。土壙本来の掘り込み面（掘り方）は、検出面よりもさらに上層であった可能性もあるが、すでに搅乱、削

平されており詳細不明である。

被葬者の頭位 土壇小口幅の大小からすると被葬者の頭位は南方方向と推察されるが判然としない。

＜遺物出土状況と遺物＞

3号墓周辺から遺物は一切出土しなかった。

＜時期と性格＞

報告のとおり、削平もしくは流出により墳丘はほとんど残存していなかった。しかし、南辺にわずかに遺存する貼石の配石構造、埋葬施設の存在、周辺遺構との関連性から、小規模な四隅突出型墳丘墓の可能性が指摘されよう。時期は共伴する遺物が皆無で詳細不明である。1～2号墓と近在することから、それらとそう遠からぬ時期（弥生時代後期後半頃）の所産と推察されるが定かではない。

【北I区4号墓】

＜調査方法＞

発見の契機は、尾根頂部周辺の全面発掘調査を実施する過程で、表土以下約10cm程を掘り下げ、地山面精査の過程で、石列の一部が発見されたのがきっかけである。それ以前は、川地形に墳丘上の高まりを認めることができない状況にあり、墳丘墓が存在するとの認識は無かった。墳丘墓の可能性を認識後、あらためて土層観察用の畦を設定し、周辺の精査を行った。墳形、規模、構築方法、築造時期の確定を念頭に置き、墳丘盛土、埋葬施設、旧表土層、地山面、石列、周溝、伴出遺物の検出に努め、随時写真と実測による記録化を実施した。記録保存決定後は、追加調査として、石列の除去を伴う配石構造の調査、墳丘の断ち割り調査等を実施した。

＜位置＞（第36・38図）

北I区の中央からやや西よりに位置する。およそ東西方向に伸びる尾根筋頂部の緩斜面～平坦面上にあたり、標高約28.5～29.5mを測る地点である。4号墓の北・東・西は緩斜面で、南方のみ急傾斜の谷地形へ近接している。東上方約8mには3号墓が、西下方約9mには2号墓が近在する。また、4号墓の北側には、後述する上坑（塚）4基（SK01・02・03・09）も近接して検出されている。

＜墳丘＞（第36・38・61図）

調査前の地形観察・測量（第36図）において墳丘状の高まりは認識されなかった。全面調査時においても、木根が著しくはびこる表上下は地山風化土もしくは地山面で、墳丘状の地形変化、墳丘盛土、墳丘を画する溝は全く確認されなかった（第61図）。4号墓に伴う墳丘は、開墾等による削平、土砂流出のため既にほとんどが失われたものと判断される。ただし、後述する特異な石列や上体部と推察される土壇の検出状況から、石列によって区画された「方形プラン」を基調とする墳丘が存在したことは推測可能である。なお、現状ではその規模を推定することは難しい。

＜外表施設＞

石列の検出（第61・62図） 表土除去後、ほぼ地山面において、東西方向と南北方向に直線的に並ぶ二条の石列が検出された。方形を基調とする墳丘の南辺と東辺の墳縁と祭せられる部位にあたる。

この他、墳丘周辺の表土中においては、大小の扁平な割石が散在する状況が認められたが原位置を保持した石は検出されなかった。全面調査を実施する過程で、原位置を保つ石列を確定し現地に

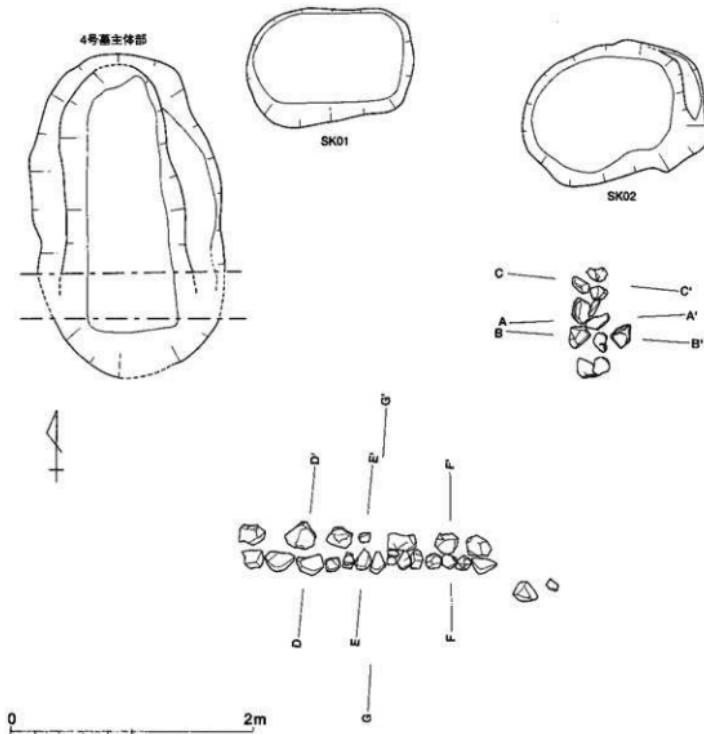
留めて記録化した。既に崩落、流出、あるいは開墾等により撤去された石が多数あるものと察せられ、残存する石列は図示した2箇所のみであった。

石列の位置関係・構造・規模（第61・62図） 図示のとおり、南側の石列と東側の石列はその主軸方向がほぼ直角に交わる位置関係にある。それぞれ、右列の上軸線上で横断面形が「V」字状を呈するような特殊な配石構造を有している。後述する主体部らしき上層との位置関係、周辺で検出された1～3号墓の貼石構造との類似性を総合的に考えると、この石列は方形基調の埴丘を区画するため埴丘付近に並置された特異な配石構造の一部と位置づけられよう。

したがって、以下、それぞれを4号墓の南辺石列、東辺石列と呼称し詳述する。

（南辺石列） 扁平な割り石を南北二列に並置している。石列の主軸（長軸）は、ほぼ東西方向にある。南北の石はこの主軸線上に向かって内傾しており、断面形が「V」字状を呈するように置かれている。

石列残存部は、ほぼ直線を呈すが、残存部の東端付近には、それらの列から外れる石2点が存在する。これが、原位置を保つものか否かは判然としない。



第61図 北I区4号墓実測図 (S=1:40)

石列の検出範囲は、長さ約2.15m（列から外れた石2点を除く）、幅約0.3～0.4mを測る。南側は7点の石を5～15cmの間隔を保ちながら並べ、北側は15点の石を密に並べている。南側には長径約10～25cmの石が、北側には長径約7～23cmの石が用いられ、前者よりも後者の石が全体に小ぶりの感がある。このように石列の南側と北側ではその石の密度と個体別の大ささに差異が認められる。

石列下端面の地山は、石列の形状に合わせて断面「V」字状に掘り窪められていた。しかし、一部の石の下端面は、地山（地山風化土含む）か埴丘盛土等、他の土層かの判断がつかない状況にあった。ほとんどの石の下端面には、各石の形状に沿った凹地が検出されたが、意図的に掘り据えた痕跡か否かは判然としない。また、粘質土等を用いての貼石の固定化は特に認められなかった。

石列下端のレベルは、標高約28.65～29.70mの間に収まりほぼ水平を保っている。

（東辺石列） 扁平な割り石を東西二列に並置している。石列の主軸（長軸）は、ほぼ南北方向にある。東西の石はこの主軸線上に向かって内傾しており、断面形が「V」字状を呈するよう置かれている。石列残存部は、ほぼ直線を成すが、南端部付近では一部に列から外れる石も存在する。これらが原位置を保つものか否かは判然としない。

石列の検出範囲は、長さ約0.93m、幅約0.2～0.3m（列から外れた石を除く）を測る。西側は3～4点の石を約3～6cm前後の間隔で、東側は6～7点の石を約3～5cm前後の間隔で並べている。西側には長径約20～25cmの石が、東側には長径約15～25cmの石が用いられている。残存状況の差異によるかもしれないが、東辺石列よりも南辺石列の方が整然と並べられた印象をもつ。

石列下端面の地山は、石列の形状に合わせて、断面「V」字状に掘り窪められていた。しかし、一部の石の下端面は、地山（地山風化土含む）か埴丘盛土等、他の土層かの判断がつかない状況にあった。ほとんどの石の下端面には、各石の形状に沿った凹地が検出されたが、意図的に掘り据えた痕跡か否かは判然としない。また、粘質土等を用いての石の固定化は特に認められなかった。

石列下端のレベルは、標高約29m前後に収まりほぼ水平を保っている。

石列の岩種 北I区1～3号墓のほとんどの貼石と同じく、暗灰褐色系を呈する板状節理した安山岩を使用している。 遺跡近辺（松江市乃白～忌部周辺）において容易に採取されるものである。

＜埋葬施設＞

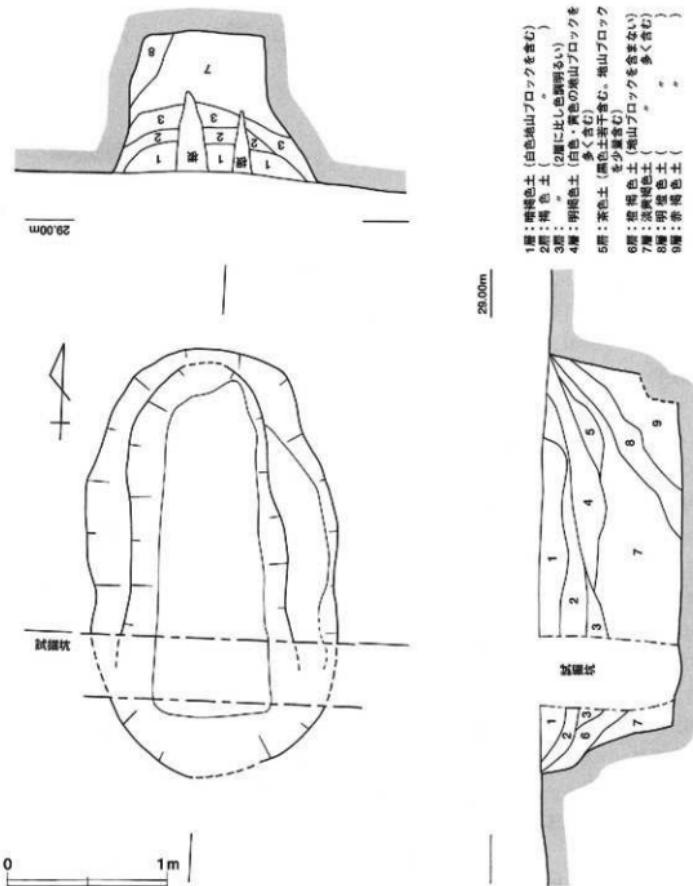
墳頂部と推察される地山面を精査した段階で、土壤1基を検出した。

検出面と位置（第61図） 推定される埴丘の墳頂部に位置するものと察せられる。明確な遺構検出

上面面は、現地表下約10cm前後の地山面であった。土壤の壁面、底面も全て地山面で確認されている。土層には大きな乱れはなく未盃掘と判断される。

土壤は、東辺石列から東方約2.85mの位置にある。土壤の主軸（長軸）は、ほぼ南北方向をとり、東辺石列のそれと平行し、南辺石列のそれとは直交する位置関係にある。

形状・規模（第63図） 一部をトレンチ調査によって掘り抜いてはいるが、平面形は上面が正な橢円形、底面は隅丸の長方形状を呈している。長軸・短軸方向の断面形は「四」字状に近い。底面は平坦でほぼ水平である。西壁面の一部に緩傾斜面が認められるが、段状の加工とは呼べないものである。



第63図 北I区4号墓主体部実測図 (S=1:30)

規模は、遺構検出上面で長軸径約2.66m、最大幅約1.56m、土壤底面で、長軸径約2.05m、幅約0.45~0.75m、深さは最大約1m前後を測る。底面幅は、北方小口から南方小口へと徐々に幅を広げている。

覆土・構造（第63図） 図示したとおり、土壤内堆積土はおよそ9層に分層され、ほとんどの層に埴丘周辺で認められる地山ブロックが包含されている。おそらく、土壤の掘削土によって埋め戻されたものと推察される。木棺等の埋設は想定されず、素掘りの土壤であったと推定される。なお、土壤本来の掘り込み面（掘り方）は、検出面よりもさらに上層であった可能性もあるが、すでに削平されており詳細不明である。

被葬者の頭位 土壤小口幅の大小からすると被葬者の頭位は南方方向と推察される。

<遺物出土状況と遺物>

4号墓周辺から、遺物は一切出土しなかった。

<時期と性格>

削平もしくは流出により埴丘はほとんど残存していなかった。しかし、断面「V」字状の特異な配石構造と埋葬施設の存在、周辺遺構との関係から、石列によって区画された方形基調の埴丘墓である可能性が指摘される。四隅突出型埴丘墓に比定すべき積極的根拠は見いだし難かった。

時期は共伴する遺物が皆無で、詳細不明である。ただし、北I区1~3号墓に近在し、立地、石の貼り方、岩種、主軸方向、推定される被葬者の頭位方向などに共通性が見いだせることから、それらとそう遠からぬ時期（弥生時代後期後半頃か）の所産と位置づけて大過ないだろう。

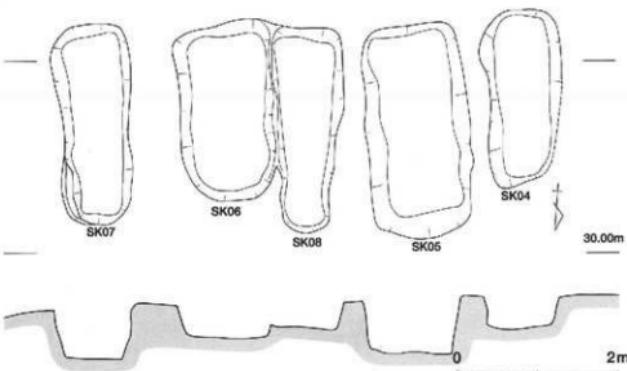
【土壤墓群 北I区SK04~SK08】

位置と概要

（第36・38・64図） 北I区調査区のほぼ中央部、標高29.5m前後を測る尾根頂部平坦面からは、類似の規模と構造を持つ土坑5基が近接する状況で検出されている。整然と平行して並ぶこれらの主軸（長軸）方向は、ほぼ南北方向にあたり、東西方向に伸びる尾根筋とは直交する位置関係にある。このうち複数の土坑直上からは、いわゆる墓上の「標石」や「供獻土器」と呼称しうる遺物も出土しており、

弥生時代後期
の土壤墓と認
識された。

これら土壤
墓群の東方約
3.5mには1号
墓が、西方約
4mには3号
墓が、ほぼ同
じ標高の尾根
頂部平坦面に
近在しており、

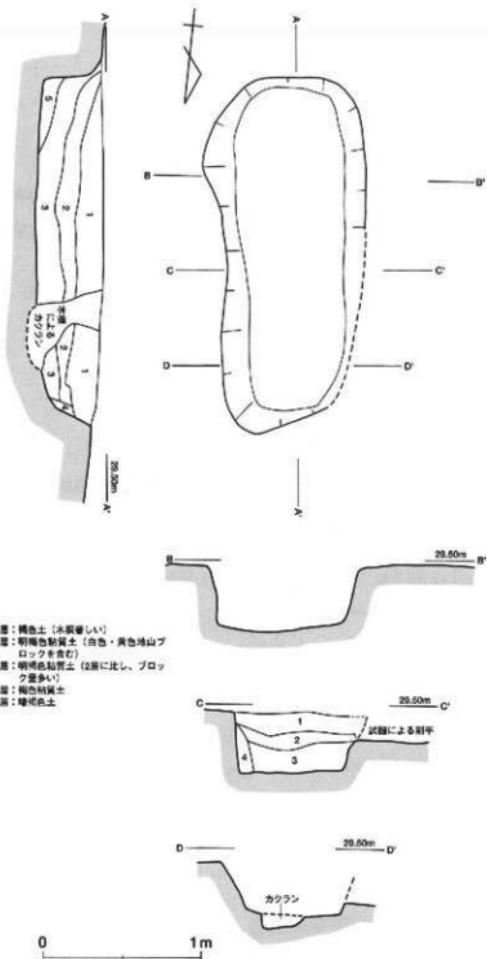


第64図 北I区SK04~08遺構配置図 (S=1:60)

それらとの密接な関係を示唆する立地といえる。

遺構検出面は、表土下約10~20cmほどで達する明確な地山面であった。從って壁面、底面ともに地山面で検出された。付近の地表面は削平や土砂流失による旧地形の改変が著しく、本来の掘り込み面（掘り方）はより上層であったと察せられるが判然としなかった。土壤内には木根による搅乱は認められたものの、盜掘等人为的な搅乱の痕跡は見られなかった。

以下、遺構の検出順に従いSK04から08と呼称し詳述する。



<SK04>

位置（第64図） 土塙墓群のうち最も西方に位置する。

形状・規模（第65図） 平面形はいびつな長方形状を呈し、縦横の断面形はいずれも逆台形状を呈している。底面は、平坦でほぼ水平を保っている。その幅は北側小口から南側小口に向か徐々に幅を広げている。なお、西側壁面の一部はトレンチ調査時の掘削によって損ってしまった判然としない。規模は、遺構検出面上面で長軸2.12m、最大幅約1m、深さ最大約0.45m、土壤底面で長軸2.0m、幅約0.4~0.7mを測る。土壤の主軸（長軸）は、N-6°-Wをとる。およそ東西方向に伸びる尾根筋に対して、ほぼ土壤の主軸（長軸）が直交していることになる。

覆土（第65図） 図示したとおり、褐色系の五層に分層され比較的単純な層序関係が認められる。土層観察による限り木棺等の埋設は想定されない。おそらく素掘りの土壤であったと推測される。

1~3層は遺構周辺の地山で認められる地山ブロックを顯

第65図 北I区SK04実測図 (S=1:30)

著に包含しており、おそらく土壤の掘削上によって埋め戻されたことが推察される。

出土遺物 土壌内および土壤上層、周辺から遺物は出土しなかった。

被葬者の頭位 底面幅、小口幅の大小から被葬者の頭位は南方向にあったと推定される。

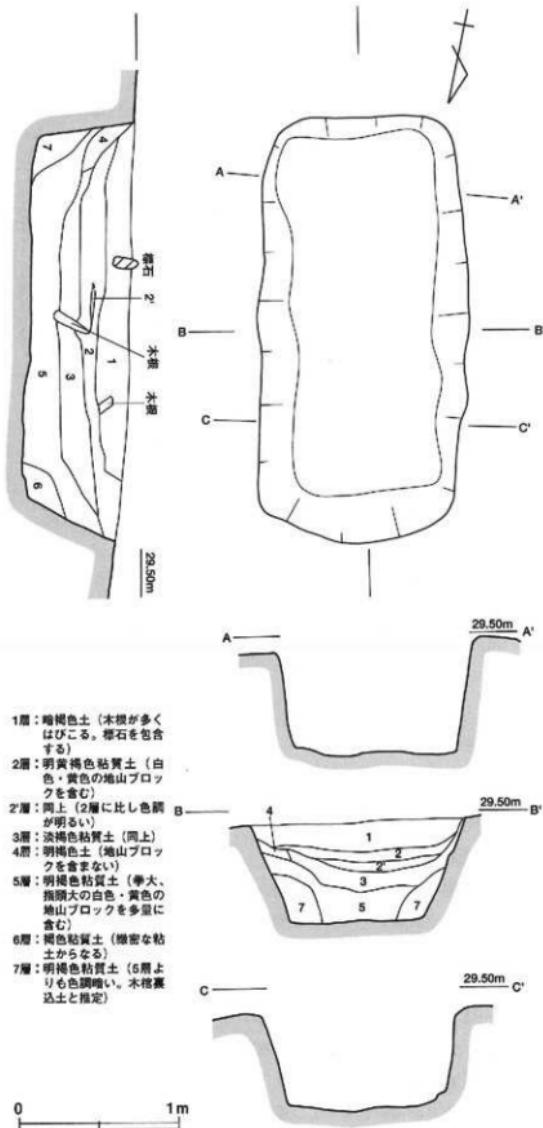
<SK05>

位置 (第64図) 西方約0.2mにはSK04が、東方約0.25mにはSK08が近在する。

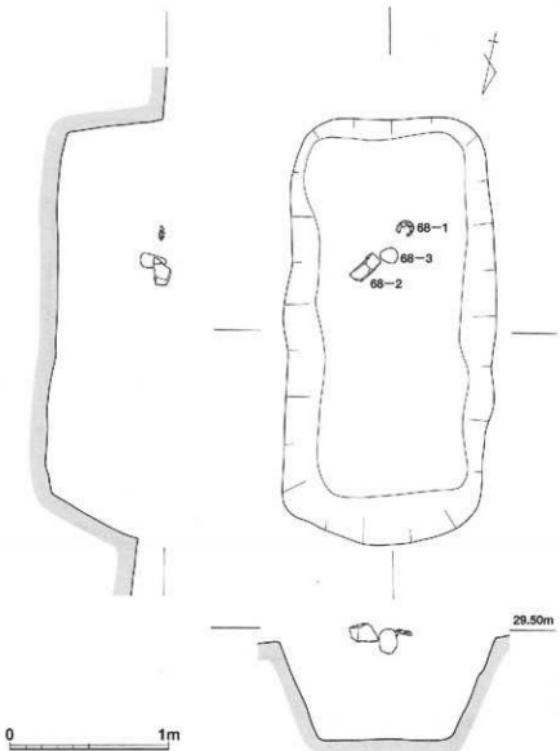
形状・規模 (第66図) 平面形は隅丸長方形を呈し、縦横の断面形はいずれも逆台形状を呈する。底面は、平坦でほぼ水平を保っている。その幅は北側小口よりも南側小口が広くなっている。規模は、造構検出面上面で長軸2.65m、最大幅約1.33m、深さ最大で約0.75m、土壤底面で長軸2.2m、幅約0.85~1.0mを測る。土壤の主軸(長軸)は、N-12°-Wをとる。およそ東西方向に伸びる尾根筋に対して、ほぼ土壤の主軸(長軸)は直交していることになる。

覆土 (第66図)

土壤内覆土は、標石らしき標石、磨石、弥生土器片を包含する最上層の暗褐色



第66図 北I区SK05実測図 (S=1:30)



第67図 北I区SK05遺物出土状況実測図 (S=1:30)

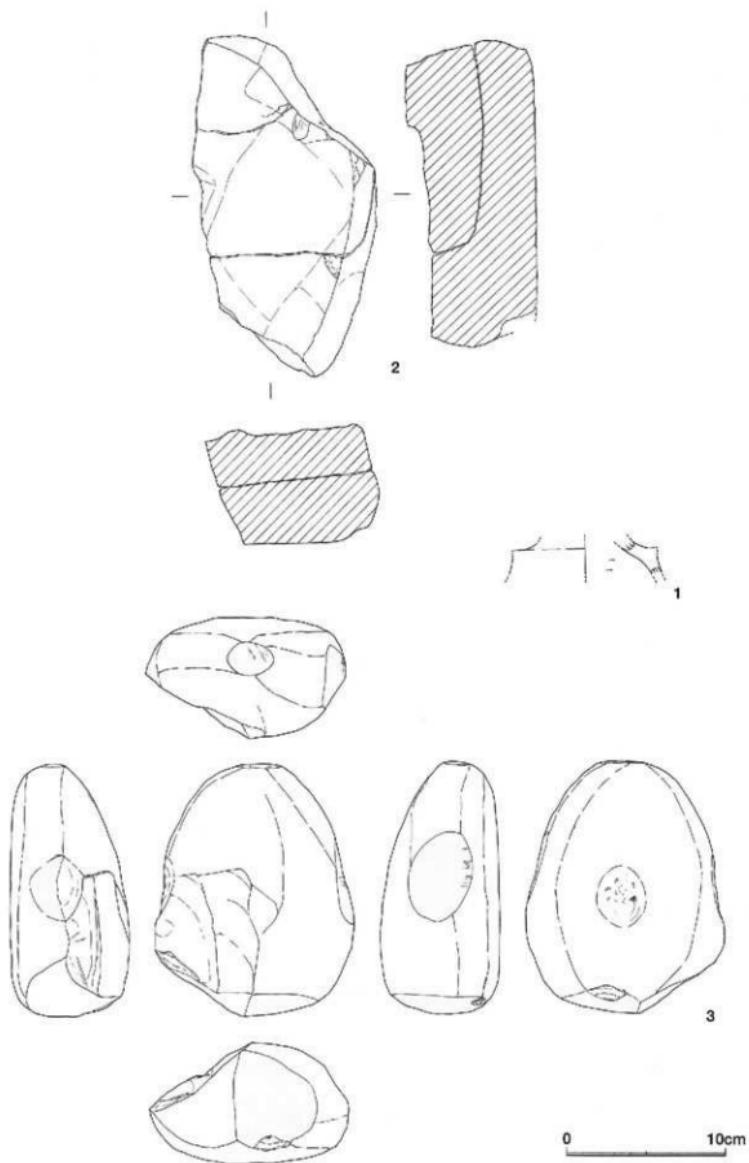
土以下、明黄褐色粘質土（2・2'層）、淡褐色粘質土（3層）、明褐色土（4層）、明褐色粘質土（5層）、褐色粘質土（6層）、明褐色粘質土（7層）の7層に大別され、比較的単純な層序関係を示す。このうち6・7層は、しまりのある緻密な粘質土からなる。両側壁、両小口付近に平面観察でも顕著に認められ、人為的に埋められた可能性を強く示唆する。おそらくこの土壙には木棺が埋設され、6・7層はそれを安定させるための裏込め土であったと推定される。また、2～5層は遺構周辺の地山で認められる地山ブロックを豊富に包含しており、土壙の掘削土によって

埋め戻されたと推察される。

遺物出土状況と遺物（第67・68図） 土壙の南壁上面より約60～80cmの地点から弥生土器1点、角礫1点、磨石と呼びうる磨製石器1点が出土している。土壙直上の、ほぼ主軸（長軸）付近にあたる。この出土状況からして、偶然混入した遺物とは考えられず、土壙直上層もしくは土壙内覆土中に意図的に置かれたものと推定される。いわゆる墓上の「標石」、「供獻土器」と呼ばれるものに位置づけられる。

68-1は、土壙直上の覆土最上層（1層）から出土した鼓形器台の脚台部小片である。全周の約2分の1が残存し、端部を欠損するが、復元底径約10cm以上を測るものと推定される。器表の風化が著しく紋様、調整ともに判然としないが、内面にはヘラケズリの痕跡が微かに認められる。焼成は良好で外外面黄褐色を呈し、胎土には径1～2mmの砂粒を含む。細片のため時期の詳細は不明である。弥生時代後期後半頃の所産であろうか。

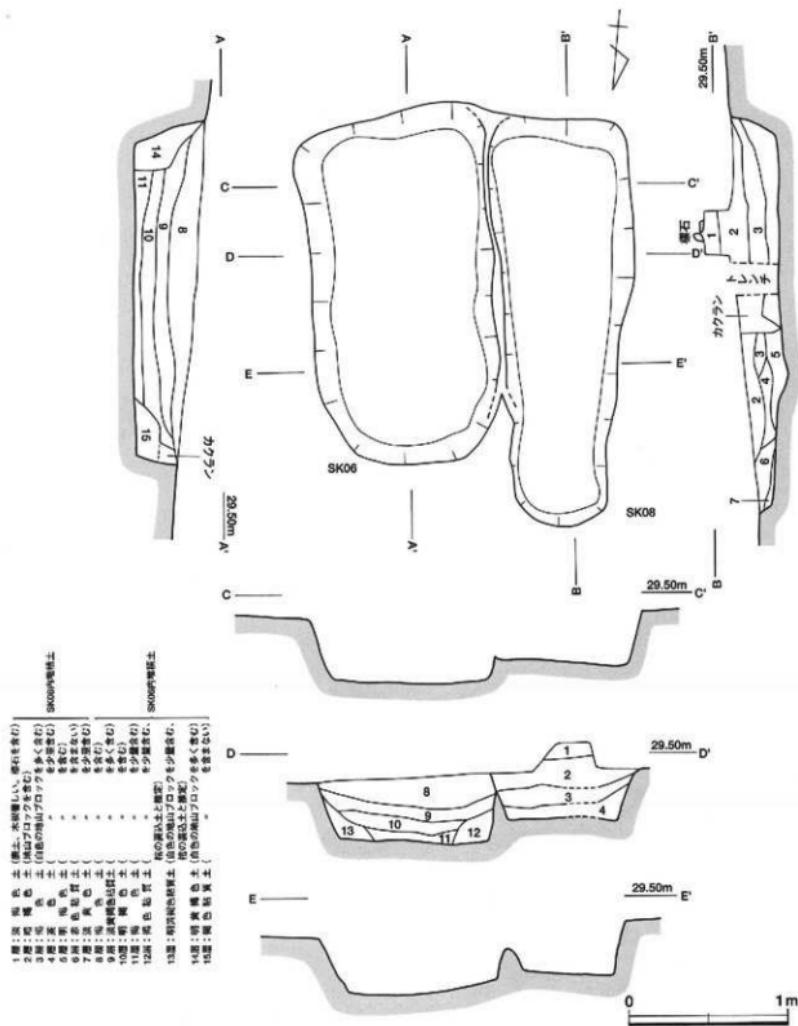
68-2は、土壙直上の覆土最上層（1層）から出土した角礫である。後述する磨石と近接して出



第68図 北I区SK05出土遺物実測図 ($S=1:3$)
(アミ部分は使用痕が認められる箇所を示す)

土している。全長21.3cm、最大幅11.4cm、厚さ6.6cm、重量2,256.78 gを測り、赤褐色を呈している。自然石と思われ明確な加工痕、使用痕、顔料等の付着は認められない。岩種は安山岩で北I区1～3号墓の貼石、同4号墓の石列で使用された石と同種である。

68-3は、土壤直上の覆土最上層（1層）からほぼ直立する状態で出土した磨石である。前述の



第69図 北I区SK06・08実測図 (S=1:30)

角礫と近接して出土している。図示したとおり、器表の各面に人為的な擦痕や敲打痕が観察される。全長15.3cm、最大幅12.5cm、最大厚さ7.5cm、重量2,140gを測り、明青灰色を呈している。岩種は閃綠岩もしくは斑頗岩である。当遺跡近辺では、島根半島沿岸（大芦ミカゲ等）や斐伊川上流域で産出するが、形状から前者の海石を使用した可能性が高いと推定される。

被葬者の頭位 土壙底面幅、小口幅の大小及び遺物の出土地点から察して、被葬者の頭位は南方向にあったと推定される。

<SK06>

位置（第64図） SK07の西方約0.65mに近在し、西隣はSK08と接している。

形状・規模（第69図） 平面形は隅丸長方形状を呈し、縦横の断面形はいずれも逆台形状を呈する。底面は、平坦でほぼ水平を保っている。その幅は北小口側よりも南小口側がやや広くなっている。規模は、遺構検出面上面で長軸2.21m、最大幅約1.15m、深さ最大で約0.45m、土壙底面で長軸1.92m、幅約0.7~0.95mを測る。上壙の主軸（長軸）は、N-6°-Wをとる。およそ東西方向に伸びる尾根筋に対して、ほぼ上壙の主軸（長軸）は直交していることになる。

覆土（第69図） 土壙内覆土は、最上層の褐色土（8層）以下、淡黄褐色粘質土（9層）、明褐色土（10層）、褐色土（11層）、褐色系の粘質土（12・13・14・15層）、に大別され、比較的単純な層序関係を示す。このうち12~15層は、しまりのある緻密な粘質土からなる。両側壁、両小口付近に平面観察でも顯著に認められ、人為的に埋められた可能性を強く示唆する。おそらくこの土壙には木棺が埋設され、12~15層はそれを安定させるための裏込め上であったと推定される。また、ほとんどの層が遺構周辺の地山で認められる地山ブロックを包含しており、土壙の掘削上によって埋め戻されたことがと推察される。

なお、上層観察の結果、西側壁面の上部において、西隣のSK08とは、いわゆる切り合い関係にあり、SK06がSK08に先行して存在したことが確認される。

出土遺物 土壙内および周辺から遺物は出土しなかった。

被葬者の頭位 底面幅、小口幅の大小から被葬者の頭位は南方向にあったと推定される。

<SK08>

位置（第64図） SK06の西隣に接し、西方約0.25mにはSK05が近在する。先述の通り、SK06とは遺構上面付近において切り合い関係が認められ、SK06が先行しSK08が後続して築かれたことが確認されている。

形状・規模（第65図） 平面形は細長い隅丸長方形もしくは台形状を呈し、縦横の断面形はいずれも逆台形状を呈する。底面は平坦で近くほぼ水平を保っている。その幅は南側小口から北側小口に向かい徐々に狭くなっている。規模は、遺構検出面上面で長軸2.54m、最大幅約0.88m、深さ最大で約0.35m、土壙底面で長軸2.3m、幅約0.47~0.76mを測る。土壙の主軸（長軸）は、N-5°-Wをとる。およそ東西方向に伸びる尾根筋に対して、ほぼ上壙の主軸（長軸）が直交していることになる。

覆土（第69図） 図示したとおり、いわゆる標行らしき扁平な板状の石、土器片を包含する表土層の淡褐色土（1層）以下、暗褐色土（2層）、褐色土（3層）、茶色土（4層）、明褐色土（5層）、

赤色粘土（6層）、淡黄色土（7層）の七層に大別され、比較的単純な層序関係を示す。土壌観察による限り木棺等の埋設は想定されない。おそらく素掘りの土壤であったと推測される。

1・6層を除く各層とも遺構周辺の地山で認められる地山ブロックを包含しており、おそらく土壤の掘削土によって埋め戻されたことが推察される。

遺物出土状況と遺物（第70・71図） 土壌南壁上面から約65~90cmの地点より弥生土器1点、板状の石1点が出土している。板状の石はひび割れていたが、地面に対しほぼ水平に置かれたような状況で出土した。出土地点は、土壤直上の、ほぼ主軸（長軸）付近にある。この出土状況からして、偶然混入した遺物とは考えられず、土壤直上の表土層もしくは土壤内覆土中に意図的に置かれたものと推定される。いわゆる墓上の「標石」、「供獻土器」と呼ばれるものに位置づけられる。

71-1は、土壤直上の覆土最上層、表土中（1層）から出土した弥生土器と推測される器台の脚台部小片である。全周の約10分の1が残存し、復元底径約15cm以上を測る。器表の風化が著しく紋様、調整とともに判然としないが、外面にはヨコナデ、内面脚端部付近にヨコナデ、同上半部にはヘ

ラケズリの痕跡が微かに認められる。焼成は良好で内外面黄褐色を呈し、胎土には径1~3mmの砂粒を含むが緻密である。細片のため時期の詳細は不明である。

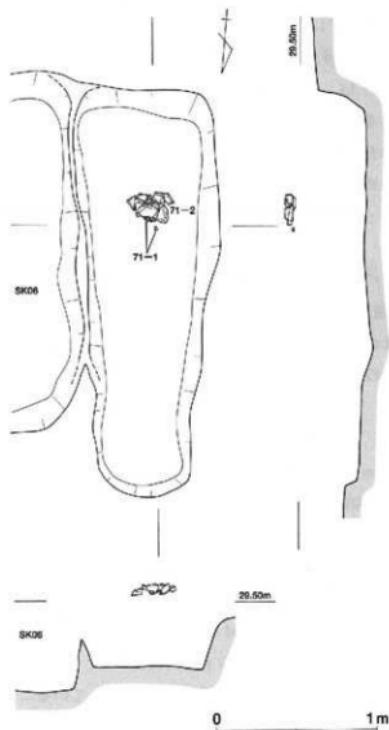
71-2は、土壤直上の覆土最上層、表土層（1層）から出土した板状の石である。先述した弥生土器片と共に出土している。出土時点でのひび割れを複数化したものと接合のうえ復元固化した。他に復元できない破片1点が残存する。全長24.8cm、最大幅17.6cm、最大厚4.1cm、重量2,045.27gを測り、赤褐色を呈している。自然石と思われ、明確な加工痕、使用痕、顔料等の付着は認められない。岩種は安山岩で北I区1~3号墓の貼石、同4号墓の石列、SK05の角礫と同種である。

被葬者の頭位 土壌底面幅、小口幅の大小及び遺物の出土地点から察するに、被葬者の頭位は南方向にあったと推定される。

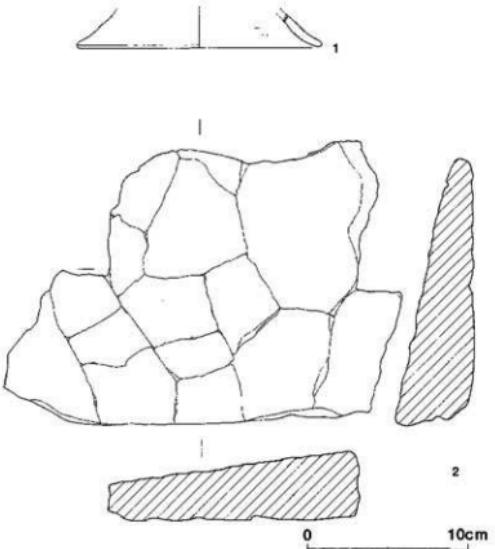
<SK07>

位置（第64図） 土壌墓群の東端にあたり、西方約0.65mにはSK06が近在し、東方約3mで北I区1号墓の西溝に到る。

形狀・規模（第72図） 平面形は隅丸長方形を呈し、縦横の断面形はいずれも逆台形を呈する。底面は、平坦でほぼ水平を



第70図 北I区SK08標石出土状況実測図 ($S=1:30$)
(遺物番号は遺物実測図と対応する)



第71図 北I区SK08付近出土遺物実測図 (S=1:3)

密な粘質土からなる。両側壁、両小口付近に平面観察でも顯著に認められ、人為的に埋められた可能性を強く示唆する。おそらくこの上壇には木棺が埋設され、6・7層はそれを安定させるための更込め土であったと推定される。また、2~5層は遺構周辺の地山で認められる地山ブロックを豊富に包含しており、おそらく上壇の掘削土によって埋め戻されたものと思われる。

遺物出土状況と遺物 (第72・73図) 表土直下約5~10cmで、土壤南壁上面から約80~85cmの地点より弥生土器片3点、磨石と呼びうる磨製石器1点が共伴出土している。土壤直上の、ほぼ主軸(反軸)付近にあたる。出土状況からして、偶然混入した遺物とは考えられず、土壤直上の表土層もしくは土壤内覆土中に意図的に置かれたものと推定される。いわゆる墓上の標石、供獻土器に位置づけられる。

73-1は、土壤直上の表土直下から出土した鼓形器台の筒部~脚台部の破片である。全周の約2分の1が残存し、端部を欠損するが、復元底径約13cm以上を測る。筒部外面には三条の平行沈線紋と刺突による羽状紋が認められる。調整は風化が著しく不明瞭であるが、外面にヨコナデ、内面にはヘラケズリの痕跡が観察される。焼成は良好で内外面淡黄褐色を呈し、胎土には径1~3mmの白色砂粒を含む。弥生時代後期後半(松本編年出雲・閑岐V-3様式)頃の所産と推定される。

73-2は、土壤直上の表土直下から出土した鼓形器台の脚台部の破片である。全周の約2分の1が残存し、復元底径約15.4cm、最大径17.6cmを測るものと推定される。器表が風化しており判然としないが、外面には平行沈線紋が数条認められる。調整も風化が著しく不明瞭であるが、外面と内面下端部付近にヨコナデ、内面上半にはヘラケズリの痕跡が観察される。焼成は良好で内外面黄褐色

保っている。その幅は北側小口から南側小口に向かい広くなっている。規模は、遺構検出上面で長軸2.48m、最大幅約1m、深さ最大で約0.7m、土壤底面で長軸2.2m、幅約0.45~0.73mを測る。上壇の主軸(長軸)は、N-5°-Wをとる。およそ東西方向に伸びる尾根筋に対して、ほぼ上壇の主軸(長軸)が直交していることになる。

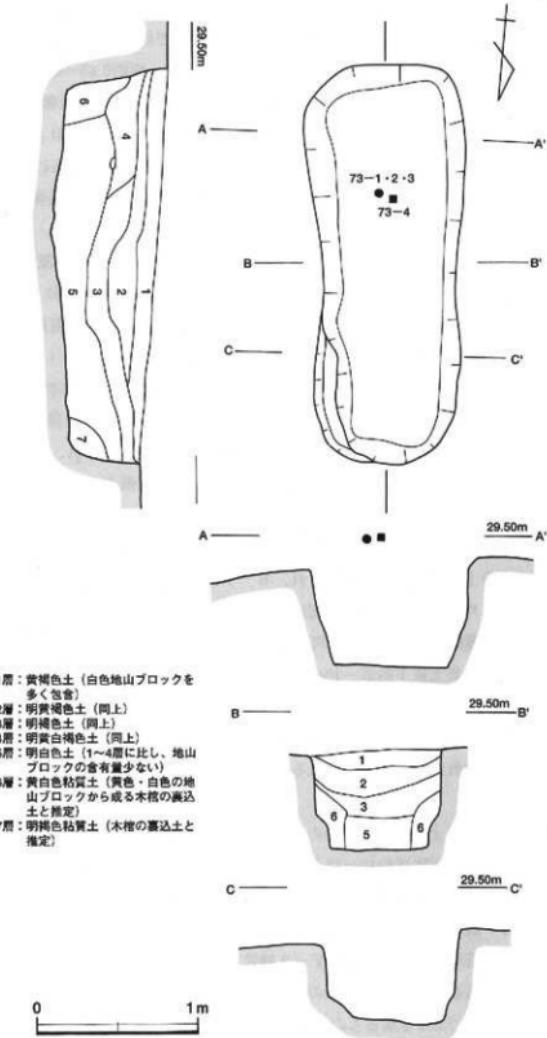
覆土 (第72図) 土壤内覆土は、最上層の黄褐色土(1層)以下、明黄褐色土(2層)、明褐色土(3層)、明白褐色土(4層)、明白色土(5層)、黄白色粘質土(6層)、明褐色粘質土(7層)の七層に大別され、比較的単純な層序関係を示す。このうち6・7層は、しまりのある緻

色を呈し、胎土には径1~2mmの微細砂粒を含む。小片につき時期は判然としないが、弥生時代後期後半（松本編年出雲・隱岐V-3様式）頃の所産に位置づけられよう。

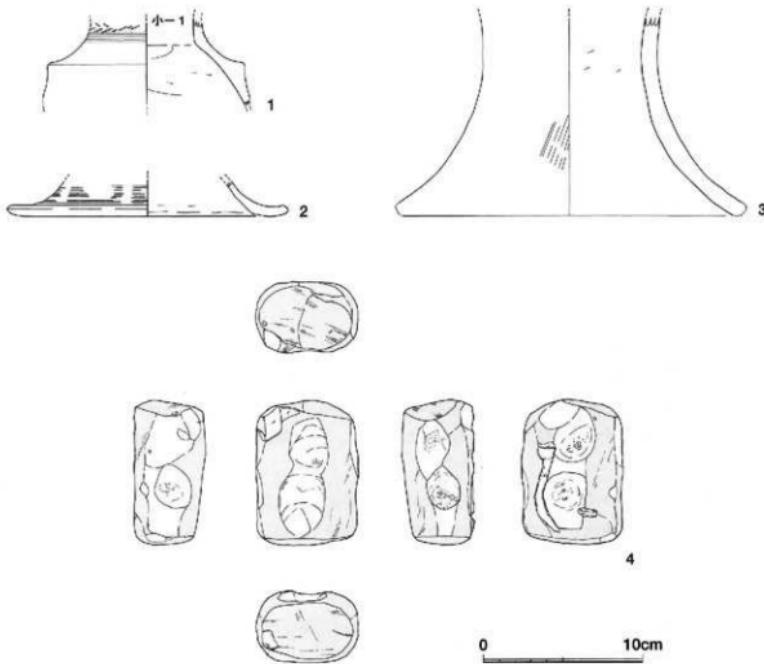
73-3は、土壤直上の表土直下から出土した器台の筒部～脚台部の破片である。全周の約4分の

1が残存し、脚端部を欠損するが、復元底径21cm前後を測るであろう。器壁は厚さ約1cm前後と厚手で、筒部から脚端部に向かって外湾しながら「ハ」の字状に大きく開脚するものである。調整は、器表の風化が進み判然としないが、外面にはヨコナデ、極一部にハケメラしき痕跡、内面上半にはヘラケズリの痕跡が微かに観察される。焼成は良好で内外面黄褐色を呈し、胎土には径1~3mmの砂粒を多く含む。時期は詳細不明であるが、共伴する土器から弥生時代後期後半頃の所産と位置づけておく。

73-4は、土壤直上の表土直下から出土した磨石である。上記した弥生土器と共に出土している。全体に丸みを帯びていて、直方体状を呈し、図示のとおり、ほぼ全面に擦痕や敲



第72図 北I区SK07実測図 (S=1:30)
(●■は遺物出土地点を示し、遺物番号は遺物実測図と対応する)



第73図 北I区SK07付近出土遺物実測図 (S=1:3)
(アミ部分は使用痕が認められる箇所を示す)

打痕が認められる。このうち四面にはいびつな形状の浅い凹面があり、そこには敲打痕が観察される。全長9.0cm、最大幅6.4cm、最大厚4.5cm、重量429.38gを測り、灰白色を呈している。顔料等の付着は認められない。岩種は角閃石ディサイトか角閃石安山岩の可能性が高いとされ、産出地は不明である。

被葬者の頭位 土壙底面幅、小口幅の大小及び遺物の出土地点から察するに、被葬者の頭位は南方に向にあったと推定される。

<土壙墓群の時期と性格>

検出された土壙墓は、東西約6.5m、南北約3mの範囲に、ほぼ主軸を平行させて近在する一群の墓群と考えられる。被葬者の頭位方向が全て南方向に推定されること、SK05・07・08から出土したいわゆる墓上の「標石」、「供獻土器」類の出土状況にみる共通性は、埋葬に関する共通の儀礼、觀念の存在を想起させるものである。

それぞれの土壙の規模や形状については類似してはいるが全く一致するものはない。しかし、その地山面以下の土壙底面の深さは、深いもの（SK05・07）と浅いもの（SK04・06・08）に二大別することが可能である（第64図）。各土壙の前後関係は、切り合いの認められたSK06→SK08の一組

しか明確にできなかったが、こうした土壤底面の深さが、場合によっては時間差を反映している可能性もある。

土壤墓群から出土した弥生土器片は小片が多く時期を確定することはできないが、時期を示唆する資料はいずれも弥生時代後期後半（松本編年出雲・隱岐V-3様式）頃の様相を呈した。各土壤墓の遺地状況、形態、規模、立地、遺物出土状況の共通性を重視し、ほぼ同時期の比較的短期間に営まれた土壤墓群としてとらえられよう。

なお、各土壤墓群の近接する状況、尾根頂部の立地、周辺墳丘墓（北I区1～4号墓）との位置関係、遺物出土状況等を総合的に勘案すると、これらの土壤墓群は一墳丘墓の主体部を構成していた可能性も検討の余地がある。

【土坑 北I区SK01・02・03・09】

位置と概要（第36・38・61図） 北I区調査区の中央部からやや西寄り、標高28.5～29.5m前後を測る尾根筋から若干北方へ外れた緩斜面上に位置する。北I区4号墓の北方に近接する地点である。4基の土坑は、類似する規模と構造を有しているので、その関連性を鑑み、ここで一括して報告する。

遺構検出面は、いずれも表土下約10～20cmほどで達する明確な地山面であった。從って壁面、底面ともに地山面で検出されている。付近の地表面は削平や土砂流失による旧地形の改変が著しく、本来の掘り込み面（掘り方）はさらに上層であった可能性もあるが判然としない。

南方に隣接する北I区4号墓の石列、墳丘との関係については、土層観察の限り、共存関係、前後関係は不明と言わざるを得ない。ただし、SK02の周辺及び堆積土中からは4号墓の石列と同様の石材が不規則に散在して出土している。現地の状況からは、北I区4号墓に伴う石列が損壊したのち、SK02が掘削された蓋然性が高いと推察されたが、断定はできない。

以下、遺構の調査順に従いSK01・02・03・09と呼称し詳述する。

<SK01>

位置（第38・61図） 4号墓の墳丘内に想定される標高約28.75m前後の地点に位置し、西方約0.5mには4号墓主体部が、東方約1mにはSK02が近在している。

形状・規模（第74図） 平面形はいびつな楕円形状を呈し、縦横



第74図 北I区SK01実測図 (S=1:30)

の断面形はそれぞれ凹形、逆台形状を呈している。底面は、わずかな起伏はあるがほぼ平坦である。規模は、遺構検出面上で長軸径1.36m、短軸径約0.94m、深さ最大約0.28m、土坑底面で長軸径1.2m、短軸径約0.72mを測る。土坑の主軸（長軸）は、N-90°-Wをとる。およそ東西方向に伸びる尾根筋に対して、土坑の主軸（長軸）がほぼ平行していることになる。

覆土（第74図） 図示したとおり、褐色系の二層に分層され比較的単純な層序関係が認められる。遺構周辺の地山で認められる地山ブロックを包含しており、おそらく土坑の掘削土によって埋め戻されたことが推察される。

出土遺物 土坑内および土坑上層、周辺から遺物は出土しなかった。



第75図 北I区SK02実測図・同砾石出土状況図
(S=1:30)

<SK02>

位置（第38・61図） 4号墓東辺石列の北方、標高約29m前後に位置する。4号墓東辺石列の主軸延長線上に一部が重なり、西方約1mにはSK01が、東方約2mにはSK03が近在している。

形状・規模（第75図） 平面形はいびつな橢円形状を呈し、縦横の断面形はそれぞれ不整な逆台形状を呈している。底面は、わずかな起伏はあるがほぼ平坦である。規模は、遺構検出面上で長軸径1.5m、短軸径約1.1m、深さ最大で約0.26m、土坑底面で長軸径1.16m、短軸径約0.85mを測る。土坑の主軸（長軸）は、N-83°-Eをとる。およそ東西方向に伸びる尾根筋に対して、土坑の主軸（長軸）がほぼ平行していることになる。

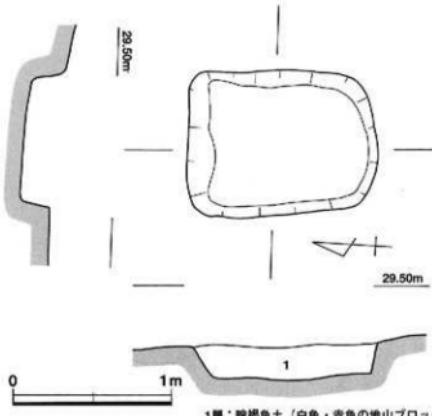
覆土（第75図） 図示したとおり、淡褐色土が単層堆積していた。既述のとおり、4号墓の石列材の一部と推察される削石が、同層の上層と遺構外に散在していた。また、遺構周辺の地山で認められる地山ブロックを多量に包含しており、おそらく土坑の掘削土によって埋め戻されたことが推察される。

出土遺物 土坑内および土坑上層、周辺から割り石の他、遺物は出土しなかった。

<SK03>

位置（第38図） SK02の東方約2m、標高約29.10m付近に位置する。想定される4号墓の墳丘外にあたることは間違いない。

形状・規模（第76図） 平面形は隅丸長方形状を呈し、縦横の断面形はそれぞれ逆台形状を呈して

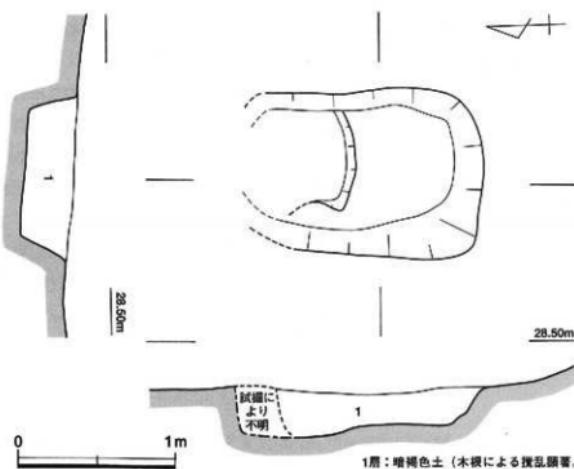


第76図 北I区SK03実測図 (S=1:30)

出土遺物 土坑内および土坑上層、周辺から、遺物は出土しなかった。

<SK09>

位置（第38図） 4号墓主体部の北西下方約1.5m、標高約28.25m前後に位置する。およそ東方約2.8mにはSK01が近在している。

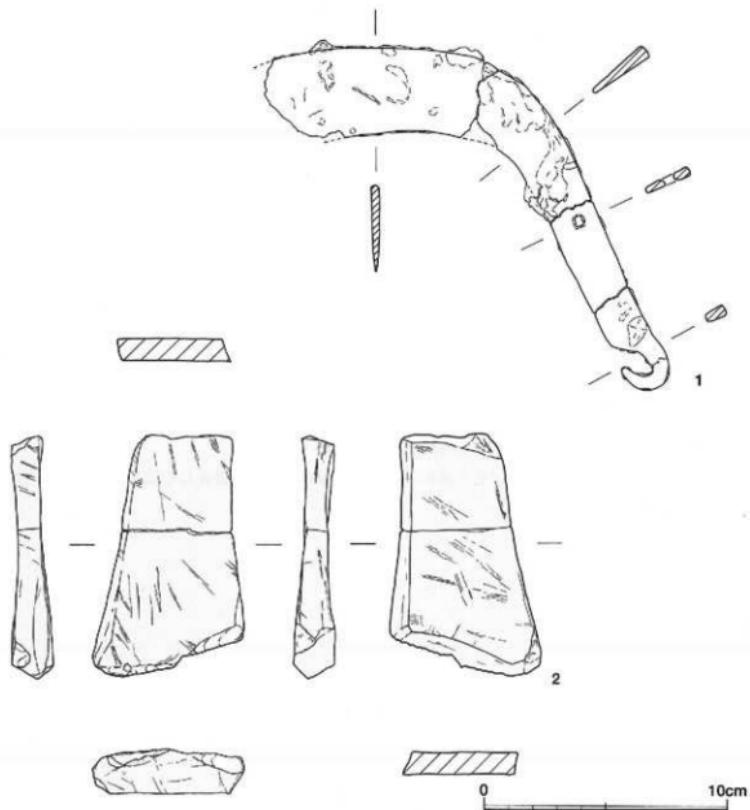


第77図 北I区SK09実測図 (S=1:30)

いる。底面は、わずかな起伏はあるがほぼ平坦である。規模は、遺構検出面上面で長軸1.2m、短軸約0.9m、深さ最大約0.24m、土坑底面で長軸約0.96m、短軸約0.73mを測る。土坑の主軸（長軸）は、N-4°-Wをとる。およそ東西方向に伸びる尾根筋に対して、土坑の主軸（長軸）がほぼ直交していることになる。

覆土（第76図） 暗褐色土が単層堆積していた。遺構周辺の地山で認められる地山ブロックを包含しており、おそらく土坑の掘削土によって埋め戻されたことが推察される。

形狀・規模（第77図） 平面形は隅丸長方形状を呈すると推察されるが、北方壁面はトレンチ調査の際誤って掘り抜いており詳細不明である。底面には緩やかな段が認められたが各面とも平坦である。規模は、遺構検出面上面で長軸1.35m以上、短軸約1.03m、深



第78図 北I区SK09出土遺物実測図 (S=1:2)
(アミ部分は使用痕が認められる箇所を示す)

さ最大で約0.36m、土坑底面で長軸1.16m以上、短軸約0.73mを測る。土坑の主軸（長軸）は、南北方向にあり、N-2°-Eをとる。およそ東西方向に伸びる尾根筋に対して、土坑の主軸（長軸）がほぼ直交していることになる。

覆土・遺物出土状況（第77図） 図示したとおり、暗褐色土が単層堆積していた。遺構周辺の地山で認められる地山ブロックを多量に包含しており、おそらく土坑の掘削土によって埋め戻されたことが推察される。

同層の下層で底面に近い箇所からは鉄器1点（78-1）が、中層で東壁面付近からは砥石1点（78-2）が出土している。なお、出土状況を図化する前に誤って採取してしまったので、写真的み（図版65-2）を掲載して報告にかえる。

出土遺物（第78図） 78-1は、覆土下層から出土した鉄製の鎌である。切先部を欠損しており、残存部最大長約21cm、刃部最大幅約3.7cm、刃部棟幅3mm以下、重量62.73gを測る。部分的には鏽

化が著しく進んでいる。茎先端部は、鉤の手状に屈曲している。茎尻から約7.3cm上方には、約4×3mmを測る方形状の目釘孔が認められる。時期は判然としないが、形態からすると中世後半から近世前半頃の所産であろうか。

78-2は、覆土上層の搅乱土中から出土した砥石である。上端面を除きほぼ全面が使用面で、顯著な擦痕が認められる。全長9.9cm、最大幅6.2cm、厚さ0.9~1.7cm、重量103.73gを測る。岩種は流紋岩で産地は不明である。

<土坑の時期と性格>

SK09は唯一遺物を伴出しており、鎌の形態からおよそ中近世頃という漠然とした時期比定が可能である。遺構の性格は、鎌と砥石を副葬品とする土塙墓の可能性がある。

一方、この他のSK01・02・03については、共伴遺物がなく時期、性格ともに判然としない。ただし、SK09と共に同一丘陵緩斜面上に直線的に並んでいること、土坑の規模や形態が類似すること、主軸方向が南北方向（SK03・09）と東西方向（SK01・02）を指向し規則性がうかがえることなど共通する属性は、これらの密接な関係性を示唆している。

この点を重視すれば、これらはそう遠からぬ時期に掘られた十坑群もしくは土塙墓群であったと類推することが可能であろう。

第2節 北Ⅱ区の遺構と遺物

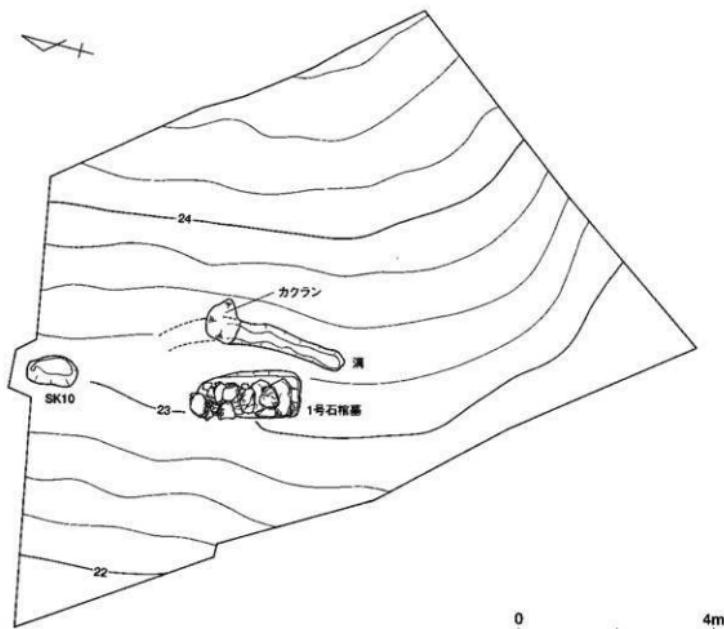
概要 (第79図) 標高約22~24mを測る尾根筋の西向きの緩斜面から、土坑1基、溝を伴う石棺墓1基を検出した。遺構周辺からは、須恵器、土師器の小片約10点、石棺内からは、水晶製勾玉木成品1点が出土している。

基本層序 北Ⅰ区同様、表土以下地山面までの土砂堆積は約10~30cmと浅く、木痕が著しくはびこる暗褐色土が単層堆積していた。遺構検出面は、明確な地山面で、遺物は掘削上中もしくは遺構内堆積土中から出土している。

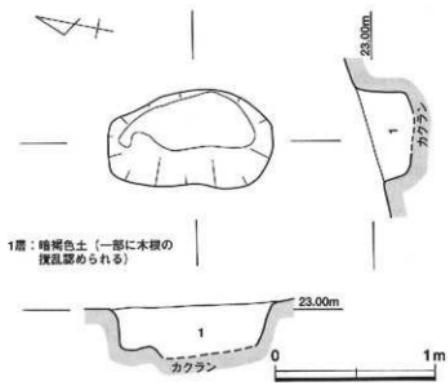
<SK10> (第79・80図)

位置 標高約22mを測る尾根筋の緩斜面に位置する土坑である。南側約2.4mには北Ⅱ区1号石棺墓が近在する。主軸(長軸)方向は、斜面の等高線とほぼ平行している。

形状・規模 平面形はいびつな方形状を呈し、縦横の断面形はいずれも不整な逆台形状を呈している。規模は、遺構検出面上面(地山面)で長軸1.02m、短軸0.58m、深さ最大で約0.38mを測る。底面は、搅乱のため判然としないが、およそ平坦を意図したものと察せられる。土坑の主軸(長軸)は、N-11°-Wをとる。



第79図 北Ⅱ区調査後地形測量図・遺構配置図 (S=1:100)



第80図 北II区SK10実測図 (S=1:30)

時期と性格 遺物が出土せず時期、性格ともに不明である。

<北II区1号石棺墓> (第79・81・82・83・84図)

調査前の状況と位置 (第35図) 調査前の現地は、主に植林と雑木林からなる山林であった。トレント調査の過程で、表土下約10~20cmから偶然蓋石が検出されたのが発見の契機である。

石棺墓は、標高約23m前後を測る尾根筋の緩斜面に位置し、北側約2mにSK10が近在している。西方眼下には、玉湯町布志名の小平野が広がる。

また、石棺の斜面上方からは弧状の周溝も検出されている。

周溝 (第81図) 石棺の東方約0.4~1mの斜面上方から検出された、平面形が若干弓なりを呈する浅い小溝である。石棺の上方斜面を弧状に画するような位置に掘られており、この石棺墓に付随する施設、周溝と判断される。遺構の長軸はほぼ南北方向を指向している。周溝の北端部は擾乱及び削平によって判然としないが、残存部からさりに北方へと弧を描いて続いているものと推察される。断面形は、U字状もしくは不整な逆台形状を呈しており一定していない。規模は、残存部遺構検出上面の長さ約2.3m、幅0.4~0.48m、深さ約0.15m以内を測る。覆土には、淡黒褐色土が単層堆積していたが、遺物は検出されなかった。

石棺 (第81・82・83図) 割石を組み合わせた箱式石棺である。側石と底石が不完全で特徴的な配石構造を有している。

蓋石は、主として大小約10枚の扁平な板状石を一部二重に重ねながら並置している。北側小口付近の蓋石の一部は割れて棺内に埋没していた。石材は、他の棺材よりも一際大きく厚手の材を使用している。蓋石を除去すると棺内には暗褐色土(1層)、灰褐色土(2層)、褐色粘質土(3層)が堆積していたが、このうち3層は地山風化上である可能性が高い。1・2層は棺外から流入した土砂が大半と推察される。棺外、墓壇内には表土層から漸位的に変化して堆積する暗褐色土が単層堆積し、特別の層序関係は認識できなかった。

蓋石と側石、小口石の隙間には特に粘土等による目張りは認められず、棺外から土砂が大量に流

覆土・遺物出土状況 遺構内には暗褐色土の単層堆積が認められた。土層観察による限り、素掘りの土坑であったと推定される。遺構検出面(地山)から上層の現地表面までは、約20cm程の堆積土が確認された。土坑本来の掘り込み面(掘り方)はこの上層中にあった可能性もあるが、現状では判然としない。

土坑内の中層付近から、固化に耐えない須恵器、土師器の細小片1~2点が出土している。遺構に直接伴わず、土砂と共に偶然流入したものと判断された。

入した状況が伺える。

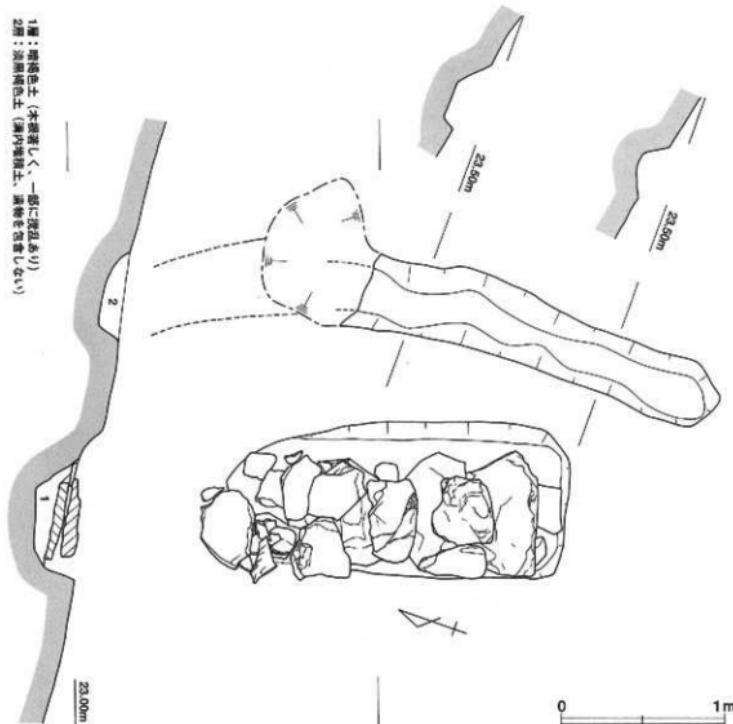
石棺の主軸（長軸）は、N-16°-Wをとり南北方向を指向している。

棺床は、北側小口付近に1枚のみ扁平な底石が検出された。棺床面はこの底石上面および覆土の3層上面あたりと推定され、ほぼ平坦かつ水平に保たれている。

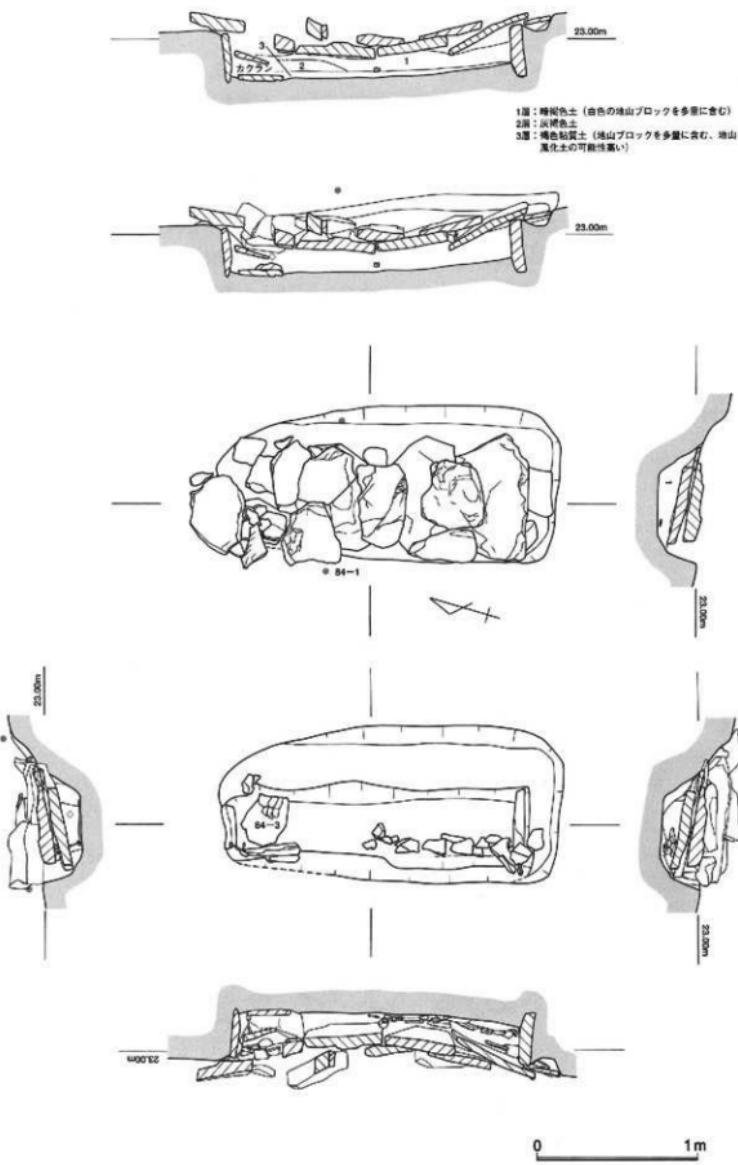
明確な側石は、西壁の北側小口付近に1枚のみ認められる。長方形状を呈する板状石を墓壇壁面に沿って立て据えている。同じく西側壁沿いの南半付近には長径10cm前後の扁平な礫石約10点が並置されていた。しかし、これのみでは、側石、底石の機能は全く果たさない。何故ここに存在するのかその機能は判然としない。なお、この小型の礫石と墓壇西壁との間には、幅約10cmの隙間が設えられている。想像を逞しくするならば、ここに木材等を利用した側壁をはめ込んだとも類推されよう。

小口石は、両小口に一枚ずつ正方形のやや大型の板状石を立て据えている。下端部は地山面に掘り据えられており安定している。

このように、この石棺では特異な配石がみられた。おそらく墓壇の壁面を利用して側石の設置を



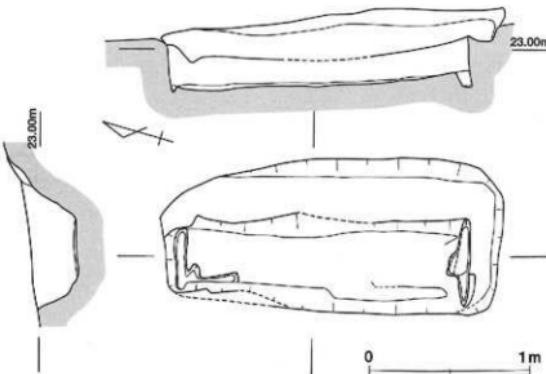
第81図 北Ⅱ区1号石棺墓検出状況・同土層断面実測図 (S=1:30)



第82図 北II区1号石館墓実測図・同遺物出土状況図 (S=1:30)
 (●土師器 ○水晶未成品 遺物番号は遺物実測図と対応する)

省いたか、あるいは木材等を側壁に用いた可能性が推察される。しかし、土層観察結果による限り、木材等による側壁を使用した痕跡は見い出しが難かった。

規模は棺床付近の内法で、長軸約1.75m、短軸（墓壙の両側壁間）約0.31m、深さ（北側小口石上端面から底石上面までの間）



第83図 北Ⅱ区1号石棺墓墓壙掘り方実測図 (S=1:30)

は約0.27mを測る。各石材間に粘土等による目張りは認められなかったが、隙間を小砾石を利用して埋めようとする意図は看取された。

石棺材の岩種は全て、南区の石棺墓等と同様の板状節理した安山岩からなり、遺跡周辺（松江市乃白～忌部周辺）で容易に採取できるものを使用している。

墓壙（第83図） 石棺を納めた墓壙は、明確な遺構検出面（地山面）においていびつな隅丸長方形状を呈し、一部二段掘りとも呼びうる構造を有している。それは、図示したとおり、この墓壙が石棺、自体を埋設するための掘り方である土壙（二段面）と、その土壙を大きく取り囲む浅い土壙（一段面）の二つの土壙から構成されているからである。遺構の検出状況から、これらは同一遺構ととらえて良い。

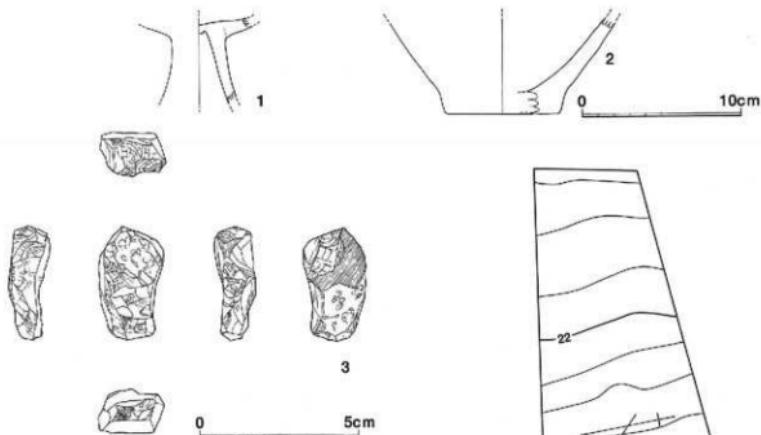
一段目の浅い土壙は、石棺の東側壁、南側小口石の棺外方向へと広がりをみせる大きなものである。土壙の西側壁は、二段目の土壙と壁面を共有している。規模は、長軸約2.05m、短軸約0.95m、一段目の平坦面までの深さ約0.3m以下、二段目の土壙底面までの深さ0.46m以下を測る。石棺蓋石の東端部は全てこの一段目の緩斜面上に置かれていた。

この浅い土壙の西側壁と北側壁の一部に沿って石棺自身の掘り方である二段目の土壙が偏在する。この土壙は、小口石の幅よりやや大きめに掘られており、両側小口石と西側石の底面に石棺材の形状に合わせて、石を安定して据え置くための浅い溝を掘り窪めている。底面は若干の起伏があるがほぼ平坦である。規模は、一段目における遺構検出面（地山面）で、長軸約1.9m、短軸約0.44m、そこから土壙底面までの深さ最大で約0.33mを測る。

墓壙内覆土（石棺外）には、表土下暗褐色土の単層堆積が観察され分層はしかねる状況にあった。遺物出土状況と遺物（第82・84図）

石棺墓周辺の表土下暗褐色土層からは、土師器片数点が出土している。ほとんどが、実測に耐えない細小片であり、蓋石の西側にはほぼ隣接して出土した土師器片のみを図化した。

84-1は、石棺石蓋の西に近接して、暗褐色土から出土した土師器の高坏片である。杯部から脚部にかけて約4分の1が残存する。器表は風化が著しく調整、焼成は不明である。黄褐色を呈し、



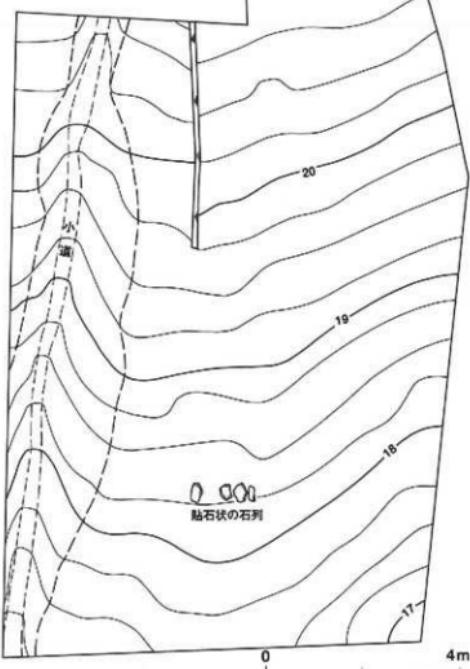
第84図 北II・III区出土遺物実測図
(1~2はS=1:3、3はS=2:3)

胎土には径1~2mmの微細砂粒を含む。出土状況から、石棺墓に共伴するものと推定される。

一方、棺内北側小口付近の木痕による搅乱土層の最下層からは、水晶製勾玉の未成品1点が出土している。

84-3は、棺内搅乱土中から出土した水晶製勾玉未成品である。表面に敲打痕と一部研磨痕が認められ、反対面には研磨痕が認められる。上端面の一部には自然面を残す。全長3.6cm、最大幅2.0cm、最大厚1.35cm、重量11.60gを測る。搅乱土層中出土ではあるが、遺構・遺物の性格上、石棺墓の副葬品に推定される。

被葬者の頭位 判然としないが、蓋石・墓壙・石棺幅の大小からすると南方小口側が頭位方向と察せられる。ただし、副葬品に比定し得る水晶製勾玉が北側小口付近か



第85図 北III区調査後地形測量図・造構配置図 (S=1:100)